4度(たび)
戦国魔神ゴーショーグン
AM JuJu
覚醒する密林
作／首藤剛志
絵／天野喜孝

4度戦国魔神ゴーショーグン 覚醒する密林

首藤剛志

昭和24年8月18日、福岡県生まれ。レーザーディスクファンを自称する首藤氏。執筆の合い間にはディスクを見まくるのが日課。お金がよくつづくものだと感心していたら、すべて貸しディスク。安心しました。

天野喜孝

昭和27年3月26日、静岡県生まれ。第4作目ということで「ゴーショーグン」も小説独自の魅力で勝負する時期。絵柄のほうも意識的にアニメからは少し離れてみたと天野氏はいう。諸君のご意見お待ちしています。

4度
戦国魔神
ゴーショーグン
覚醒する密林
首藤剛志

第7章　やすらぎの村・望郷編――地球を遠く離れて

第８章　地獄の密林——疫病神はけじめをつける

第９章　肉林の要塞——捨てたら二度と戻らない

目　次

絵／天野喜孝

4
戦国魔神
ゴーショーグン
覚醒する密林
首藤剛志

プロローグ――翼のある黒豹

宇宙のとある惑星の密林で、一頭の黒豹が生まれた。
その黒豹には翼があった。
翼のある黒豹は、その姿が他の黒豹と違うことを自覚していたが、それが何を意味するかは知らなかった。
異形であるがゆえに、家族から疎外された黒豹は、幼獣の時からすでに群れを離れ、密林の奥に姿を消した。
孤高に生きる黒豹は、肉食獣でありながら狩りをしなかった。
密林の恵みである果実を食べ、花の蜜を吸って生きた。
それが、この黒豹の性に合っていた。
そんなある夜、ふと目覚めた黒豹は、密林の声を聞いた。
どこからともなく黒豹に語りかけるその声は、黒豹に翼の使い方、空を飛ぶ術を教えた。
その教えにしたがって、大空を翔けるようになった黒豹は、さらに高みを飛びたいと思った。
ある夜、星空を見上げる黒豹に、密林の声は言った。
――いつか、お前に、あの星空を飛べる日が来る。それも遠くない、いつかに――
翼のある黒豹は、その日を待つことにした。

第1章

目覚めて突然に

寝起きの悪さに気をつけて

真吾、キリー、レミー、そしてブンドル、カットナル、ケルナグールの六人を乗せた宇宙船は、果てしない宇宙を飛んでいた。
もう十年以上、光速で飛行しながらも、宇宙船の中の時は、ほとんど流れていなかった。
冬眠カプセルの中で眠る六人は、眠りはじめた日から、歳をとってはいなかった。
もっとも、今、自分達が宇宙のどの位置にいるのかも、そして宇宙が誕生してから、どれほどの時間がたっているのかも知らぬ地球の六人にとって、冬眠している間の時の流れなど、考えてみても仕方のないことなのかもしれなかった。
漆黒の宇宙は、どこまでも続き、しかし、終わりのない旅があるはずもなく、そろそろ六人に目覚めの時が迫っていた。

＊

宇宙船の旅立ちから十一年が経った。宇宙船は光速ドライブから解き放たれ、通常のスピードに戻った。
今、宇宙船は、広大な宇宙の真ん中で、一人ぼっちで浮かんでいる。
船内の設備が作動をはじめ、加熱装置がかすかな音を響かせ、冬眠カプセルの温度が上がりはじめた。
それからたっぷり三日間かけて、冬眠していた六人の体は、ゆっくりと元へ戻っていった。

＊

真吾の冬眠カプセルのカバーが、自動的に開いていく。
真吾は、むっくりと体を起こすと、あたりを見回した。
最初、真吾は、なぜ自分がこんな所に眠っているのか、事態を把握しきれなかった。
だが、隣のカプセルの中で、枕に足をのせ、逆様になって眠っているキリーを見て、全てを思いだした。
――そうか、俺達は、あの馬鹿げた星を、この宇宙船で飛びだして……。ここが目的地だとすれば、あれから十一年たっている訳か――
真吾は、再びキリーに目をやり苦笑した。
――それにしてもキリーの奴、なんて寝相だ。
たぶん夢の中で、ニューヨークのブロンクスのやくざどもと大立ち回りでもやらかしているんだろう……。ま、好きにさせとけ……。でもって、レミーは？――
真吾は、頭を上げてレミーのカプセルを見た。
親指をくちびるで吸いながら、まるで子供のようにあどけない顔で眠っていた。
レミーの、戦闘でいつも見せる機敏な身のこなしを見慣れた真吾にとっては、彼女がこんなに幼くて、やすらかな表情で眠っているのが、少しだけ意外な気がした。
――こりゃ、ファイターというより、十六、七の夢多き小娘だな……。おっと、女性の寝顔をまじまじ見つめるなんて、俺も悪趣味だね……。ごめんよ、レミー――
真吾は、冬眠カプセルから立ち上がると、大きくのびをした。
長い眠りのためか、足が歩くことに慣れていない。

それでも、真吾が、まず最初にしたことは、腰に下げたレーザー銃のチェック——身についたファイターの習性だった。

と、そのとき、背後でゴツンというにぶい音がした。

「イテテ！　このッ、何しやがるんでぇ」

カプセルのカバーが開き、頭からころがり落ちたキリーがわめいた。

「キリー、誰も何もしちゃいないよ。ハードボイルド、大いなる眠りのお目覚めにしちゃ、やけに騒がしいな」

「あれ？　真吾……お前、いつブロンクスに来たんだい？」

やはり、キリーは故里（ふるさと）のブロンクスの夢を見ていたらしい。

「あいにく、ここは、お気に入りの暗黒街じゃない。外は十分、暗いけれどな」

キリーは、あたりを見回して、やっとここが宇宙船の中だということを思い出した。

「そか……でもって、レミーちゃんは大丈夫かな？」

「お前、すぐ女のことだな」

「お前だってそうでしょうが。今のところ女性といえば、俺達にはレミーちゃんしかいない訳だろ。お互いフェアにやりましょうね」

「彼女は隣でおやすみだ」

キリーはレミーのカプセルをのぞき込んだ。

「Ｏｈ！　我らが眠れる森のレミーちゃん。健在みたいね」

「ああ、あれから十一年も経ったなんて思えないね。かえって若々しくなったみたいだ」

「苦労してねえからな。眠ってるだけで……」
「睡眠不足は美容の敵さ。眠らせておけよ」
「おいよ。寝起きの機嫌の悪い女ほど、始末におえねえもんはないからな」
キリーはニヤリと笑って、窓の外を見た。
「で、一体、ここは宇宙の何番地なんだい？」
窓の外には、星影さえ見えない。
「町名、ストリートナンバー、共になしか」
「操縦室に行けば、何か分かるかもしれんな」
二人は、冬眠カプセルの船室から操縦室へ続く通路へ出た。
そのときだった。
操縦室の方から、絶え間なく床を叩く音を聞いた。
何かがいる――。
真吾とキリーは、銃を抜いて、身がまえながら通路を進んでいった。
操縦室のドアは閉じていた。そして、その音は確かに操縦室の中だ。
頷きあった二人は、操縦席のドアを蹴破るように一気に中に飛び込んだ。
そして二人は、呆然とその場に立ちすくんだ。
二人がそこに見たものは……。
「お目覚めのようだね」
ブンドルだった。

それも、ジョギングウェアを着て、ルームランナーのような機械の上でランニングをしていたのだった。

真吾と顔を見合わせたキリーは、ブンドルに聞いた。

「だんな。そこで何をしている訳？」

「十年以上の眠りに、さすがの私の体もなまっている。さいわい、この宇宙船には健康器具が乗せてあった。諸君もやってみたらいかがかな」

真吾は、自分が最初に目覚めた男でなかったことに少しひっかかって、ぶっきらぼうに言った。

「いつから起きていたんだ？」

「わたしは寝起きのいい質でね。おまけに、長い間、酒も飲んでいなかったから二日酔いで悩まずに済んだ」

ブンドルは、傍のテーブルの上にあるビン入りの赤い飲み物をグラスについで、二人に出した。

「どうかね、コーヒーも用意したが、健康にはこれが一番だ」

「？」

怪訝そうにグラスを受けとった二人に、

「朝起きて飲むなす科赤なす風味飲料、早い話がトマトジュースだ」

ブンドルがトマトジュース!?……。

思わずグラスを取り落としそうになった二人を尻目に、ブンドルは、今度はヘルスサイクルをこぎだした。

「俺、まだ寝惚けてんのかな？」

つぶやくキリーに真吾も頷いた。
「俺も頭痛がしてきた」
「諸君も汗を流した方が良い。風呂もわいているぞ」
「そりゃどうもごていねいに……」
キリーは気味悪気に真吾につぶやいた。
「ブンドル先生、イメージチェンジを考えているのかね？」
「さあな。もっとも、こんな棺桶みたいな宇宙船の中じゃ、宇宙美学もへったくれもないからな」
ブンドルは、二人のひそひそ話など意に介さぬように、今度はバーベルを持ちあげ始めた。
キリーは、そんなブンドルの姿に、アメリカでも有名だった日本の某小説家の名前を思いだした。
その小説家は美学を追求するあまり、ボディビルで体を鍛え、その果てが切腹して、自己の美学を完結したという。
「ブンチャン、ミシマを美学っちゃうつもりかもな」
「よせよ、悪い冗談は……」
真吾がひじでキリーを突いた。
「そうだよな。キン肉マンのブンドル、ぞっとしねえや」
二人は想像するのもおぞましいといった感じで肩をすくめあった。
「ファイター諸君、何を話しているのか知らぬが、そんなにのんびりしていていいのかな？」
ブンドルが二人に言った。
「えっ？」

「どうやら、私達は、こんなことをしなくても、運動不足にならずにすみそうだ。美しいことが待っていればいいのだがな」
ブンドルは、操縦席の窓の外を見つめた。
一つ、また一つ、それまで星影さえ見えなかった宇宙の闇に、光が浮かび上がった。
やがて、六人の宇宙船は無数の光に囲まれた。
それは、真吾達が、今まで遭遇したこともない、宇宙船の大船団だった。
「どこの星の船団だ?」
真吾の言葉に、キリーは投げやりに答えた。
「聞いても答えられないこと、聞かないでよ」
ブンドルがつぶやいた。
「奴らに敵意があれば、すぐに答えは出る」
「敵意があったら、こっちに勝ち目はないぜ。とんずらの用意すっか」
「もう遅い……」
船団の中のひときわ大きな宇宙船から、槍のようなミサイルが発射された。
回避する時間はなかった。
ミサイルは、にぶい振動を宇宙船に響かせて横腹に突きささった。
だが、当然、次に起こるはずの爆発は……なかった。
その代わり、操縦室の警報がけたたましく鳴り始めた。
生物反応——何者かが、宇宙船に侵入したことを物語っている。

場所は、レミー達がまだ眠っている冬眠カプセルの船室——。

真吾達は顔色を変え、銃を抜き放って、冬眠カプセルの船室へ急いだ。

＊

レミーは夢を見ていた。

バラの花の咲き乱れる花壇の道を、レミーは走っていた。

なにもかもが輝いてみえた。

それはレミーが十代のはじめの頃だった。

パリの街の街娼の娘として生まれ、もの心つく前に母に死に別れたレミー……。

それでも、街の街娼達にかわいがられて、彼女達の援助で、一流の寄宿学校の教育を受けていた頃のレミーは、けっして不幸ではなかった。

厳格な寄宿舎だったけれど、街のつらい暮らしに比べたら夢のようだった。

二十数年のレミーの人生で、一番、充足した時期かもしれなかった。

まわりは上流階級の子供達ばかりで、レミーを相手にしてはくれなかったけれど、一人ぼっちは慣れていたし、休み時間にはとっても楽しみなことがあった。

そう、寄宿舎の庭の隅に大きな楡の木があって、休み時間になるとレミーは、猫のようにするすると木に登って、枝の上であたりの景色を眺めるのが日課だった。

——景色を眺めるといっても……。エヘ……、実は、枝の上からは隣の学校のテニスコートが見えたりして。そこでは、男の子達がはつらつとプレーしていたりして。でもって……、その中に、

かなりキリッとしたシャープな顔立ちの子がいて……。その頃のわたしって、相当、美形好みで……。今でも若干、その傾向はあったりするけど……。それで、ある日、その子が木の上のわたしに気がついて、ヒラヒラと手をふってくれて……。わたし、ウィンクして返すなんて大胆なことしてみたりして……。なんか、ホント、胸がキュンて音、出したみたいで……。うん、結局、その子とは話もしなけりゃ、名前も知らずに終わったけれど……。そりゃそうよね。その頃のわたしって、十歳になったばかりのちょっと内気な女の子でさ……。だけどあれが結局、わたしの初恋だったりして……。意外とオクテなのよね……。でもって、あとの男運ときたらメッチャクチャ……。合掌……。でも、だから、なおさら思うわけよね、あの頃って最高って——

——ほら、今日も、わたし、楡の木に登って、枝にスヌーピーのハンケチをおいて坐って……、テニスコートを白球が飛びかって……、あの子のボレーが決まって……、くるりと振り返った、あの子が、「やったぜ」って感じで、わたしにVサイン——

——ガタ、ガタ！　枝がゆれた。あれ？　地震かな？　いやだ、わたし落っこっちゃう——

——あっ、あの子の姿がかすんでいく。どうして……。ああ、そうか。これ、もしかしたら夢なんですね……。そか、夢か……。でも、こんな夢を見たのはひさしぶり……。楽しい時間をありがとう……。シーユーアゲイン、わたしの夢——

ガタン！　ガタン！

レミーの体のゆれが激しくなる。

レミーは、ぼんやりと目を開けた。

「あん？」

何かが、レミーの顔をのぞき込んでいる。
「なんじゃ？」
レミーの意識がはっきりしてきた。
目の前の何かを、確かめようと、じっと見つめた。
それは、何かの生き物だった。
ナメクジ？　レミーが、その姿から連想した生物は、ヒルかナメクジだった。
だが、それには、赤く焼けただれたような肌によどんだ目が三つあり、ベタッと粘液質のよだれをたらす口の中で鋭い牙がガチガチと交錯していた。
触角のような無数の足が、レミーのカプセルをこじあけようとして覆いかぶさっている。
しかも、カプセルの大きさから計ると、そいつの体長は四メートルを越えるだろう。
――これも夢？　悪夢？――
だが、カプセルにできた僅かな隙間から差し込まれた触角の、濡れた肌ざわりを頰に感じたとき、
レミーは叫ぶはずの悲鳴を必死でかみ殺した。
――夢じゃない！　でも、何!?　これは!?　わたしはどうなっているの？　いけない、あわてちゃ……。落ちつくんだ。声をだして相手を刺激しちゃいけない――
レミーは腰に手をやった。
キリーから貰って以来、愛用の四十四口径マグナムの手ざわりがある。
レミーは、銃を胸の前にかまえた。
カプセルの透明のカバーごしに、生き物の三つある目らしきものの中央に狙いをつけた。

こんな狭いカプセルの中から四十四口径のマグナムをぶっぱなしたらどうなるのか？……と一瞬、レミーは思った。
――だが、こいつの牙は、明らかにわたしを狙っている――
カプセルは激しく揺れ、カバーとの隙間はさらに広がっている。
カバーがはずれれば、レミーと生き物との距離は一メートルも離れていないのだ。
ズガーン!!
レミーは四十四口径を発射した。
カプセルのカバーのガラスがはじけとび、目の間にマグナム弾を叩き込まれた生き物は、船室の壁に飛ばされた。
だが、生き物は死ななかった。
黄色い体液をどろどろ流しながらも、体勢を整えるとカプセルのレミーに近づいてくる。
レミーは、カプセルから抜け出そうとした。
しかし身動きできない。
先刻の銃弾で、カプセルのカバーが故障したのだ。
「近よらないで！」
レミーは、さらに銃弾を生き物の体に叩き込んだ。
二発、三発、四発……。
レミーの腕前だ。命中しないはずはない。
だが、生き物は、その一撃一撃にただよろめくだけで、確実にレミーに近づいてくる。

五発、六発……カチン、カチン、弾がつきた。
ガチャ、ガチャ、交錯する生き物の牙の音が、レミーの耳元に迫る。
——冗談じゃないわ。夢から醒めたと思ったら、こんな奴にやられるなんて……、一体、どうなっているのよ！——
しかし、レミーにはどうしようもなかった。
レミーは絶叫した。
「もう、やだー!!」
次の瞬間、レミーの鼻先で、生き物の首が吹き飛んだ。
船室に飛びこんできた真吾が撃ったレーザー銃だった。
だが、首を失っても生き物は死ななかった。
生き物は、レミーから向きを変えると、真吾の方へ近づいていく。
どうやら、生き物は、真吾の持つレーザーのにぶい電磁音を目あてに動いているらしい。
真吾に続いたキリーとブンドルのレーザー銃が、次々と叩き込まれる。
生き物の体は、バラバラに弾け飛んだ。
それでも引き裂かれたそれぞれの部分は、ひくつきながら動いている。
三人が、その一つ一つにとどめを刺し、生き物が完全に動かなくなるまで、レーザー銃のカートリッジを四本、計二百発を空にしなければならなかった。
「大丈夫か？」
三人は、レミーのカプセルに駆け寄った。

「サンクス、最近、わたし、寝起きが悪いのよね」
先刻は、大いにあわてたレミーだったが、今はもう、いつものレミーをしっかり取り戻していた。
ブンドルがレミーに言った。
「目ざましにコーヒーを用意しておいたが、その必要もなさそうだね」
「モーニングコーヒーにしては、これ、カフェインが強すぎたわ」
真吾が、バラバラになった生き物の破片を調べながら言った。
「どうやら、地球でいうところの軟体動物の一種のようだな」
「しかし、どうしてこんなものを、わざわざミサイルで送り込んできたんだ？　俺達をやっつけるなら、ミサイルでもレーザーででも、簡単に撃ち落とせるだろうに」
キリーの言うのももっともだった。
六人の宇宙船を取り囲む大船団は、こちらの出方をうかがうように、じっとして動こうとはしない。
そのとき、冬眠カプセルの一つのカバーが開いた。
「いやあ、よく寝たわい」
大きくのびをしながら、カットナルが起き上がった。
「おう、お早いお目覚めじゃね。いよいよ我ら六人の、新しい人生の夜明けが始まった訳じゃ……
あら？」
カットナルは、船室の惨状に目を白黒させた。
「君らの人生はとっくに始まっとったようじゃね。こうしちゃおられん」

カットナルは、ケルナグールの冬眠カプセルを、がんがん叩いた。
「こら、ケルナグール、起きんか！　寝とる場合じゃありゃせんぞ」
冬眠時間はとっくに終わり、当然、目覚めていいはずのケルナグールだが、カットナルに無理矢理カバーを開けられ、ほっぺたを叩かれても、まだぼんやりしていた。
「もちっと……もちっと……わしゃ低血圧なんよ。おまえとは違うきに……もちっとね」
カットナルが、ただですら高い血圧をさらに上げて怒鳴り散らし、ブンドルが用意したコーヒーとトマトジュースをケトルいっぱい飲みほしても、ケルナグールは宇宙船に起きた事態を把握しきれなかった。

＊

不気味な生き物の侵入を受けてから、地球時間でいう丸々一日、宇宙船は謎の船団に取り囲まれたまま宇宙空間に漂っていた。
六人は船団と交信する方法も見つからず、相手の出方を待つよりなかった。
そして、最初に動きだしたのは船団側だった。
生き物を乗せたミサイルを発射した大型艦から、小型艦がゆっくりと飛び出し、六人の宇宙船の昇降部に横づけされた。
「たいへん長らくお待たせしました。我々はジル太陽系艦隊です。時間がかかりましたのは、あなた方の宇宙船に挿入いたしました探査機の調査結果の分析に手まどったためで、深くおわび申し上げます」

小型艦から流れてきた声は、英語だった。
なぜ英語なのか？　とまどう六人の気持ちを見透かすように、声は続いた。
「この言葉は、あなた達の話している言葉を、まことに失礼ながら探査機で盗聴させていただき、分析の後、話しております。ほぼ、完璧と自負しておりますが、いかがなものでしょう」
「畜生！　探査機なんてどこにあるってんだ」
吐き捨てるキリーに真吾がつぶやいた。
「おそらく、ぶちこまれたミサイルのことだろう」
探査機は、真吾のつぶやきすら盗聴できるらしく、小型艦から流れる声が答えた。
「その通りです。さらに申し付け加えるならば、我々はあなた方に抜き打ちテストをさせていただきました。おめでとうございます。あなた達はテストに合格されました」
「テスト？　なんのことだい。俺はガッコさんと感化院は苦手でね」
こういうときに減らず口を叩くのは、いつも決まってキリーだ。
「我々は、惑星ジルに住むゲズルという名の獰猛な生物を、テストとしてそちらに送り込みました。それを見事打ち倒したあなた方は、我々の星ジルに住む資格のある勇者達です。心から歓迎いたしますので、遠慮なく我々の船においで下さい」
一同は顔を見合わせた。
「こういう交渉は、政治家のわしが向いている」
カットナルが胸を張って、小型艦に向かって言った。
「冷静に話し合おう。我々は、あなた方には何の敵意もない。しかし、あなた方のやり方は、あま

りに強引すぎる。あなた方のテストで我々は乗員を失いかけたのです。我々が乗船を拒否したら、どうするつもりです？」
「あなた方の船を撃ち落とします。あなた方の船は、四日も前から我々の領界を侵犯しています。撃ち落とされて文句がいえますか？　あなた方に残されているのは、投降か、死か、それだけです」
「役に立たんな、お前の政治のかけひきとやらも、グフフフ」
苦笑するケルナグールにカットナルがわめいた。
「じゃかあしい。馬鹿笑いが似合いのお前が、苦笑などという奥ゆかしい笑いをすなっ！　ググク、これはもう政治的なかけひきではない。慇懃無礼、相手に有無を言わせぬ、まるで昔の我らドクーガのやり口ではないか」
ブンドルが頷いて言った。
「さよう。なれば我々のやることは一つ。逆らえば殺される。勝ち目は万に一つもない」
「そういうことみたい。命あってのもの種よね」
レミーが肩をすくめた。
「つっぱっても仕方ない。お代官様、お許し下さいだな」
こんなときには、一番つっぱるタイプの真吾がこう言えば、六人の気持ちは決まったも同然だ。
真吾は五人の顔を見回してから言った。
「ジル太陽系艦隊の諸君、我々は投降する。乗船の準備に三十分ほどいただきたい」
小型艦からの声が答えた。

「よろしい。お待ちしています」
「ありがとう」
そう言ってから、真吾は、さかんに目をしばたたかせた。
「どうした、目にごみでも入ったのか？」
ケルナグールが聞いた。
「ああ、先刻の異生物騒ぎで、この船室はほこりっぽくていけないよ」
だが、レミーもキリーもブンドルも、カットナルさえも気が付いていた。
それが、目のまばたきを使ったモールス信号だということを——しかもそれは、英語ではなく、文法形式の全く違う日本語のモールス信号だった。
日本語が片言しか分からないキリーにはじれったかったが、仕方なかった。
盗聴で、英語は分析されている。
たとえ音の聞こえることのない目のまばたきであっても、慎重を期するにこしたことはなかった。
真吾は、まばたきのモールス信号でこう言った。
——俺ハ、彼ラノヤリ方ヲ許スコトハデキナイ。彼ラヲダシヌクタメ、俺ハ全力ヲツクス——
ケルナグールをのぞいた四人がまばたきで答えた。
——同意。私モ、全力ヲツクス——
ケルナグールも答えることはできなかったが、同じ気持ちだろう。
——敵ヲアザムクタメ、我々ノ言動ハサマザマダガ、我々ハ最後マデ仲間デアルコトヲ確認シタイ——

四人は、微笑して答えた。

――了解――

レミーのまばたき信号は、ウィンクのようにチャーミングで、カットナルは年がいもなく赤面する自分を感じていた。

＊

小型艦に乗船する時間が来た。

六人が小型艦に昇降部から乗り込もうとしたとき、宇宙船の奥側の排出口から、ポリ袋のような包みが宇宙空間に吐き出された。

包みは、慣性でどんどん遠くへ飛んでいく。

小型艦の声がさっそく、六人をとがめた。

「あれは何かね」

ブンドルが答えた。

「我々が出した宇宙船のゴミだ。気になるなら、回収して調べればよかろう。地球には発(た)つ鳥、後をにごさず、という言葉がある。それが地球のしきたりだ」

小型艦は宇宙船から離れた。

ブンドルは、じっと遠ざかっていくゴミの包みを見つめていた。

すぐに、大型艦から別の小型船が出て、包みを回収したが、その中にはゴミらしいもの以外、何も見つけだせなかった。

第2章

緑の星

我らの武器はフライパン

六人を乗せた小型艦は、回収の準備を待つためか、大型艦の前方に一時停止した。
彼らは、次の瞬間、目のあたりに展開する光景に、思わず息を飲んだ。
「でけえなあ――」
キリーは、驚きとも溜め息ともつかぬ呟きをもらした。
彼らを歓迎するかのように大型艦の総ての窓に灯りがともったのだ。
六人が宇宙船から見た大型艦は、消灯していた本体から無数に伸びる塔の一つのほんの一部にすぎなかった。
闇の中に浮かび上がった本体は、もはや船とは呼べなかった。
宇宙に浮かぶ大都会――ニューヨークの夜景を見慣れたキリーにさえ目を見張る光景だった。
本体に比べれば、六人を乗せた小型艦など食卓に落ちた米の一粒よりも小さく見える。
小型艦は、ゆるやかに動き始めた。
六人に、大型艦がいかに巨大かを誇示するかのように、小型艦は群立する塔の間をすれすれにゆっくりと飛んだ。
「まるで、二十世紀終盤のSF映画のSFX（特撮）のような見せ方だな」
映画に詳しいブンドルが呟いた。
「未知との遭遇のマザーシップ？」
「スターウォーズのデススター」
「ブレードランナーの未来のロスアンジェルス」
真吾が当時のSF映画の名前を並べた。

「そう、みんな映画がお好きのようだね」

レミーがコクリと頷いて言った。

「七十ミリのドルビーサウンドで見たら、完璧にSFクラシックの再現ね」

ブンドルは、レミーに付け加えた。

「さらに、ジョン・ウィリアムズのシンフォニーもどきのBGMがつけばでき過ぎなのだが」

♬ジャジャジャン、ジャカジャーン

突然、カットナルが指揮者の手振りでスターウォーズのテーマを口ずさんでニヤリと笑った。

「わしもその手の派手な映画音楽好きでな」

だが、残念なことに、小型艦の中に、音楽らしいものは何一つ流れていなかった。

やがて小型艦は、大型艦の中心近くのひときわ大きな塔の巨大なハッチの中に吸い込まれていった。

*

小型艦から降りた六人は、先刻から聞こえている声の命ずるまま、チューブのような長い通路を走るオートロードに乗って、スポーツセンターのシャワールームのような部屋にやって来た。

「ジル太陽系艦隊母艦、ジルガにようこそ」

声の挨拶にカットナルが答えた。

「ようこそはいいが、あなた方が姿を見せぬのは、ちと失礼ではないかな」

カットナルにケルナグールが囁いた。

「見せられぬほど凄い姿の怪物かもしれんぞ」
あきらかに嘲笑をこめたニュアンスで答えがかえってきた。
「あなた方と同じ地球型の空気を吸って生きているジル星の知的生物は、進化の筋道上、それほど変わった形はしていません。我々は、少なくとも、ケルナグールさんほど、人間離れした姿はしていませんよ」
「ググググ！　だったら早く顔を見せろ！」
ケルナグールは歯ぎしりして叫んだ。
「もちろんあなた達とお会いするつもりです。ただし、その前に、それぞれの脱衣室を用意しましたので、裸になっていただきます。あなた達は宇宙の彼方からやってきました。どんな病原菌、雑菌を持っているか分かりません。消毒殺菌させていただきます」
「消毒殺菌は結構だが――、その前に聞きたい」
ブンドルが長い髪を払いながら言った。
「細菌の多くは、毛穴や、毛髪に付着している。一番簡単な殺菌方法は、体毛やあかを、人体に影響のない光線で焼き払うことだが……」
「その通りです」
「無理にというなら仕方がないが、私はまだアートネイチャーやアデランスを使いたくはないのだがね」
「なんです。それは？」
「地球の髪の毛風装身具のメーカーの名前なの。私も尼さんになるほど、世の殿方にまだ失望はし

てないんですけど……。お願い、どうにかなりませんか？」とレミーが言った。
「我々の科学はあなた達よりあきらかに高度です。殺菌したからといって、レミーさんの体毛は大丈夫です。少なくとも、シャワーを浴びたり、あなたが殿方と密着スポーツをして抜ける体毛に比べたら、微々たるものだと確信していますが……」
「いわれてしもた」
レミーは、思わず舌を出した。

それぞれ殺菌消毒を終えた六人は、化学繊維の一種で作られたワンピースの白衣を与えられ、大きなテーブルのある広間に通された。
その部屋に窓はなかった。
テーブルの上には、液体の入ったクリスタルのコップとチョコレートの破片のようなものが一かけらのった皿が六つ並んでいた。
「お会いする前に、とりあえず、お食事をどうぞ」
キリーが破片を摘んでうんざりと言った。
「食事？……また、この手の文明食かよ」
「文明が高度になると、舌ってもんがとけてなくなるらしいな」
真吾は、それでも破片をポンと口にほうり込んだ。
「こんな文明は、高度とは言えぬ、食こそ正に真の文明だからな」
ブンドルの溜め息は悲痛を通り過ぎていた。

六人は、こと食事に関しては、地球を出て以来、お手上げだった。
前の星でも合成化学食品……そして、今また食べさせられた破片は、味も香りもしない代物——。
カットナルが、肩を落として呟いた。
「わしの製薬会社の栄養剤の方がまだましだった。パパイヤ、マンゴーにパイナップルのフルーツフレーバー。コーヒーにコーラ味、臭みを消すために万人好みのカレーにニンニク、百二十種の香りをミックスした苦心の薬じゃった」
ケルナグールがこぶしを握りしめ涙ぐんだ。
「ウウ……フライドチキン……手羽先ィ！」
「スペシャル、チリマスタード入りホットウルフ……パン抜きのソーセージだけでもいいぜ」キリーが遠くを見る目で言った。
「ほかほかのじゃがいもとバターがありゃ……バターがなきゃ塩でもいい」と真吾。
「わたし、お茶漬け……お米は古米でもいいわ、さけもタラコもいらない。朝漬けのおしんこがあれば文句いいません」と夢みるようにレミーが言った。
「それに北海でとれたいわし（サーディン）の、生干しのめざしを、備長炭（びんちょうずみ）で焼いたのが、二匹もつけば言うことないのだが」ブンドルが呟（つぶや）いた。
六人はそれぞれを頭に描いて生唾（なまつば）を飲み、出るのは溜め息ばかりだった。
「お食事、お済みのようですね」
女性の声がして、部屋の一面の壁が開き窓が現れた。
窓ガラスの向こうに、白い薄布をまとった女が立っていた。

後ろに、銃らしき物を持ち、潜水に使うウェットスーツのような服を着た女達を従えている。
「わたしがこの艦隊の指導者、ジーです。遠い星からよくお見えになりました」
キリーは口笛を吹いた。
美しかった。だが、レミーとは全く違うタイプの女だった。「肌が抜けるように白い」という表現が、これほど似合う女をキリーはまだ見たことがなかった。
端整そのものの顔立ちで、背はスラリと高く、長い手と足。やせた体は、抱けば折れてしまいそうに華奢に見えた。
どこかジャコメッティの作品を思わせる肢体だ。
「負けたわ……こういう人、ミニスカートが抜群に似合うのよね」
レミーは自分と比較しようもない体型の美しさを持ったその女に舌を巻いた。
女性の美の一方の極が豊満なミロのビーナスなら、この女性は、まさに反対の極のシャープな（とがった）美を持っているといえた。
レミーはキリーに囁いた。
「お好み？」
「どっちかっちゅうと俺は干しぶどうやチェリーよりオレンジかグレープフルーツの方がいい」
レミーは自分の胸元を見降ろし呟いた。
「よかった」
「あん？」
「ノン、こちらのこと」

レミーは慌ててかぶりを振った。
ジーという名の女指導者は、六人を見回してから言った。
「話の前に断っておきますが、あなた達と私達を隔てているこの窓のバリアガラスは、どんなに乱暴なことをしても壊れません」
「乱暴を働く気はさらさらない」と真吾が言った。
「あなた達は我々の星で、最も獰猛な猛獣、ゲズルを倒した狂暴な人間です。警戒して警戒し過ぎることはありません」
「よく言うよ。ゲズルって化け物をぶち込んだのはてめえらじゃねえか」
ケリーが吐き捨てるように言った。
「その通りです。でも、それであなた達の狂暴性が分かったからこそ、我々は、こうして歓迎しているのです。我々は、あなた達のような狂暴な勇者を求めていました。我々の星のために戦って下さい」
カットナルが進みでた。
「どういうことかな?」
「まず、我々のジル星に御案内しましょう」
広間のもう一方の壁が音もなく開いていった。
そこには、大都会のような大型艦の広大な甲板を見降ろせる窓があった。
甲板に水晶のような塔が無数に林立しているのは、先刻見た通りだ。
他に見えるのは、星一つない暗闇の宇宙だけだった。だが、うんかのような宇宙船の大群は、今

はもう見えない。
「ここから我々のジル星まで、一・五光年です」
「やれやれ、後一年半もこれに乗らなきゃならんのか、わしゃ、また冬眠したいよ」
ケルナグールが大あくびをした。
「それにはおよびません。窓の外をごらんなさい。もう、この船はジル星に向かっているのです」
いきなり、無数の光の矢が拡散しながら、窓の外を覆った。
次の瞬間、七色のスペクトル光が急速に渦を巻きながら接近して来る。
総てが、渦の中に巻き込まれたと思ったとたん、窓の外は、もう宇宙が広がっていた。
そして、その宇宙には星がまたたき、窓の上部には緑色の大地と青い海の広がる惑星が、くっきりと見えていた。息をつく間もない間の出来事だった。
「あれが、我々のジル星です」
ジーの言葉に六人は顔を見合わせた。
「今の時間で一・五光年を?……うそじゃっ……」
カットナルがうめいた。
真吾が、かぶりを振った。
「いや、それが出来る航法があるとしたら……」
キリーがパチンと指を鳴らした。
「そうか、瞬間移動か、ワープ」
ジーが、かすかに微笑した。

「そういう言い方もあるかもしれませんね。我々のこの航法を手に入れれば、あなた達は、故郷の星に帰れるかもしれません」
ケルナグールが目を閉じて呟いた。
「……地球……わしの母ちゃんのヨーコ」
不覚にも涙がこぼれた。しかし、ケルナグール自身はそれをちっとも不覚だとは思わなかった。
「地球か……地球ね」
レミーは、いきなり六人の前に浮かび上がった、地球に帰れるという感慨に戸惑っていた。
——ま、おいしいものは食べられるし、男性も多いし……。でも、それだけ気苦労も多いのよね——

そこまで思って、レミーは慌ててかぶりを振った。
——なにを馬鹿なこと、考えてんだろ。せっかく地球に帰れるかもしれないのに……レミー、あなたどうかしてるわ——
ブンドルは冷静だった。
「瞬間移動の代償として、我々に何をやらせたいのですかな？」
ジーはブンドルに答えた。
「あの星の密林地帯に住み着いた反乱軍を、一人残らず掃討してほしいのです」
「反乱軍？　事情を伺いたい」
「話せば長くなりますが、我々の星ジルの歴史にも関わることなのです」
「長くなっても、聞かねば、我々も対処の仕方が分からぬ」

「ごもっともです」
ジーは惑星ジルの歴史を語り始めた。
「一万五千年前、惑星ジルは死にかけていました。人間の文明が高度化すると、どんな星でもいえることでしょうが、自然破壊、大気汚染……分かっていながら、人間は手をこまねいて、取り返しのつかないところまで、母なる惑星の緑や海を汚してしまうものです。
我々の星も、ご多分にもれず、人間の力では回復不能なほど、大気や海や大地が汚れきり、動物はおろか植物の種すら誕生が危ぶまれるほど追いつめられていました。
それでも普通、人間は、おのおの生命と利害を守るため、星の自然を破壊しながらも大地に居坐って生きつづけたがるものです。しかし我々の先祖は賢明でした。
これ以上、人間が地上にいれば、惑星ジルは死んでしまう。ならば、人間はこの星から立ちのくべきだ。そして星自身の自然の回復力で緑の大地と青い海をとり戻したとき、再びこの星に戻ってこよう」
ジーは芝居がかった口調で続けた。
「名付けて惑星ジル環境保護計画。ありとあらゆる反対を退けて、計画は実行されました。ジルに住む総ての人間が、それぞれの住む地区の宇宙船に乗って、あの星を離れました」
「総ての人間……そんなことが可能なのか？」
民衆をとりまとめる難しさを知る元政治家のカットナルにとって興味深い話だった。
「ええ、我々は、誰より惑星ジルを愛する文明人です。
確かに、大地に住みたいという欲求は誰もが持っています。

だが一人を許せば、我も我もと混乱が起こるばかりです。
ならば、いっそ、一切の人間の立ち入りを禁止すればよい。
二十九億のジル人類は、全員同意しました。
惑星ジルのためになら私利私欲を捨てる理性をジル人類の総てが持っていたのです。
こうして我々ジル人類は、宇宙空間で、惑星ジルの自然回復を待ち続けることになったのです。
その期間は二万年……」
「二万年!?」
六人は顔を見合わせた。
「その間、あの星に降りられるのは、星の自然状態を調べ、動植物のサンプルを採集する、十年に一度の無人探査船しかありませんでした」
「あのう、二万年って伺いましたけど、あなた達の寿命ってどのくらいなんです？」
年のことになると気になるレミーが聞いた。
「平均八十から九十……おそらく、あなた達と同じですわ」
「じゃ、その期間、冬眠するとかして時間をかせいでいたわけ？」
「そういう不自然なことはしません。我々はジル文明の担い手です。日々、進歩しなければなりません」
「じゃあ、何百世代にもわたって、この宇宙に住んでいたんだ」
「そういうことです」
キリーがレミーに囁いた。

「それじゃ、栄養不足でやせる訳だぜ。奴らの種族保存行為は、ポキポキポッキンと小骨の音がしたりして」
　レミーはキリーにひじてつをくらわした。
「キリーは。これ、真面目なお話よ」
「ゴホン、ハイ、拝聴しますです」
　ジーは話し続けた。
「あの星の恵みを受けられるのは、我々の五千年後の子孫なのです」
　呆れたキリーが口も減らずに言った。
「後五千年といや、エジプトで文明が始まってから二十世紀までの地球の歴史分だぜ。俺なら、今が良けりゃ幸福よ、でさっさと降りちまうがね」
「我々は、そんな利己的な人種ではありません。二万年かけた大計画は、成し遂げられなければならないのです。しかし、一万五千年も宇宙空間に浮かんでいると、キリーさんのような考え方をする特殊変異のうみも出てきます」
「うみとはなんだよ」
　くってかかろうとするキリーを真吾が止めた。
「いちいちつっかかるな。身がもたんぞ」
　キリーは頷いた。
「ウン、そりゃまあそうだ。どうぞ授業、続けて下さい」
「五十年前、彼らは反乱軍を組織して、探査船を奪い、あの星へ降りていってしまいました。我々

が降りて行くまで後五千年、彼らは、あの星で繁殖し、再びあの星を不毛にしてしまうでしょう」
カットナルが、なるほどといった表情で頷いた。
「確かに地球の歴史から考えても、五千年あれば、星一つ汚すには十分すぎる時間だな」
「だからこそ、今のうちに抹殺しなければならないのです」
――抹殺か……懐かしくもどぎつい台詞が出てきたもんだな――と、昔、国連破壊工作員だった真吾は思った。そして、苦い表情で口を開いた。
「俺達の体についた雑菌を消毒したようにか？」
「そうです」
「では、聞こう。なぜ自分のアカは自分で流さない。君らの科学力なら、そいつらを簡単に抹殺出来るはずだ」
「それが出来ないのです。我々は、一万五千年にわたってあの星の自然を壊してはならないという原則を守り続けてきました」
ジーの背後のビジョンに惑星ジルの衛星写真が写り、その一部がどんどん拡大されていった。
そこは、海のように広い、しかし深い緑色をした大密林地帯だった。
ところどころ白い煙を吐く赤茶けた山が島のように点在して、火山地帯であることを物語っていた。
「彼らは、この密林地帯の奥に要塞を築いてたてこもっています。我々に、この地域の大自然を破壊せずに、彼らを抹殺する術はありません。しかも、惑星ジルには、環境保護計画が始まったときから、自然を破壊する科学兵器、光学兵器、大気汚染排気物を放出するエンジンを不能にする特殊

バリアが張り巡らされています。そして、そのバリアが解除されるのは、計画の終わる日、すなわち五千年後なのです」
「なるほどね……それで俺達という訳か」
今まで何が何やら分からず首をひねっていたケルナグールが聞いた。
「何で、それが俺達なんじゃ？」
「要するに、近代兵器が使えない。せいぜい使えるのは、火薬、ニトログリセリンを使った旧式な爆弾や銃程度の物だ。
乗り物も、バリアに感じとられるような排気物を出す大型車輛（しゃりょう）や飛行機は使えないってことさ」
「その通りです。あの星では、大戦艦を一発で破壊できる我が艦のレーザー砲よりも、レミーさんの持つ旧式な火薬銃の方が価値があるのです」
ジーの話に続けて真吾が言った。
「つまり、俺のレーザー銃よりケルナグールのげんこつが繰り出すパンチの方が、何百倍も役に立つって訳さ」
「フーン、なかなかに悪くない話だな。グハハハ」
ケルナグールは、こぶしをなでながら高笑いをした。
ジーは、そのあまりのうるさい高笑いに耳をおさえながら、
「我々は高度な文明を得た代わりに、あなたの笑い声のような狂暴さを失いました。近代兵器に慣れ過ぎて、レーザー銃は撃っても、旧式な火薬銃を撃てば腕の骨が折れてしまいます。そこで、あなた達のような、この太陽系に紛れ込んできた狂暴な異星人の勇者達を集めて異星人部隊を作り、

あの星に送り込みました。あの密林の一角に人口二千人ほどの彼らの町があり、連日のように、反乱軍と戦っています。あなた達にはそこへ行って、異星人部隊に入隊していただきます」
「断ったら？」
「真吾、無駄なことは聞くな。身が持たんよ。どうせやるっきゃない訳じゃん」
キリーが真吾に、さっきのお返しをした。
「そういうことだな。ところで、あの星に住んでいる人間は、反乱軍と異星人軍だけなんでしょうな」
それまで沈黙していたブンドルが言った。
「いいえ、問題外が一種類います。一万五千年前、我々進歩した文明人からあの星にとり残された未開発人……、体型は人間でも、動物と同じです。我々は人間猿と呼んでいますが、なんと草や木の実を食べ動物の肉まで食べるおぞましい野蛮人どもです」
——草、木の実、肉……——
六人は顔を見合わせた。
そして、同時にゴクリと喉をならした。
真吾は、さっきまでの渋い顔はどこへやら、やたら機嫌よくジーに話しかけた。
「指導者ジー。君達はいい異星人に会えたよ。俺達はその手の戦いのプロだ」
「ええ、分かります。ゲズルを倒したあなた達ですから」
「プロにはプロの道具が必要だ。君らが用意している火薬や、兵器の資料を見せてくれないか？」
破壊しろと言われれば、たとえ手元に火薬がなくても、目標を爆破するのが真吾のような一流の

破壊工作員だった。
「わたしは、あの星の動物と植物の資料を……反乱軍と戦う前にゲズルちゃんのような猛獣にやられちゃつまんないもの」
レミーは、アフリカの動物保護官だった時期がある。
地球の動植物とこの星のものとを比較研究してみる必要があると思ったのだ。
「わたしは、あの星の地図と特に密林の地形を知りたい。それと反乱軍のデータもな……戦いは昔も今も情報次第だ。それは近代兵器を使おうと旧式兵器であろうと同じだ」
ブンドルの情報解読能力は今も衰えていない。
「宇宙船の中と密林の中では状況が違いすぎる。病気や怪我に対応するためにも、地球人に合った薬を調合せねばな」
カットナルには自信のあるものが二つあった。政治と薬である。
「音がうるさい銃は、殺しに向かないときもある。ナイフにチェーンに鉄パイプ、ハリにカミソリ、電気コードにストッキング、水を入れたビニール袋一つで、溺れ死ぬことだってあらあ、そこんところは俺に任せな」
キリーはニヒルに笑ってみせた。
ケルナグールは先刻から、盛んにシャドウボクシングをやっている。
ジーは、六人を見て頷いた。
「やる気のようですね。よろしい。星へ降りるまで七日間さし上げます。その間に必要なものを言って下さい。なんなりと用意いたしましょう」

「ワーオ、随分気前がいいな。そんなに身を入れてくれて俺っちが逃げちまったどうする気？」
ジーはキリーを哀れむように見つめた。
「あの星からは逃げられません。お忘れですか、あなた達が故郷に帰るために必要な瞬間移動装置は、宇宙に浮かぶ我々の手の中にあるのです。あなた達の道はただ一つ、反乱軍を抹殺して、ここに帰ってきて、移動装置を手に入れるか……、反乱軍に殺されるかです」
「我々が、仮に反乱軍を抹殺したところで、本当にここへ帰ってこれるのかな」
ブンドルがジーに聞いた。
「えっ？」
「あなたは、先刻、あの星は排気物を出すエンジンは通用しないと言った。確かに、行きはエンジンが通用しなくても、あの星の引力の赴くまま落ちていけば辿りつけるだろう。だが、帰りはエンジンなしで、どうやってあの星の引力から抜け出せというのかね……」
「あなたは、十年に一度無人探査船が往復していることをお忘れのようですね。バリアは星の総てを覆っている訳ではありません。あの星には、バリアの常時解除されている飛行空域が三カ所あります」
「場所は？……」
「ここです」
ビジョンの地図の三カ所が赤く光った。
「御覧のように、その一カ所は異星人部隊のすぐ近くです。今もここに異星人部隊の物資も送り込んでいる訳ですが、あなた達も、この地点から星にはいり、近い未来、反乱軍を抹殺したときの出

口になります。了解いただけましたか」
　ブンドルはジーを見据えて言った。
「よかろう。我々は全力を尽くす。ところで、この艦にいる間、艦の中を見学させてもらえないかな？」
「それはできません。あなた達は狂暴な異星人です。艦内を歩き回られて、乗員を危険にさらす訳にはまいりません。では……」
　壁のシャッターが閉じた。
　威し……煽って……餌を与え……自分達がいかに正しいかの大義名分……そしてまた威し……自分の手は汚さない……。
　暗黒街のボスにしろ、ドクーガにしろ、この船の指導者が、たとえ華奢な美女だろうと、やり口は共通だ。
　六人には分かっていた。
　仮に、反乱軍を抹殺したにしろ、瞬間移動装置など手に入りはしないことを……。
　こいつらは約束を守るようなたまじゃない。

＊

　七日が終わった。
　惑星ジルに降りる日がやってきた。
　真吾が調べた限り、ジルの旧兵器は地球のものと大差なかった。

真吾が特にジーに要求したのは、銃の錆びやすい金属部を超強化プラスチックに変えたこと。銃身の長いライフルを短くし、密林の中で動きやすくしたこと、そして、持っていく総ての銃をどんな銃でも同じ弾を撃てるように四十四口径用に共通させ、発射の衝撃を弱める緩衝装置をつけさせたことだった。

そして、ゼンマイ仕掛けの簡単なタイムスイッチを山ほど持っていくことにした。

何が起こるか分からない密林では、壊れやすい精密な機械より、不正確でも確実に動くシンプルなものが似合っているのだ。

キリーは、特注の大型登山ナイフを作らせた。

一本でのこぎり、鉈、ペンチ、ドライバー、爪切りからとげ抜きまでついた……何のことはない、子供の頃欲しかった十徳ナイフの大型版だった。

そして自転車。ただし、それは複雑に折り畳むとショルダーバッグに入ってしまうほど小さくなる代物だった。これもキリーが子供の頃欲しかったものだ。

レミーはお得意の横弓とライフルを合わせたようなボーガンに、さらにハンディバズーカを一体化したボーバズーカとでもいえるものを作らせた。

カットナルはといえば、武器より薬。ナップザックに詰めた薬品は百種類以上、調合すれば、どんな薬でも作れる自信があった。

そして、血を見ると卒倒するタイプなのも忘れて、医者を気取ってメスと鉗子とを持った。

ケルナグールは、前に住んでいた星からちゃっかり持ち出した宝石の山をしっかり抱えていた。

この星では全く価値のないものに思えたが、一度手に入れたものは滅多に手放さないのが彼の主

義だった。
ブンドルは、小振りだが切れ味鋭い日本刀を作らせた。
だが、六人が持っていくものの中には、何のために使うのか意味不明なものもあった。
それは、太陽電池を使ったカセットディスクレコーダーと電子キイボードだった。
「何のために使うのです？」と聞くジーに、レミーはにこやかに答えた。
「反乱軍を欺くために動物の声を使う訳。こんなの密林のゲリラ活動では初歩前のハイハイよ」
実はそれだけが理由ではなかった。
レミーは感じ始めていたのだ。
この世界にはもしかしたら音楽がないのかもしれないと。
レミーは、母艦ジルガに乗せられて今まで、ただの一度も音楽を聞いたことがなかった。
メロディはおろか、リズムらしき音さえ聞こえなかった。
それればかりではない。
ジーを含めて大型艦の乗組員の動きにすらリズムが感じられないのだ。
大体、音楽好きな人間は、知らず知らずのうちに動きにリズムが現れるものなのだ。
——愛の行為だって、ほら、リズムが必要でしょ。この船の乗組員は、経験あるのかしら？　ま、人のベッドのこと心配してもしようがないけれど……。とにかく音楽なしってのは、参るわ——
年中音楽を聞かなければ落ちつけないタイプのレミーだけに、実は、それがキイボードを持ちたい本当の理由だった。
さらにジル人類、ジーにとって使い道の分からない物があった。

それは、特殊強化合金で作られた何かの道具で、種類のバリエーションがあった。
ジーは、道具の設計図を書いたブンドルに聞いた。
「これは一体何のために使うのです？」
「地球の人間の生存を守るために必要かくべからざる武器です」
確かに相手をなぐり倒すのに便利そうな武器だ……とジーは思った。
「武器ならよろしい」
だが、他の五人は胸の内で、なかばあきれはてて呟かざるを得なかった。
——よくやるよ——
と。
それは、フライパンと片手なべとおたまと魚焼き用の網までついた料理セット一式だった。
カットナルがブンドルの耳元で囁いた。
「化学調味料は持っとるぞ」
「自然食が好みだが、御厚意は感謝する」
ブンドルは、フッと微笑した。

第3章

外人部隊で生き抜くには

レミー教養講座

六人は、異星人部隊の人間達との会話を可能にするヘッドフォン型の通訳機を渡され、小型機に乗せられた。明らかに大気圏内用の広い翼を持つ小型機に。しかし操縦士はいなかった。
自動操縦で母船ジルガから切り離された小型機は、まっしぐらに惑星ジルに向かった。
結局六人は、母艦の乗組員とはバリアを隔ててしか会うことはなかった。
誰もが、その不自然さに気付いていたが、今六人にとって最も大切なのは、これからどう生きるかだった。
「……異星人部隊か……要するに外人部隊よね」
レミーは、いがらっぽい思いで呟いた。
「確か、レミーはアフリカの外人部隊にいたことがあったと言っていたな」真吾が聞くともなく言った。
「ええ、EIC（ヨーロッパ情報部）のスパイになる前にね。アラブを皮切りに、ナイジェリア、アルジェリア、コンゴ、私、いろんな国の言葉が喋れたから重宝されて、あっちこっち流れ歩いたわ」
レミーは、あっさり答えたが、流れ歩いたのは、レミーの行く先々の外人部隊が激戦で全滅し、転々と各地の外人部隊を渡り歩くよりなかったからなのだ。
レミーにとって、弾まみれ、泥まみれで、生き抜くことにだけ目をぎらつかせていた時期だった。
「外人部隊の大先輩って訳だ、レミーちゃんは……」
キリーがナイフを研ぎながら言った。
「普通の軍隊とは違うのかね？」

若い頃、身障者扱いで徴兵制度を免れて、軍隊体験もないカットナルがレミーに聞いた。考えてみれば、ドクーガの幹部からアメリカ大統領まで、到る所で戦争はやってきたのに、兵隊の経験がないというのは、どこか後ろめたかった。

アメリカに住みながら、軍隊の体験のないのはキリーも同じだった。もともと身寄りもなく、ブロンクスの暗黒街に紛れこんだキリーだ。徴兵されようにも、手掛かりになる戸籍さえなかった。もっとも、暗黒街は毎日が戦争だと言えば、言えないこともなかったが……。

「外人部隊は軍隊じゃないわ。ただの寄せ集めの戦闘集団……。彼らにとって大切なことは、お金を稼ぐことと生き抜くこと……。戦闘になったら、上官も部下もないもん。生きるためなら何でもする。家族も国も捨てているから恐ろしいものなんかないし、あるのは自分だけだもんね。けがや病気で足でまといになるような味方は平気で捨てていっちゃう。飢えたら、味方の食料まで盗みとる。そのためには殺してでもね……。

敵は戦う相手だけじゃない訳。味方に裏切られ寝首をかかれるなんて常識なのよ。

むしろ危険なのは敵よりも味方かもしれないわ」

五人は黙ってレミーの話を聞き続けた。

「……わたしがね、サハラの外人女性部隊に初めて入隊したとき、こんなことがあったの。

一緒に入隊した女の子の中に、ちょっと派手めの娘がいたの。彼女、さっそく別の男性部隊の男と恋をしたわ。

そしてプレゼントにトルコ石の指輪をもらったの。舞い上がった彼女はその夜、兵舎の中で彼とのことを夢中で話して聞かせたわ。ベッドの中の話までね。そして指輪を見せびらかしたのよね。

みんな、じっと静かに聞いてたわ……で、次の日の朝、トイレのこえだめの中で、身ぐるみ剝がされて、彼女、裸で死んでた。犯人は分からなかったわ。
私、それを聞いてすぐに髪を切ったの。だって、その娘の次に派手めの顔立ちしているの、私のような気がしたもんだから……。ネックレスやペンダントやブレスレット、ともかく身に付ける飾りは、全部、どぶに捨てた。
そしてしばらくシャワーに当たらなかった。体が汚れきって体臭が自分でも鼻についたけど、我慢したわ。それで武器の扱いと格闘技の練習をメチャンコしたの。
私としては、目立たないように目立たないようにしてたのにね、ある日の戦闘で日本人のアラブゲリラが捕虜になったわけ。
訊問に日本語が必要だっていうんで、私、狩り出されて、別に役にも立たなかったけど、上官からコーヒーを一杯ごちそうになって帰ってきたの。
その日の夕食の私のスープには、ゴキブリが入ってた……。宿舎の女ボスが私に言ったわ。
『コーヒーより、そっちのスープの方が美味いはずだよ。さあ食べな』
私、その女ボスの前歯と腕を複雑にへし折ってやって、スープを折れた前歯の間に流し込んでやったわ。
『そんなに美味いなら、あんたにあげる』ってね。
女ボスさん。軍の病院に一カ月入院して、出て来たときには、その宿舎のボスはもう私だった……。で、私今まで生きられた訳」
ピューッとキリーが口笛を吹いた。

「そんな暮らしをしていた割にゃ、レミーちゃん、素直ないい娘に育ってくれましたね」
「サンクス。目標、素直でいい娘、それっきゃ取り柄なかったんじゃん、昔も今も……かな？」
レミーは、悪戯っぽく微笑して、真顔に戻った。
「だから、多分外人部隊で大切なのは、味方になめられないことよね。そして油断しないこと。味方は自分だけ、後は敵だわ。こんな感じで皆、いけそう？」
キリーはニヤリと笑った。
「ブロンクスだって同じさ。一匹狼のローンは一人ぼっち、貸し借りのローンじゃねえ」
「政治家だって、所詮頼りになるのは金と自分自身じゃ。一人には慣れとる」
「ボクシングにダブルスはないわい」
「俺は、レミーとあまりかわらん破壊工作員だ」
ブンドルは何も言わなかった。ただそれぞれの台詞に頷くだけだった。
言わずと知れたブンドルだ。美しいの次に一人と孤独が代名詞につく。
ただ、気のきいた台詞が見付からず、黙っているだけだった。
——どれもこれも使い古して、これから台詞がいいにくくなるな——
なんとなく、そんなことをブンドルは考えていた。

*

翼を大きく広げた小型機は、惑星ジルの大気圏をすべり降りていく。
大気との摩擦で、小型機の先端が赤く燃えている。

大気を切り裂く小型機の振動が心地良い。
宇宙空間では、この手の激しく、しかし細い振幅の揺れはめったに体験出来ない。
宇宙がハイウェーなら、ここは四輪駆動のジープで走るオフロードだ。
やがて、眼下に真っ青な海が広がり、ところどころ白い雲がぽっかり浮かんで、気分はほとんど地球帰還の宇宙飛行士だ。
ガクン！
鈍い振動で、減速用のパラシュートが開いた。
後はゆったりと風にまかせて飛ぶ鷲のようにゆっくりと降りていく。
海の向こうに、鬱蒼と繁った密林に覆われた陸地が見えてくる。
毛足の長い、ふわふわとした緑の絨毯さながらの密林の間を、くねくねと蛇行した河がキラキラと陽の光を反射しながら流れていく。
「オオッ!?」
窓にぺったりと額をくっつけていたカットナルが叫び声を上げた。
「あれを見ろ。あれはまさか！」
カットナルが指さす方に、数羽の鳥が飛んでいた。
黒い羽根をゆったりと羽ばたかせている。
レミーが、窓の外を見て言った。
「そう、カットナルさんのお友達」
「カ、カ、カ、カラスかあ……」

レミーは母艦ジルガで調べた動物の資料のノートを広げた。
「この星での名は、デオゲラ・クロス、羽根の長さ約一・五メートル。赤い嘴、青い目。地球のカラスとほぼ同じ性質だと思っていいわ」
「すると飼い慣らせるな」
「さあ、それは……。ジル人の資料によると、知能程度は高く、群れを成して狩りをする。人間を襲う猛禽だから、要注意と書かれているわ。カラスと言うより、空を飛ぶ狼と思った方がよさそうよね」
「おもしろい。この星の楽しみが増えたぞ」
「大切な目を気を付けてね。あの鳥、動物の目の玉が好物らしいから」
「うむ、一つだけしかない目じゃ、金網入りのサングラスを掛けることにしよう」
「この際だから皆さんに言っておくけど、この星の動物は、進化的には、地球の動植物とあまり変わりはないみたいなの。ただし、言えることは、確実に五万年分は先に行っています。要するに、五百二十一世紀の動物だと思ってもらいたいの」
「未来の動物って訳じゃな」
「そう。もちろん、五万年たてば進化する動物もいるし、退化する動物もいるわ。おまけに公害の影響、突然変異もプラスされてる」
キリーがノートを覗き込んだ。
「レミーを襲った化け物もその手合いか？」
「おそらくそうね……。ナメクジというより、かたつむりの一種……。資料によると、エスカルゴ

料理用に養殖しているかたつむりの養育所に原子炉汚水が流れ込む事故があって、その二千年後に隔離されていた事故地域付近で発見されたらしいわ」

「昔、食われた恨みって訳だ。レミーちゃん、フランスで、エスカルゴを食い過ぎたんじゃないの？」

真吾が肩をすくめた。

「パリのかたきをジル星で打つか……」

「かもね。でも、皆さんもいろんな物をお食べでしょうから、お気を付け下さい」

「私は菜食主義者じゃ、カラスは子供の時から友達じゃった」

カットナルは、本気でカラスを手懐けるつもりらしい。

「カットナルさん。同じカラスでも五万年後のカラスなの。知能程度も、遙かに高いはずよ。温和しい動物はともかく、獰猛で知能の高い動物は人間には慣れないわ」

「カラスはカラスじゃ」

カットナルの片目はカラスに、懐かし、会いたしで涙が光っていた。

*

「どうやら、あそこが着陸地点らしい」

真吾が前方を指した。

密林を切り開いただけという平地が見えて来た。

平地から少し離れた密林の中に、丸太をつなぎ合わした塀で囲まれた町が見える。

――異星人部隊の町か――

六人は、それぞれこれからの暮らしを思い、声もなく町を見つめた。
パラシュートを開いた小型機は、着陸地点の上空で小刻みにエンジンをふかし、旋回しながら、しだいに降下していった。
胴体から脚部が出て、着陸姿勢に入ったそのときだった。
パラパラっと着陸地点に数人の黒い影が飛び出して来た。
まさに、頭から足の先まで黒ずくめの服を着て、黒い影という表現がぴったりだった。
「出迎えのようだな」
真吾が言ったとたん――。
ドン！
小型機の至近距離で、爆弾が炸裂した。
幸い小型機は、爆風でグラリと揺れただけだ。
「出迎えがバズーカ砲を撃つかよ」
「あいた！　反乱軍かよ」
確かに、黒い影達のうちの一人が、バズーカを肩に構えている。
自動操縦の小型機はおかまいなしに降下を続けている。
これではわざわざ的を大きくしているようなものだ。
そのとき、真吾は目をしばたたかせた。
――今がチャンスだ――

まばたきのモールス信号だ。
ケルナグールを除く四人がウィンクした。
いきなりキリーとブンドルは、銃を取り出し自動操縦パネルをぶち抜いた。
レミーと真吾は、ハッチのロックに四十四口径を叩き込む。
四人は、自ら小型機を壊し始めたのだ。エンジンが止まった。
仰天したのはケルナグールだ。
その口を、カットナルが手の平で塞いだ。
「な、なにを……」
「よせ！」
カットナルの体が吹っ飛んだ。
ケルナグールは、カットナルの手を払った。
ケルナグールは、皆が発狂したとしか思えなかった。
――お前ら、何のつもりだ？――そう言いかけた口に、レミーの唇がかぶさった。
ケルナグールは目を白黒させた。
この状況は、すなわち――。
レミーが、ケルナグールの首に抱きつき、キスをしているのである。それも熱烈なディープキス。
――馬鹿な……こんなことって……。私は、妻のヨーコ以外、この種のキスをされたことがなかった。のに――
ケルナグールは呆然というか、トロンというか、棒立ちになるよりなかった。

真吾が叫んだ。
「母艦ジルガ答えろ！　敵の攻撃だ!!　自動操縦装置被弾、ハッチも自動では動かない！　手動に切り換えを頼む。ハッチも開けてくれ！」
機内に声が響いた。
「自動操縦装置不能、確認、しかし手動に切り換えても、着陸地点上空以外のエンジン作動は、バリアのため不能です」
「分かっている。滑空だけでなんとか別地点に降りる」
「しかし、その高度では墜落しかありません」
「勝手に決めるな……。俺達をここでこのまま反乱軍に殺させるつもりか」
「………」
声は黙っている。決めかねているのだ。
小型機は、パラシュートだけでは支えきれず、ぐんぐんスピードを上げ降下している。
ドーン！
胴体の腹部に、バズーカ弾が直撃した。
しかし、さすがに宇宙飛行用の小型機は頑丈に出来ている。
外装部はめくれあがったが、内部は亀裂だけで済んだ。
しかし、二発目が当たれば空中分解は必至だ。
機内の警報が鳴り響いた。
「助けてくれ！」

ケルナグールと彼にキスをしているレミーを除く四人の男は、泣き喚いた。
ケルナグールは目を疑った。
この四人はどんな危険に合っても、こんなにうろたえる女々しい奴らじゃなかったはずだ。
「死にたくない！」
ブンドルが叫んでいる。あのブンドルが泣き喚いている。こりゃ一体なんなんだ？
「自動操縦解除、手動に切り換える」
声が言うと同時に、操縦桿やスロットルレバーが、操縦ボードの裏側から飛び出して来た。
カシッ、小型機の二つあるハッチのロックが外れる音がする。
今まで泣き叫んでいた四人は、ケロリと騒ぎを止めた。
間髪を入れず真吾が叫んだ。
「キリー、頼むぞ！」
「まかせろ！」
キリーは、操縦席に坐ると、操縦桿を握った。
真吾はマシンガンを二つ摑み、一つをブンドルに投げるとハッチの一つを蹴破った。
もう小型機と地上は十メートルもない。
真吾とブンドルは、黒い影に向かって、マシンガンを乱射した。
ケルナグールの体からそっと身を離したレミーは、唇に人差し指を付け、静かにしていてと合図した。
なにがなんだか分からないケルナグールは、頷くよりなかった。

おろおろと見つめる中、レミーとカットナルは荷物の包みを抱え、機内の後部に駆け込んでまるでフットボールのタッチダウンのように倒れ込んだ。
反動で、小型機の後部が下がった。
地上は後一メートルもない。
「今だ！」
キリーは、エンジンの出力を最大にして、スイッチを入れた。
機体の落下する力とエンジンの噴出がせめぎ合い、機体は地上すれすれの空中に静止した。
エンジンの噴出は、萎んでいくパラシュートを焼き切る。
ドカーン！
至近距離で、バズーカが弾けた。
機体が大きく揺れる。
ケルナグールの後ろの閉じていたハッチが振動で開く。
よろめいたケルナグールは足元の包みと共に外へ投げ出された。
「ケルナグールが！」
カットナルの叫び——。
「なに!?……」
真吾は——、ハッチから飛び降りる。
その時、エンジンの噴出が落下の力に勝った。
ドーン！

轟音と噴煙を残して矢のように小型機は上空へ飛び上がった。
密林の木々すれすれを飛び越え、三百メートルほど上昇すると、もうそこはバリアの世界、エンジンが音もなく止まった。
あとは、滑空——。
至近距離でバズーカが爆発してここまで三秒もかかっていなかった。

小型機の残した噴煙の中でよろよろと立ち上がったケルナグールは、あたりを見回した。
ケルナグールのまわりに、一緒に落ちた包みの中身が散らばっている。
——フライパンになべにおたま……。チッ、ブンドルの持って来た料理セットか——
舌打ちしたとたん、足元に銃弾が弾けた。前方の黒い影が撃ってくる。
慌てて身を伏せたケルナグールはフライパンを突き出した。
パチン、パチン！
フライパンの裏で銃弾が弾ける。
——さすが超強化合金のフライパン、弾よけになるわい——感心していると、耳元でマシンガンの発射音……。
黒い影がバタバタと倒れていく。
見ると傍に真吾がいてマシンガンを乱射している。
「おう、お前も落ちたんか」
真吾は、黙ってケルナグールの頭になべをかぶせると、

「森へ逃げろ！」
「お、おう」
だが、バズーカを持った黒い影がこちらに向かって狙いを定めている。
真吾は手榴弾を黒い影の頭上五メートルほどの高さに投げた。すばやく腰の銃を抜いて撃った。
命中した！
それは、バズーカの発射と同時で――飛び散った手榴弾がバズーカの弾丸を誘爆した。さらに黒い影が持っていた予備の弾丸総てにも……。大爆発の後には、バズーカも黒い影も、根こそぎ消えていた。
だが、それもつかの間だった。
密林の一方から、黒い影の新手が無数に現れたのだ。
真吾は、銃を腰のホルスターに入れた。
「たった二人に、ご大層なこった」
「勝算は？」
「ある訳ないでしょ！」
真吾はマシンガンをかつぐと、全力疾走で黒い影達の逆方向の密林へ逃げ出した。
「お、待ってくれィ」
ケルナグールも、尻をフライパンで押さえるようにして走り出した。
足元に銃弾が弾ける。
密林はもうすぐだ。

そのとき、真吾達の向から密林の中で、何かがピカっと光った。
キュル、キュル、キュル！
風を切る何かの音がする。
バズーカの砲弾!?
「伏せろ！」
真吾はケルナグールに体当たりし倒れた。
その頭上を間一髪すり抜けた砲弾は、追ってくる黒い影達の真ん中で爆発した。
続いて、二発、三発!!
密林の中から発射されるバズーカ砲が、黒い影達を吹き飛ばしていく。
バズーカの水平発射が、身を伏せた真吾達の頭上を風を切ってすり抜けるために、二人は一歩も動けない。
やがて、無数の機銃音が響き、悲鳴と怒号がひとしきり続くと、あたりは静かになった。
靴音が聞こえ、二人の目の前に止まった。
見上げる真吾とケルナグールの前に、無精ひげだらけの異星人部隊の戦闘服を着た男が立っている。
真吾のヘッドフォンの中で英語に通訳された男の声が聞こえた。
「おかげで、反乱軍の小部隊を全滅できた。奴ら、君らの降りてくるのを見て、まんまとここに誘き出されやがった」
「俺達をおとりに使ったのか？」

「報告によれば、やってくる君達六人、きょうここでやっつけた反乱軍は百人以上。六対百、どっちが得か考えな」
「この野郎、よくも……」
ケルナグールは男に殴りかかろうとした。
その手を真吾がおさえた。
「よせ、所詮、俺達は、異星人部隊の一兵士にすぎんという訳だ」
男は、ニコリともせずに答えた。
「そういうこと、一匹の虫けらさ」
「そしてお前もな」
真吾のパンチが男のアゴに炸裂した。
もんどりうって倒れた男の額に、素早く銃をつきつけ撃鉄をあげて、真吾は言った。
「さっさとお前らの町に案内するんだ」
真吾達の周りにいた異星人部隊の面々は、そんな真吾の行動に、うろたえもせず、面白いものを見せられたとでもいうように、口々に下卑た笑い声を漏らした。
男はよろよろと立ち上がると、さっきとはうって変わった脅えた目で真吾達を見つめ、
「分かった。こっちだ」
のろのろと密林の方へと歩き始めた。
異星人部隊の面々は〝よくやるよ〟とでも言うように、真吾の肩をパタパタと叩き、歩き始めた。
ケルナグールは、ふてくされて真吾に言った。

「なぜわしに殴らせなかった？」
真吾はケルナグールと自分のヘッドフォンのスイッチを切って言った。
「あんたがやったら、あいつ死んじまう」
「そりゃまあそうだが……」
「一応味方だ。殺す訳にはいかん」
「それにしても、わしには分からんことばっかりじゃ」
「連中に盗聴されていない。今のうちに、聞いとけよ」
「ウム、なぜ自分から小型機を壊そうとしたんじゃ？」
「ジル星の奴らは信じられん。仮に反乱軍を倒したところで、もう一度奴らの母艦に戻れるかどうかの保証はない。宇宙船を確保しておかなきゃな」
「あれをぶん取るつもりだったのか」
「反乱軍の攻撃で、いい口実ができたって訳さ。キリーの奴、うまくやってくれればいいんだがな」
「なるほど、そういうことか」
「そういうことさ。行こう」
「ちょっと待ってくれんか？」
ケルナグールは、逃げて来た方を歩いて行った。
「何処へ行く」
「ブンドルの料理セットを拾って来るんじゃ。わしの命の恩人じゃけ」

ケルナグールは、真吾にフライパンを見せてニヤリと笑った。

＊

キリーの操縦する小型機は、ひとしきり風を読みながら、密林の上空を漂っていた。

しかし、推進力の使えない小型機のいく末は落ちるよりない。

キリーが地上を見降ろしながら、舌打ちした。

「ちっ！　見渡す限りの密林だ。降りるところがねえ」

「一つだけある」

ブンドルが町を指さした。

「やっぱり異星人部隊に入隊するっきゃないってこと？」

「この小型機を壊さぬことの方が大切ではないかな？」

「いえてる。みんな、機体に摑まってろ。なあに、エンジンは止まってるんだ。火を噴いて黒こげになる心配はないぜ」

キリーは操縦桿を倒した。

ぐんぐん町が近づいて来る。

町の大通りが見える。人通りも多い。

「ヤバイな。皆さん、危険ですからお下がり下さい……」

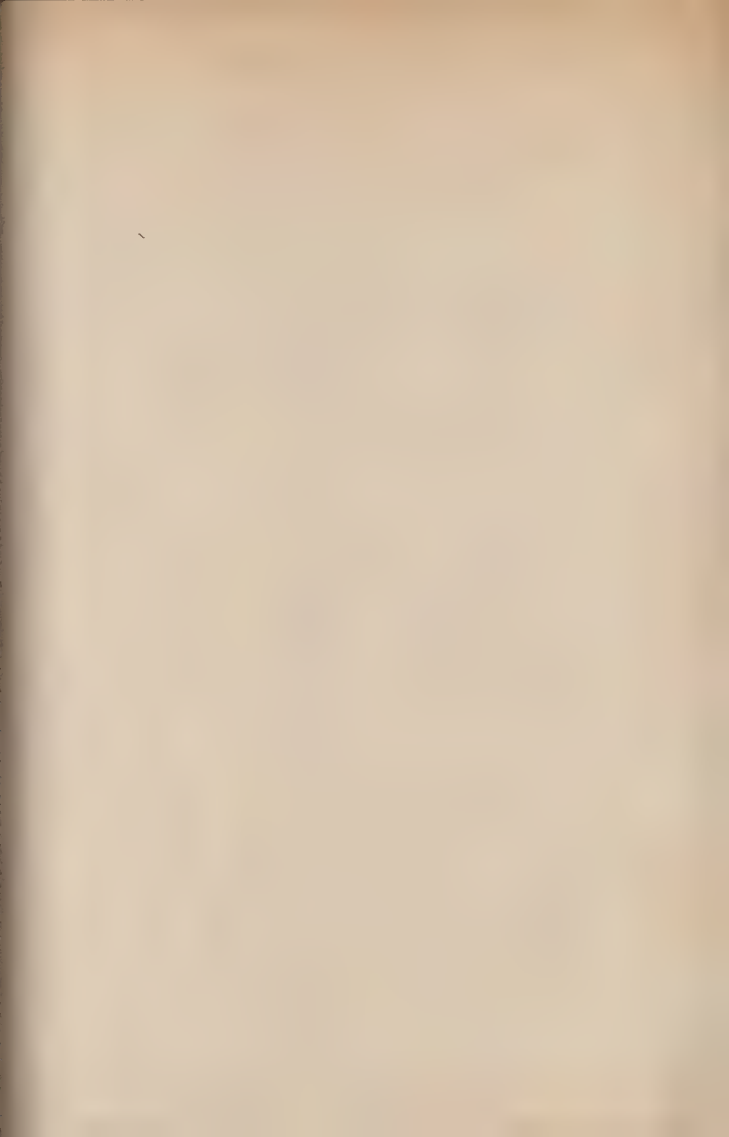
町を取り囲む壁の上の見張り所の警備兵は、突っ込んで来る小型機に目をむいて警報を鳴らした。

そして、ますます恐怖に顔をひきつらせて、悲鳴をあげて見張り所から飛び降りた。

次の瞬間、小型機の翼は見張り所を粉々に押しつぶした。
警報に気付いた大通りの人々は、クモの子を散らすように両脇の建物に飛び込んだ。
「何ごとだッ!」
異星人部隊司令部の隊長が、ここ数日続いた雨でぬかるみになった通りに飛び出して来た。
その目の前に、小型機の機首が大きく迫った。
「わっ!」
隊長は頭を抱え、大通りのどろどろのぬかるみの中に倒れ込んだ。
バシン!
小型機の車輪が、ぬかるみにとられて弾け飛ぶ。
小型機の胴体は泥を弾き飛ばしながらぬかるみの上を滑る。
小型機の滑っていった後には、人も建物も泥だらけだ。
「だめだ、止まらねえ」
操縦席の前面に、大通りの行き止まりの壁が迫る。
「お手上げだっ!」
キリーは操縦席から降りると、機内の後部へジャンプして頭を抱えた。
ドカン!
小型機は、機首を壁に突っ込んで止まった。
機首には、ぽっかり穴が開いていたが、案の定、火災や爆発の起こる心配はなさそうだ。
キリーが口笛を吹いた。

「どうやら助かったぜ。やっぱ火を吐く危険のあるエンジンを使ってなかったのが幸いしたな」
ブンドルが言った。
「機体の損傷を調べねば」
「そうだった！」
二人は機内から飛び出すと、小型機の点検を始めた。
主翼は二つに折れ、機首はちぎれ飛んでいた。
「ちょっと乱暴すぎたかな。これじゃ、飛ぶのは無理だな」
機体を蹴っ飛ばすキリーに、エンジンを調べていたブンドルが言った。
「だが、ウェルダン（よく焼けた）のステーキにならなかっただけでも良しとせねばな」
「どういうこった？」
「このエンジンの燃料のことだ。可燃性ロケット液体燃料……」
「なに？」
キリーがエンジン部分の燃料タンクを見た。
タンクに損傷はないが、エンジン部の仕組みを見れば、それが二十一世紀の子供のロケットおもちゃ並みの、旧式な液体燃料で推進するエンジンであることは見てとれた。
銃撃はおろか火花一つで大爆発を起こす代物だった。
反乱軍の銃撃が、燃料タンクに当たらなかったのは奇跡的な幸運といえた。
「それと、着陸したこの道がぬかるみだったこともな。火花一つでも出れば、終わりだった」
「なんてこった。俺達は爆弾に乗っていたようなもんじゃねえか」

キリーは信じられないといったように燃料タンクを叩いた。
「けどよう、二十世紀の地球じゃあるまいし、あんだけ科学の進歩したジル星の人間がさ、なんでこんな旧式で危険なエンジンを使わなきゃなんないんだよ」
「空気のない宇宙空間では、可燃性の燃料も、それほど大きな爆発力は持たない。まして、宇宙空間に一万五千年も住んでいた彼らだ。空気中での燃料の危険性など研究の対象にならなかったのかもしれない。宇宙空間の高速ドライブには、全く別の推進力が必要だしな。とりあえず必要のない空気内の近距離飛行には、彼らにとってこの燃料で十分なのかもしれん……」
「そう言えば説明がつくかもしれんがね。それにしてもだぜ……」
「そう、それにしても旧式すぎる。このエンジンはな……」
機体から降りて来たレミーが緊張した声で二人をつっ突いた。
「お二人さん、自己紹介のお時間みたい」
二人が振り向くと、泥だらけの異星人部隊隊長を先頭にして、これまた泥だらけの町の人々が、キリー達四人を取り囲んでいた。
「随分、乱暴なお目見えだな」
「出迎えが乱暴だったんでね。あ、これを」
キリーは、地球の頃から愛用のジバンシィのハンカチを隊長に差し出した。
「ん？」
「お顔をよく拝見したいんでね」
隊長は顔を乱暴に拭うと、ハンカチをぬかるみに捨てた。

「あーあ、トイレットペーパーじゃないんだよ、これ」
キリーはハンカチを摘み上げた。
憤懣やるかたないといった表情の隊長は、
「報告したまえ、状況を」
「そういうことは、こっちのおっさん」
キリーはカットナルを指さして、呟いた。
「お年寄りをたてなくっちゃ」
カットナルが進み出た。
「我々地球人六人は、異星人部隊入隊のため着地点接近中、反乱軍に急襲を受け、やむなくこの地に着地いたしました。生存者は六人中四名……あとの二人は……」
カットナルは唇を噛み締めた。
しかし、すぐにニヤリと笑って言った。
「あそこです」
大通りの向こうに、異星人部隊に交じって歩いて来る真吾とケルナグールの姿が見えたのだ。
ケルナグールは、両手一杯に料理セットを抱えている。
それを見て、今度はブンドルが微笑した。

第4章

異星人部隊の町

ジル星でダンシングフィーバー

「六人一緒じゃないのか?」
異星人部隊の司令部で、隊長から六人は、それぞれ四つの所属部隊を言い渡された。
「さよう。諸君はきょう入隊したばかり。いわば保護観察中だ。六人一緒だと何をしでかすか分からんのでな」
組み合わせは、真吾とカットナル。
キリーとケルナグール。ブンドルとレミーは、一人ずつ別の部隊だった。
ブンドルが聞いた。
「私とレミーは、一人のようだが?」
「彼女は女性部隊、君は、この長い刃物も含めて、奇妙な武器を持ち込みすぎた。使い道が分かるまで要注意人物だ」
隊長のテーブルの上に、日本刀と料理セットが置かれてあった。
「使い道はすぐに分かる……。持って行ってもいいかな」
「それはかまわん。君らの武器だからな」
「もう一つ質問があるんですけど……」
レミーが聞いた。
「女性部隊といっても異星人の寄せ集めでしょ。みんなどんな姿かたちをしている訳? 地球の女の子って恐がりなのよ。前もって聞いておかなきゃ」
「諸君とそう変わりはせんよ。この空気の中で生きられる人間だ。ジル星型の人間、要するに諸君の地球型人間——赤い血の流れている人間だ」

「OK、少し安心」
「宿舎に案内しよう。荷物を整理したら後は自由時間だ。なお、給料は十日おき、活躍によって昇給する。もっとも、金の使い場所はこの町しかないが……。あとで町の中でも散歩したまえ」

＊

それぞれの荷物を肩にして、六人は宿舎に向かって大通りを歩いて行った。
大通りは、木造の建物が軒を並べ、なんとなく西部劇の町を思わせる。
すれ違う男女は、母艦ジルガの乗組員に比べて、体格もよく陽に焼け、何より戦いに明け暮れているためか、ギスギスした表情で、そしてやたらと女の数が多いのも目についた。
「この町は、いつから出来てるんだ？」
真吾が、宿舎へ案内する兵士に尋ねた。
「よくは知らんが、五十年は経っている」
確かに五十年分の生活の臭いは感じられた。
商店があり、食堂があり、武器修理工場があり、嬌声が漏れてくる飲み屋もあった。
スロットマシーンやルーレットの音の漏れる賭博場もある。
兵士が六人に言った。
「怪我や病気で戦えなくなった男達が経営しているんだ」
レミーは、一軒の店の前で立ち止まった。
その店は、ガラス張りで、中に並べられたテーブルに、けばけばしい衣装を着た半裸の女達が、

酒のようなものを飲みながら、気怠く外の道を見つめている。
レミーには、この店が何であるかすぐ分かった。
それは、ハンブルクにある飾り窓の家、そしてパリの娼婦の店によく似ていた。
それは、レミーの母の住んでいた世界……。
「怪我や病気で戦えず、結婚もし損った女が稼ぐのはこれしかない。お気付きだと思うが、この町は女の方が多いんだ。戦闘では、女より男の方が死にやすいんでね」
レミーは目を逸らすと、フッと溜め息を漏らしてポツリと元気のない声で言った。
「早く行きましょ」
大通りを歩くうち、レミーは奇妙なことに気付いていた。
これだけ女がいて、そして男がいて、町が出来てから五十年も経っているというのにこの町には子供の姿がなかった。
確かに戦場の町に子供は不要かもしれない。しかし、あまりに不自然だった。
そしてもう一つ、これだけ酒場があり、賭博場があり、娼婦の店まであるのに、この町には歌が聞こえなかった。
メロディもリズムも音楽らしいものが一かけらもなかった。

大通りの外れに鶏舎を並べたような、平屋の兵員宿舎が並んでいた。
兵士は、それぞれの宿舎を六人に教えた。
真吾が五人に言った。

「一段落ついたら、また、ここで会おう」
五人は了解した。
キリーがレミーに心配そうに言った。
「一人で大丈夫か？」
レミーはコクリと頷いた。
「テイク・イット・イージー、気楽にやるわ」
六人は、それぞれの宿舎に向かった。

レミーは女性宿舎の扉を開けて、思わず、顔をしかめた。
宿舎の中は、紫煙でむせかえっていた。
マリファナか、ＬＳＤか定かではないが、明らかに、その種の幻覚剤の臭いがする。
煙の中、体格のいい女達の影が数人、ぼんやり見える。
レミーは、ヒラヒラと手の平を振って、
「あハ……ハーイ、私、レミー・島田、よろしくね。うん、ちょっと空気が不健康。それに暑くないこと？　ね」
レミーは窓を開けた。
宿舎の紫煙が吹き出され、やっと視界がすっきりし、女の数が六人、しかも憎々しげにレミーを睨みつけているのが分かった。
「あ、あ、ごめんなさい。出過ぎたことしちゃったみたい」

レミーは慌てて窓を閉めた。
「で、あの、私のロッカーは何処ですか？」
度の強い眼鏡をかけた大女が、顎でロッカーをさした。
「サンクス」
レミーは、言われたロッカーに行き、開けた。開けたとたん、汚れた女の下着の山が頭から振りかかってきた。
レミーは肩をすくめ、
「これ、洗えってこと？」
大女が頷いた。
「あ、そ、新入生への歓迎プレゼントね。とってもありがとう。きょう中に洗っとくわ」
レミーは、サンクスと言わず、サンキュー・ベリ・マッチと、ことさら丁寧に言った。
「今は荷物、ここに置けないわね。私のベッドは？」
大女は、開いているベッドを顎でしゃくって教えた。
「ども、ども、どうもっと」
レミーは荷物をベッドのサイドボードに置いた。
ふと、ベッドを見ると、シーツが小刻みにうごめいている。
レミーはシーツを捲ってみた。
ミミズやゲジゲジ、サソリ、ナメクジ、ウジの類が無数にうごめいていた。
レミーは顔色一つ変えず、ベッドの上を見つめていた。

凍ったように動かないレミーの後ろ姿を見て、立ったまま卒倒したとでも思ったのだろう、女達の含み笑いが聞こえた。
だが、レミーは恐怖で動けないのではなかった。
レミーは、ベッドの上でうごめく生き物を観察していたのだ……。
――これが五万年後のミミズやゲジゲジやサソリやナメクジやウジだとすると、やっぱ、この手の動物はあんまり進化しないんだなあ――
そこまで思って、急に女の子本来の気分が戻って来た。
――ウッ！　たまらん！――
レミーは吐き気を押さえようと口を押さえた。それから、ゴクリと生唾を飲み込むと、
「外もぬかるみだけれど、ベッドの上もぬかるみね」
レミーは、シーツの端を持つと、バサッと大きく振った。
ギャーッ！
ベットの上の生き物が、女達の上に降りかかった。
「あら、ごめんなさい。窓が閉まっていたもんだから、つい部屋の中で捨てちゃった」
「このっ！」
眼鏡の大女が、レミーの胸ぐらを掴んだ。
「てめえなあ、挨拶がまだなんだよ」
「先刻、したでしょ」
「あたい達は異星人なんだよ。異星人の挨拶はね、裸になって、わたしゃこういう体でございます

って、隅から隅まで見せるのさ」
　女達が、卑猥な笑いを漏らした。
「裸は、気に入った男の人にしか見せない主義なの」
「そうかい。でも見たいものは、見たいんだよ」
　大女は、ぐいっと、レミーの胸元に手を入れてまさぐった。
　レミーは、じっと大女の顔を見つめて……、
「止めた方がいいわ」
「じゃかあしい！」
　大女は、レミーの上服をずたずたに破り取り、レミーの体を床に押し倒した。
　他の女達はレミーの荷物を勝手に開け、衣服や下着を床にばらまいている。
　レミーは、裸になった上半身の胸元を左手で隠し立ち上がった。
「サンクス、思い出したわ。昔のこと……。懐かしいなあ」
　レミーは、右手で腰に吊るした銃のベルトを外して、ベッドの上に置いた。
「グフフ、その気になったようだね、さあ、新顔のストリップだよ」
　だが、レミーがベルトを外したのは、服を脱ぐためではなく、怒りで熱くなり、銃を撃ち、女達を殺したくなかったからだった。
　レミーは右手をいったんポケットに入れて出した。右手の中指を挾んで二枚のカミソリが光っていた。

「いいか、あらくれ野郎どもとの出会いは、最初が肝心だ。ナオンチャンと同じでな」
キリーは、ケルナグールの横腹を軽く肘で叩いた。
「オーとも。任せとけ」
キリーは、指定された宿舎の扉を開けた。
ビュン！
扉にナイフが突き刺さった。
キリーの頬に赤い血の筋がついた。
宿舎の中では、五人の男達が酒を飲み煙草を扱いながら銃器の整備をしている。
「早速のご挨拶、ありがとよ」
キリーは頬の血を手の甲でぬぐって、扉からナイフを抜き取った。
「これ、誰んだい？」
見るからに大きな体格のくわえ煙草を吸っていた男が、キリーの方を見向きもせずに言った。
「若えの、そんな台詞はてめえの挨拶をしてからにしな」
「ＯＫ……」
キリーはナイフを投げた。
ナイフはボス格の男のくわえ煙草を弾き飛ばした。
「ウウッ！」
男は唇に手をやった。
血がみるみる滲んで来る。

キリーのナイフは、煙草と一緒に男の唇を二ミリだけ殺ぎとっていた。
「今なら口紅なしでキスマークだ。相手がいればの話だがな」
男達はドッと立ち上がった。
キリーは身がまえて言った。
「ケルナグールちゃん、最初が肝心よ」
「グフフ……」
楽しくてたまらなそうに、ケルナグールはポキリ、ポキリと指を鳴らした。
キリーは、後ろ手で宿舎の扉を閉めた。

真吾とカットナルの入った宿舎でも、騒ぎは持ち上がりつつあった。
身構える真吾に、宿舎の男達が手に棒を持って殴りかかろうとしていた。
「まあ、まあ、暴力はいかん、ね、暴力は……」
カットナルが間に入った。
「話して分かる相手じゃない」
「それは分かっとる。分かっとるが、暴力はいかんのよ。ここはわしに任しぇんしゃい」
カットナルは、懐から丸薬を取り出した。
「取りい出したる、この薬。なんの変哲もないが……」
カットナルは宿舎の男達にも見せた。
テーブルの上のコップに入った酒に丸薬を入れた。

たちまち、コップから煙が部屋中に湧き上がった。
「そして真吾君とわしは、解毒剤を飲む」
カットナルは、カプセル剤を真吾に渡した。
「さ、早く！」
「う、うん」
真吾とカットナルはカプセル剤を飲み込んだ。

ブンドルの入った宿舎は、先刻から静かだった。
パシン、ただ、ブンドルの刀が鞘に入る音だけが響いただけだった。
ブンドルは黙々と荷物の整理をしている。
宿舎の男達といえば、部屋の隅で青ざめて震えていた。
放尿している男もいる。
よほど恐ろしいものを見たのだ。
よく見ると、男達の戦闘服と下着の首元からベルト、そして股下までが、真っ二つに切り裂かれていた。
肌には傷一つつけず、衣服だけを斬る、ブンドル日本刀居合いの至芸が一瞬のうちに行われたのは明らかだった。

肩にキイボードとディスクプレーヤーを掛け、胸にはスカーフを二つつなげてビキニのトップが

わりにしたレミーが、ヘッドフォンから流れる曲に、ルンルンとステップを踏みながら歩いて来る。
キリーとケルナグールが横に並んだ。
「ご機嫌じゃん、レミー。バミューダ気分かい？」
「きょう、ちょっと暑いもんね。キリー、それどうしたの？」
顔のキズのことである。
「蚊に刺されたのさ」
レミーは肩を竦めた。
大通りの入口には、すでに真吾とカットナル、そして刀を持ったブンドルが待っていた。
六人はニヤリと笑い合った。
お互いの宿舎で何が起こり、どう対処したか、言わなくても分かった。
「酒でも飲むか」とキリー。
「よかろう。俺は禁酒中だがな」と真吾。
「いいじゃない。ジル星、第一日を祝して」とレミー。
「酒が飲める、酒が飲める、酒が飲めるぞ——！」ケルナグールがはしゃぐ。
「どうせまずい酒だが、この町の酒場を見学するのもよかろう」とブンドル。
「そういうことならわしも」
酒の飲めないカットナルも同意した。
六人は酒場に繰り込むことにした。

その頃、彼らが出てきた宿舎では――。
ブンドルの宿舎は、先刻と変わりなかった。
男達は部屋の片隅で縮こまり、元に戻るには、相当、時間がかかりそうだった。
真吾とカットナルの宿舎では――。
男達はのろのろとした動きで、真吾とカットナルの荷物を整理していた。
汚れきっていた床や窓を洗っている者もいる。
男達がカットナルの催眠剤から醒めるまでは、やはり相当、時間がかかりそうだった。
レミーの宿舎では――。
服をずたずたに引き裂かれ、体中あざだらけになった女達が、それぞれのベッドに縛り付けられていた。
床を這い回っているミミズやゲジゲジやサソリ等の数匹は、すでにベッドの上に這い上がっている。
「ゲジゲジやサソリの毒は人を殺すほどはないわ。でも、やっぱ刺されると痛いもんね、動かない方がよろしいと思うわ」
そう言い残したレミーの言葉が頭に浮かび、女達は目の前の小さな生き物に悲鳴をあげることも出来なかった。
悲惨なのは、キリーとケルナグールの宿舎だった。
窓ガラスは吹っ飛び、ベッドは破壊しつくされ、男達は呻き声をあげて倒れていた。
ケルナグールのパンチを数発浴びて、どの男も全治数週間は確実だった。

だが、そのうちの一人が憎悪に燃えた目でよろよろと立ち上がると、銃を抜いて出ていった。

六人が向かった酒場の入口には、酔っ払った兵士達を取り締まる、腕章をつけた警備兵の一団が立っている。

事故を防ぐために客から銃を預かっているのだ。

六人も警備兵に銃を渡した。

レミーが警備兵の一人にささやいた。

「女性宿舎の七号棟で、可愛い女の子達が、あなた達の助けを待っているわ」

「あん？」

「女の子達の虫の居所が悪くならないうちに助けてあげて、今なら助かるわ」

「本当に可愛いのか？」

レミーは人指し指を立てておどけて言った。

「抜群！」

警備兵達は頷き合うと、女性宿舎の方へ走っていった。

「いいのか？　大立ち回りがばれても……」

キリーの言葉に、レミーはあっさりと言った。

「うん、女の子を長い間いじめるのは趣味悪いもん。さ、それより、うるさそうなのいなくなったし、楽しみましょうよ」

「よっしゃ」

キリーは腕を出したが、レミーは前にいたケルナグールとカットナルの腕をとって、酒場にさっさと入っていた。
この種の店に慣れないケルナグールとカットナルに気を使ったのだ。
酒場の中は大きな鏡のあるカウンターと広いフロアがあり、まるで西部劇の酒場そのままだった。
だが、西部劇の酒場なら当然ある、壊れかけたピアノもギターもバンジョーも、安手のショーを見せる舞台もそこにはなかった。
フロアのテーブルは満席で、さんざめいていたが、六人が入ってくるとピタリと静まりかえった。
客達の痛いような視線を背に受けながら、六人はカウンターに立った。
「酒を六人に……ボトルでもいいや」
キリーはバーテンに頼んだ。
だが、バーテンは聞こえぬ振りをしている。
「酒を……聞こえないのか？」
バーテンは知らんぷりだ。
キリーはバーテンの首根っ子を掴んで、カウンターごしに引き寄せて言った。
「酒を……」
その時、酒場の入口から、銃を持った男がふらふらと入って来た。
宿舎でキリーとケルナグールに、したたかに殴られた男だ。
男はキリーの後ろ姿に向かって銃を構えた。
次の瞬間、バーテンの持っていた酒瓶がキリーに捥ぎ取られ、背後の銃を持つ男に投げられた。

キリーは、カウンターの鏡で背後に絶えず注意を払っていたのだ。
酒瓶は、銃を持つ手にぶち当たり弾けた。
キリーは男に頭から体当たりした。
男とキリーはフロアのテーブルごと倒れた。
テーブルの男達が殺気だって立ち上がった。
男から銃を素早く取り上げたキリーは、銃を真吾に投げた。
真吾は銃を殺気だった男達に向けたが、ニヤリと笑って、酒場の入口の外に投げた。
それを合図にしたかのように、酒場中の男達が立ち上がり、真吾達に殴りかかってきた。
キリーが殴る。
真吾が殴る。
最高に喜んだのは、ケルナグールである……。
——きょうは、なんて良い日だ。先刻に続いて、わしのハードパンチの獲物がこんなにいる——
「野蛮ですな、いかんです」
カットナルが、レミーの傍に来て言った。
「ほんと、まったく男って好きよね、こういうの」
レミーは、頬杖付いてうんざりしたように言った。
と、そこに真吾に殴られた男が吹っ飛んで来た。その男は不運だった。
レミーとカットナルの平手と拳が炸裂し、その場にへなへなと倒れるよりなかった。
「あら、私としたことが」

レミーはペロリと舌を出した。
「いやあ、その……暴力はいかんです」
カットナルは頭を掻いた。
テーブルは壊れ、イスは砕かれ、カウンターの鏡は割れ、何人もの男の体がケルナグールのパンチで宙を飛んだ。
カウンターの下に隠れていたバーテンは、床板を開け、中に隠していた銃に手をやった。が、そのバーテンの喉元に白刃がつきつけられた。
ブンドルだった。
「子供の喧嘩に無粋なものを持ち出すものではない。君は、我々に酒を用意すればいいのだ」
バーテンは凍りついたように身動き出来なかった。
キリーと真吾とケルナグールが客のほとんどを殴り倒した時、店の奥のテーブルから、ぬーっと立ち上がった大男がいた。
倒れたテーブルやイスを手で払い除けながら、大男は三人の前に立ち塞がった。
その男は、ただでさえ大きいケルナグールのさらに二倍の大きさがあった。
「やれ！　やっちまえ！」
大男は酒場の客達の声援を浴びて、だらしなく頬をゆるめた。
「でかい奴は、案外もろいもんさ」
キリーは渾身の力を振り絞って、ストレートを大男のみぞおちに叩き込んだ。
ボスン！　鈍い音がした。

手応え（てごたえ）は確かにあった。

が、大男はビクともしなかった。

「あれ？　どうなってんの？」

冷や汁をじとっと垂らして首をひねった。

キリーを、大男の張り手が吹っ飛ばした。

キリーの体は宙を飛び、窓ガラスから外に飛び出した。

「このっ！」

真吾はイスを持つと、カウンターに駆け上がって、自分の体重ごと、大男の頭に叩きつけた。

イスは粉々に弾け飛んだが、大男は頭をかくだけで、次は胸ぐらを掴まれた真吾の体が飛ぶ番で、

キリーの後を追って窓の外に放り投げられた。

今度はケルナグールの番だ。

窓の外からキリーと真吾が、がん首を揃（そろ）えて酒場の中を覗き、ケルナグールに叫んだ。

「よせ、ケルナグール」

「いくらお前でも無理だ」

ケルナグールは耳をかさなかった。

じっと大男を見つめ、それからピョコンピョコンと肩を揺らしてフットワークを使い始めた。

それまでの素人との殴り合いでは見せたことのない姿だった。

ヘビー級のボクサー時代のフットワーク……ケルナグールは初めて本気になった。

「グォーーッ！」

大男はケルナグールに摑みかかろうとした。
コツン、コツン、ケルナグールのジャブが大男の顎を突っついた。
大男の首が揺れた。
続いて、コチンと軽い音がした。
何の音だか誰にも分からなかった。
それは目にもとまらぬケルナグールのストレートが、大男の顎に決まった音だった。
ケルナグールは、くるりと大男に背を向けると、カウンターに行き、カットナルに言った。
「湿布薬を作ってくれんかのう」
ケルナグールは手をひらひらさせて、
「明日、拳が腫れそうじゃ」
大男は棒立ちに突っ立っている。
客達は、大男のまわりに寄って来た。
「どうした？」
「なぜ、やっつけないんだ」
客の一人が大男の袖を引っぱった。
それを合図にしたかのように、大男の鼻から血がプッと吹き出し、そのまま後ろにひっくり返った。
客達にいい知れぬ戦慄が走った。
ケルナグールの後ろ姿に、一歩また一歩と後退った。

ケルナグールが振り返った。
客達の顔に恐怖の色が走り、我も我もと足早に酒場から逃げ出して行った。
窓の外のキリーと真吾は、ポカンと口を開けたままだ。
「さすがプロだなあや」
「ああ……うん」
やっと、それだけ言えた。
目を覚ました大男が悲鳴とも呻きとも知れぬ声を出し、腰の抜けたまま、這いずるように店の外に出ていく。
ケルナグールは、カウンターの中のバーテンを睨んだ。
「酒は?……」
「ハ、ハイ」
バーテンは、傍のブンドルを押しのけるようにして、素早くカウンターの上にありったけの酒瓶をずらりと並べた。
「あ、あの、ご自由に……きょうは借り切りでどうぞ」
言い終えると、転がるように店から飛び出して行った。

＊

酒場の中は静まり返っている。
地球の六人は、まるで外の世界からとり残されたようだった。

六人は、思い思いの酒瓶とグラスを、思い思いの場所に坐って、チビリチビリと飲んでいた。酒の飲めないカットナルのかじる合成食品の柿の種風のおつまみの音だけがカリカリと聞こえている。

禁酒中の真吾は、甘味のないレモン味風炭酸水を舌でころがしている。

沈黙に耐えきれないといったように、カットナルが口を開いた。

「異星人の寄せ集め部隊とはよく言ったものだな。何が寄せ集めだ。実にまあ、よくまとまって、我々地球人に敬意を示してくれるではないか」

真吾も頷いた。

「異星人といっても、ここには異星人という名の一つのグループと地球の六人と、二種類しかいないみたいだな」

「かもしれぬな」

ブンドルが呟いた。

「えっ？」

一同はブンドルを見た。

「この街にいる異星人達は、あまりに性質が似ていすぎる。数を頼る時は強気だ。だが、一度、相手の力が上だと思うとさっさと逃げ出すか、もしくは、後ろから襲いかかる。

そして、何より、この不味い酒だ……。町の外には豊かな自然がある。美味い酒を作れる材料があるはずなのに、ここに五十年も住んでいてワインの一つもない。

異星人の寄せ集めなら、何処かの星の人間が酒造りを始めてもおかしくあるまい」

「酒か、ブンドル先生らしい考え方だね。ま、いずれにしろ、遅かれ早かれ俺達は後ろから撃たれるぜ」
キリーは投げやりに言った。
「わしのパンチも、後ろの弾には通用せんもんな」
六人の誰もが、この町で長生き出来るとは思わなかった。
いまさら危険な宿舎に戻る気もしなかった。
重苦しい空気が流れた。
「あー、嫌だ、嫌だ。辛気臭いの……」
レミーが坐っていたカウンターから飛び降りた。
「ね、みんな、考えていたって始まらないわよ。こんな時はパーッとやるに限るわ。ね、踊んない？　せっかくの酒場だもん、音楽あればほとんどダンシングバー、なんちゃって」
レミーが、カセットディスクプレーヤーのスイッチを押した。
レミーがキイボードで吹き込んだディスコミュージックがガンガン流れた。
レミーは一人で踊り始めた。
「さ、みんなもおいでよ」
「よっしゃ」
真吾がクイッと酒風に炭酸水を飲みほすと、レミーの前に行って踊り出した。
「あ、あいつ、こういう時だけ手が早いんだから」
慌てて、キリーも飛び出して踊り始めた。

懐かしいダンス、懐かしいディスコ……。
カットナルは目を細めた。
指が足が自然にリズムをとっている。
「みんな、若いのう……じゃが！」
カットナルはすっくと立ち上がった。
「伝統的本格ディスコダンスを知るは、我のみ！　フィーバー！」
カットナルは踊る三人を押しのけるようにして、中央で踊り始めた。
その踊りは、若い三人があっけにとられるほど本格的だった。
懐かしの一九八〇年代。ディスコが最も盛んだった頃のダンスそのままだった。
女友達のいなかったカットナルは、一人でも踊れるディスコダンスが好きだった。
だが、カットナルの青春時代には、もう一人で踊れるダンスは廃れ、ペアや三人、四人で踊るファックダンスやグラインドダンスの全盛だった。
カットナルは、一九八〇年代に青春を過ごしたかったと何度思ったことだろう。
それでもカットナルは、音楽芸能博物館からビデオディスクを借り、鏡を相手に一九八〇年代のダンスを完璧にマスターしたのだった。
カットナルは、鏡の前では往年のスター、ジョン・トラボルタであり、マイケル・ジャクソンだった。
その踊りが今、ジル星の酒場で、陽の目を見たのだ。
若い三人も、カットナルの仕草を真似て、踊った。

――一九八四年グラミー賞曲のイメージビデオの振り付けか……古いダンスだが、カットナルが踊れるとは、まさにスリラーだ――

ブンドルは、そう思ったが、それを口に出すほど野暮ではなかった。

曲が終わり、肩で軽く息をしながら、レミーがケルナグールとブンドルの傍に来た。

「ね、今度の曲は、一緒に踊ろうよ」

ケルナグールは頭を掻いた。

「いやあ、わしゃ、あの手の踊りは苦手じゃけ」

「だったら、お好みは？」

ケルナグールは小さな声で言った。

「ワルツなら少しや……」

――ワルツ!?――

隣のブンドルの体がグラリと揺れた。

レミーは思わず叫んだ。

「素敵……でも、ワルツの曲は手元にないし……」

「私が弾こう」

ブンドルは立ち上がり、レミーのキイボードを置いてあるカウンターへ行った。

ケルナグールは背筋を正して立ち上がった。

「では」

ケルナグールは、レミーの手を取ると酒場の中央に出て行った。

レミーのキイボードは、オーケストラだろうが、大正琴の音だろうが、どんな音でも出せる万能キイボードだ。
そしてブンドルの弾く「美しき青きドナウ」はウィーン・フィルも裸足で逃げ出す名演奏だった。
だが、弾いているブンドル自身は、二人のダンスを呆然と見ていた。
なぜなら、ケルナグールはあまりに華麗にレミーのパートナーを勤めていたのだ。
ナチュラルターン、リバースターン、クローズドチェンジ——ワルツの足の運び——、何処からみても完璧だ。
あのケルナグールが！……ブンドルは絶句するよりなかった。
ケルナグールは思い出していた。
妻のヨーコ夫人が手取り足取り社交ダンスを教えてくれた日々を……。
そしてそれは、ボクシングのフットワークを巧みにこなすケルナグールにとって、そう難しいことではなかった。
曲が終わった。
レミーは、思いがけず出現した素晴らしいダンスパートナーに声も出ず、驚きの溜め息だけを洩らした。
「レミーさん、もう一曲いかがかな。今度は、タンゴを……」
「喜んで」
二人はコンチネンタル・タンゴを踊り始めた。

その踊りも見事だった。
曲が終わった時、二人の前にキリーがやって来て深々と頭を下げた。
「レミーさん、お相手頂けますか？　この紳士ほど上手くはありませんが、私も少々、サンバなど嗜(たしな)みますもので」
「レミーさん、踊ってあげて下さい」
ケルナグールはレミーの手をキリーに渡した。
マナーも抜群だ。
レミーはキリーとサンバを踊り、それから真吾とルンバを踊り、カットナルと懐かしいツイストを踊り――踊り、踊り、踊り、知っている限りの踊りをフラメンコからチャールストンまで、へとへとになるまで踊った。
地球を遠く離れて、こんな所で踊れるなんて、懐かしくて、楽しくて、涙が出そうだった。
ブンドルは、その数々の踊りを誰よりも上手く踊れる自信があった。
しかし、それを見せつけて、せっかく楽しんでいるみんなを白けさせたくなかった。
――これだけのレパートリーの曲を弾きこなせる者もいないし、まあきょうは良しとしよう――
ブンドルはキイボードの弾き手に徹することにした。
酒場から町へ、地球の曲は流れ続けた。だが、町の人々は誰も関心を示さなかった。
地球の六人だけの宴は夜更けまで続き、疲れきった六人が酒場のテーブルによりかかってうとうととしかけたとき、酒場に銃を持った数人の警備兵を率いて異星人部隊隊長がやって来た。
明らかに六人に脅えている様子が見てとれる。

隊長は生唾を飲み込んでから、意を決したように叫んだ。
「地球人六名、明朝、反乱軍討伐隊に参加、出撃を命じる」
そして、六人を憎々し気に見回して言った。
「お前らは問題が多過ぎる。早くくたばっちまえ」
六人は、思わず微笑した。
出撃した方が、この町にいるよりははるかに安全だ。
ブンドルが隊長に答えた。
「命令、有難く従わせて頂く。さらに一言、付け加えさせて頂くが、あなた達は私達の乗ってきた小型機の仕組みをご存じかな？」
隊長は、けげんそうな顔をした。
「ご存じないなら動かさない方がよいと、ご忠告しよう。あれは火花一つで大爆発を起こす」
「本当か？」
「犠牲を覚悟なら動かしてみるがいい」
ブンドルは、凄味を利かした声でそう言った。
隊長は体を震わせ、苦り切った顔で吐き捨てた。
「それはわしの勝手だ、とっとと出撃の準備をしろ！」
そう言い残すと、足早に酒場から出て行った。

第5章

密林の激戦

みんな死んでしまった

翌朝――。

六人は、四十人の異星人小隊と共に町を出発した。

小隊に与えられた命令は、作戦とはとても呼べぬ杜撰なものだった。

「目標、反乱軍二百名の抹殺、目標を達するまでは帰還を禁ずる」

「こんな、メチャクチャな命令があるか」

真吾は、呆れてものも言えなかった。

異星人部隊に紛れ込んだ六人の厄介者を、早く処分したい――。

そんな気持ちがありありと見て取れた。

もっとも、そのために、一度はばらばらな部隊に分けられた六人が、また一緒に行動出来るようになれたのだから、さほど文句を言う気にもなれないのも確かだった。

――俺達は二度とこの町には戻っては来ないだろう――

真吾のその思いを誰もが感じていた。

だからこそ六人は、持てるだけの荷物を袋に入れて背負っていた。

その姿は、まるで季節外れのサンタクロースだった。

昼なお暗い密林は、じめじめして暑苦しい。

じっとしていても汗が滲み出てくるのに、重い荷物を背負っての行動は、まさに難行苦行だった。

そんな六人を他の小隊兵達は、触らぬ神に祟り無しを決め込んだのか、脅えるような目で遠まきにして進んで行った。

重なりあった密林の木々の枝葉の間から、わずかに差し込む木漏れ陽が、羊歯や苔の蒸した地表

を垂直に照らし出す頃、一行は昼食のため休息することになった。
六人は、他の兵士達と少し離れて、ひときわ大きな木の根元に坐った。
「ブンドル先生の料理セットが早く使えりゃいいんだがね」
携帯用の化学食品をつまんで、キリーがいまいましそうに言った。
そして、いきなり自分のほっぺたを叩いた。
「いてて、このやろ」
手の平を見ると、大きな蚊が、キリーの血をたらふく吸い込んで潰れている。
「ちえっ、俺の血は生鮮食料品じゃねえんだぞ」
パチン、パチン、他の五人も忙しなく体を叩き始めた。
ウァーン。
微かだが、奇妙な音が頭上から聞こえてくる。
「？」
一同は思わず、ゾッとなって頭上を見上げた。
大きな木の枝に霧のようなものがかかっていて、ぐんぐん降りてくる。
それは霧ではなかった。
一同の血を狙う蚊の大群だった。
たちまち、六人は蚊の嵐の真っ只中だ。
六人は、それぞれの服を頭から被り、蚊の襲撃から身を守った。
「カ、カカ、カットナル、殺虫剤はないんか」

ケルナグールが喚いた。
口を開けるとその中に蚊が飛び込んでくる。
目も開けていられない。
「殺虫剤、殺虫剤……」
カットナルは、薬品を詰めた袋をまさぐった。
「DDT……」
カットナルはDDTの白い粉を蒔き散らした。
だが何の効果もない。
「BHC……これもだめ」
カットナルは、片っ端から殺虫効果のある薬品をばらまき、ときには燃やした。
「フェノチアジン、ディルドリン、グロロデン、ロテノン」
どれもこれも効果がない。
「こうなりゃ、亜ヒ酸カルシウムにテキサフォン。農薬じゃ！」
「待て、そんなの使ったら、こっちの体が持たない……」
真吾が慌てて叫んだ。
「こうなれば、血を吸わせないように体を守るしかない」
ブンドルもたまらずに叫んだ。
「どうやって!?」
「火だ」

ブンドルは、発煙筒に火を付けて振りまわした。
確かに炎は、効果があった。しかし、それ以上に、煙に噎せ返ったのは人間の方だ。
六人は、涙を流して咳を連発した。
「たまらんぜ、こりゃ」
他の兵士達は、右往左往する六人を、薄笑いを浮かべて見つめている。
やがて蚊の大群は、大暴れする六人よりは楽な獲物、小隊の兵士達を見つけて、そちらに襲い掛かっていった。
ほっと一息ついた六人は、涙を拭きながら兵士達の方を見て、目をむいた。
蚊の大群にたかられながら、兵士達は全く意に介さず食事を続けていた。
無数の蚊に血を吸われながら、痒がる素振りすら見せない。
「あいつら、どういう体質しているんだ？」
キリーが呆れ果てて、呟いた。
「蚊に対して免疫が出来ているとしか言いようがないわい」
カットナルが肩を竦めて首を捻った。
「それにしても、あの蚊に、なぜ殺虫剤が通用せんのだろう」
「多分、それも免疫だと思うわ」
レミーがカットナルに言った。
「昔、この星は公害で汚染されていた訳でしょ。虫達にも化学薬品に対する抵抗力が出来ていても、不思議はないわ」

「しかし、俺達は生身の人間だ。これじゃ、反乱軍にやられる前に、小っちゃな吸血鬼のお蔭で血を吸い取られてミイラになっちまうぜ」
「化学薬品の殺虫剤が効かないとしたら……」
レミーは爪を噛みながら、少し考えていたが、
「カットナルさん、ちょっと付き合って下さらない」
「うん？」
「ここの気候はアフリカに似ているわ。もしかしたら、あれがあるかもしれない」
「何かな？」
レミーはそれには答えず、みんなに言った。
「ちょっとここで待っていてね」
レミーはカットナルと共に木々の茂みの中へ入って行った。
三十分ほどして戻ってきたレミーとカットナルは、一同に黄色っぽい粉を見せた。
「これを燃やしてみるの……うまくいったらお慰み」
レミーは粉を、紙巻き煙草のように紙に包んで火を付けた。
「レミーちゃん、それ、まさかマリファナじゃ……」
キリーが茶化した。
「私、どこかの国の芸能人じゃありません」
紙に巻かれた粉は、じわじわと燃え、白い煙がゆるやかに出始めた。
ポトリ、ポトリ。

白い煙にあたった蚊が落ちていく。
「やったわ」
「何の魔法ぞい」
目を丸くするケルナグールにカットナルが言った。
「殺虫成分、ピレトリンの効果じゃよ」
「ピレトリン？」
「早い話がこんな訳」
レミーは、小さな白い菊のような花を見せた。
「かわゆいでしょ」
「似合うぜ、レミー。でも、その花がどうしたっていうんだ？」
「多分、地球でいうシロバナムシヨケギクの一種なの。昔は、ほとんど日本で栽培していたんだけど、今はアフリカのケニアが一番多いんですって。花を乾燥させて燃やすと、ピレトリンって殺虫成分が出るのよ。人畜無害で、冷血動物や虫の神経や筋肉だけに効く訳。日本では除虫菊ともいうそうよ」
「早い話が、蚊取り線香か」
真吾の言葉にブンドルが言った。
「なるほど、化学薬品さえ通じぬ害虫に、野に咲く可憐な花が効くとは、自然とは面妖(めんよう)ないたずらをするものだな。誠に自然とは……」
カットナルとケルナグールが思わず後を続けて呟いた。

「美しい……」
ブンドルは、怒る気にもなれなかった。
「そろそろ新しい形容詞を考えねば……」
「これでカカカカがいっぱい、キンチョーの密林も安心って訳だな」
真吾は、限られた日本人しか分からない駄洒落を言って誰にも理解されず、
「何？　それ？」
とレミーに聞かれ、
「いや、なんでもない」
一人で白けるよりなかった。

昼の休息を終えた一同は、再び密林を歩き始めた。
六人はもちろん、菊の花の粉末を含ませた布を縄状にして火を付けた蚊取り線香を腰にぶら下げていたのは言うまでもなかった。

やがて一行は、密林がとぎれ、草地の広がる窪地にやって来た。
上空には、カラスの群れが不気味な鳴き声をあげながら舞っている。
兵士達は窪地の光景を見て、思わず銃を構えた。
明らかに異星人部隊と分かる死体が無数に転がっていた。
六人は、思わず顔を背けた。

それは、戦場で見かける普通の死体ではなかった。
どれも、ずたずたに切り裂かれ、内臓がなかった。
真吾が呟いた。
「こいつは、戦いでやられたんじゃないな」
キリーが聞いた。
「ん？　どうしてだ？」
真吾の代わりに、死体から顔を背けながらレミーが言った。
「死体を見れば分かるわ。その人達、牙でやられているの」
「牙で？」
「多分、ハイエナかオオカミなどの犬科の動物か、猫科の猛獣よね。戦いで怪我をした人を襲って味を覚えたんだわ」
「俺達を襲う危険もあるな」
キリーがうんざりして言った。
「人殺しに来て、ついでに猛獣狩りまで楽しめるって寸法か……チェッ、殺し屋にはこたえられねえもてなしだな」
そのときだった。
ピシッ！　鋭い音がして、兵士の一人が倒れた。
その背中に弓矢が刺さっていた。
一同は慌ててその場に伏せた。

真吾は倒れた兵士に這い寄った。
すでに絶命している。
即死に近い状態だ。
弓矢で即死とは……。
真吾は弓矢を兵士から抜いた。
案の上、毒が塗ってある。
真吾は矢の先を指して、六人にそれを知らせた。
銃声のしない弓矢では、敵がどこから射ったのか分からなかった。
ヒュッ！
風を切って、密林の奥から無数の矢が盲撃ちで射られ、降ってくる。
このままここに這いつくばっていたのでは死を待つばかりだ。
矢の射程外に逃げるか、敵の懐ろに飛び込んで降ってくる矢を避けるか、二つに一つだった。
六人の行動は迅速だった。
それぞれの武器を持ち、弾けるように立ち上がると密林に突進した。
背後でまごまごしていた兵士達の矢に射抜かれた悲鳴が聞こえる。
倒れた兵士を盾にして隠れる兵もいる。
ここいらの統率のなさ、自己保身に徹する姿は、なるほどレミーの言う寄せ集め部隊そのものだ。
真吾は走りながら、手榴弾を密林に向かって投げた。
続いてレミーが同じ場所にボーガンに備え付けられたバズーカを三発撃ち込む。

キリーがマシンガンを連射した。
今から飛び込む密林の茂みから、いるかいないのか分からないにしろ、敵を追い払うのだ。
続いて、カットナルが瞬間的に敵の目をくらませるフラッシュ弾を投げ込む。
「ウォオォォ」
ケルナグールは、小型機から落ちて以来、お気に入りの鍋をヘルメットにし、フライパンを盾にして茂みに突っ込んだ。
ブンドルが刀で茂みの枝を巧みに切り開きながら飛び込む。
真吾、キリー、レミー、カットナルが続いて、それぞれ密林の幹にペタリと張り付いた。
密林の中は物音一つしない。
敵の死体らしきものもない。
水平方向の攻撃は先刻完膚(かんぷ)ないほど、撃ち込んだはずだ。
それでも、死体はおろか、怪我人もいないとは……敵は木の上だ。
しかし、こんなに枝や葉が密生した林の中では、敵の姿が見通せない。
同じことが敵にも言えるはずだ。
足元の六人の居場所が分からないのだ。
真吾はレミーに自分の頭上を指さした。
そして、まばたきのモールス信号を送った。
——俺の頭の上にバズーカをぶちこめ——
もし、他の木に敵がいれば、頭上で砲弾が炸裂(さくれつ)し、敵に真吾の位置を知らせることになる。

レミーはかぶりをふって、モールスで答えた。
――おとりになる気？　危険だわ――
――いいからやれ！　おとりになろうがなるまいが、今のままでは危険度は同じだ――
真吾の表情には有無をいわせぬ強さがあった。
レミーは頷いた。
そして、バズーカに砲弾を装塡した。
――準備ＯＫ――
レミーは、バズーカを真吾の頭上に向けた。
――やれ！――
レミーは発射した。
真吾の頭上の枝や葉が粉微塵に吹き飛んだ。
案の上、敵は頭上だった。
暴風にとばされた敵が悲鳴をあげながら落ちてくる。
他の木の上に隠れている敵の動揺を表すように、それまでピクリとも動かなかった木々の葉がかすかに揺れる。
「そこだ！」
キリーはナイフを投げた。
ドサッ！
黒ずくめの敵が、キリーのナイフに胸を突きたてられ落ちてくる。

ご丁寧に、アイスホッケーのゴールキーパーのような黒い仮面までつけている。
キリーは倒れている敵に駆け寄り、ナイフを抜き取ると仮面を外してみた。
「！」
キリーは息を飲んだ。
仮面の下の死に顔は女だった。
反乱軍にも女性部隊がいるのか……。
だが、キリーに驚いている暇はなかった。
小振りのまさかりや、忍者のくないのような刃物を持った黒ずくめの敵が次々に頭上から飛び降りてきたのだ。
もはや、銃や弓矢などの飛び道具を使える距離ではない。
敵味方、入り混じっての肉弾戦だった。
ブンドルの日本刀が次々と敵を斬り、ケルナグールのフライパンの一撃一撃が、テニスボールのように黒い敵を吹き飛ばしていく。
キリーはナイフを素早く仕舞うと、右手に鉄のナックルをはめ、左手に自転車のチェーンを持って、ムチのように敵の首をからめては殴り倒して行く。
「気分は、ほとんどブロンクスの出入りだぜ」
レミーと真吾は、格闘技の専門家といっていい。
空手や柔道はお手の物だし、相手の急所もよく知っている。
カットナルはメスと鉗子を持って、忙しなく動きまわって、戦っている敵の背後から首筋のあた

りを突っついてまわった。
人間の首筋の後ろには、脳管という急所があり、そこを貫けば、どんな大男も一瞬で即死してしまうのだ。
ドクーガ時代、政敵を葬り去るために、人間の脳を手術して、人格を意のままに変えてしまうロボトミー手術を研究したことのあるカットナルだからこそ知る急所だった。
六人のそれぞれの特技を生かした肉弾戦で、黒ずくめの敵は次々と倒されていった。
「突撃!」
そのとき、弓矢のために足止めをくっていた小隊兵士達が、茂みの中に雪崩込んで来て、銃を乱射した。
「馬鹿! こんな所で撃つ奴があるか!」
真吾が叫んだ。
敵も味方も見境なく、兵士達の盲撃ちが続いた。
頭を抱えて身を伏せた真吾が、銃撃が終わって立ち上がったとき、黒ずくめの敵部隊は、誰一人生き残っていなかった。
そして、息の絶えた黒ずくめの敵を両脇に二人抱えて、鍋を頭に被ったケルナグールが、木の幹に寄りかかっていた。
腹部を真っ赤に血に染めて、目を見開いたまま、動かなかった。
息もしていなかった。
「ケルナグール……」

カットナルは見開いたケルナグールの目を優しく閉じてやった。
折り重なった黒ずくめの敵の間から、口から血を吐きながら、キリーが出て来て、一、二歩歩いて、その場にへたり込んだ。
駆けよる真吾とレミーを虚ろな目で見つめた。
「胸に風穴があきやがったぜ」
「何も喋るな」
「いいってことよ。俺ぁ、こんなふうになってブロンクスの路上で死んでるお釈迦さんを見慣れている。もう助かりゃしねえよ。……真吾、頼みがあるんだ」
「なんだ」
「こういうのって、助かりもしねえけど、なかなか死ねねえんだ。苦しいんだよ。血の垂れ流しって奴はな……。ひと思いにお前の拳銃で引導渡してくれねえかな」
「しかし」
「頼む……」
「俺には出来ない」
カチッ！
撃鉄の起きる音が、真吾の背後でした。
レミーがキリーに向けて銃を構えていた。
「レミー！」
レミーは涙ぐんでいた。

「キリーの苦しむの見たくない」
キリーは、フッと笑って言った。
「レミーちゃんなら、俺も本望さ」
ズガーン！
密林に銃声が響いた。
レミーは打ち終えた銃を投げ出すと、異星人の小隊長の胸倉を掴んだ。
「なぜ撃ったの？　二人が死んだのは、あなたのせいよ」
思いきり平手打ちを食らわし、がっくりと膝を突き、そして肩をふるわせて泣き出した。
小隊長は、こともなげにトランシーバーで司令部に状況を報告した。
「地球人、ケルナグールとキリー、戦死しました。二人を含め我が方の死者、七名、怪我人はありません」
それから、真吾達に向かって言った。
「死んだ者は帰ってこん。ここで抹殺したのは二十四人、後、目標まで百七十六人だ。先は長いぞ。出発する」
仲間の死体も放置したまま小隊長は前進を開始した。
ブンドルとカットナルは、小隊長の後ろ姿を睨み付けていたが、やがてのろのろと部隊長の後について動き始めた。
真吾はレミーの肩に手を置いて言った。
「よくやってくれた。キリーもきっとあの世で喜んでいるよ。行こう」

一行は、再び、急襲を受けた窪地にやって来た。
小隊長が、置き捨てられた真吾達の荷物を指さして言った。
「死んだ二人の荷物をどうするつもりかね。俺達は持って行かんぞ」
真吾が答えた。
「置いて行くよ。俺達の荷物もな。いつ襲われるか分からん、こんな状態で荷物を持ってちゃ足手纏いだ」
ブンドルが頷いた。
「仕方あるまい。料理セットは残念だがな」
四人は、銃弾や爆弾、携帯食料、薬など、必要最小限のものを荷物の袋から取り出した。
「だからといって、敵にくれてやることもないか……」
四人は荷物を一まとめにすると、枝や草でカモフラージュして隠した。

夜がやって来た。
小隊は、密林を見降ろす小高い丘の上で夜営することになった。
敵に目立つため火も焚かず、毛布にくるまって息を殺すようにして眠るのだ。
昼間あれほど暑かったのに、夜は底冷えのする寒さだ。
それは、この丘の海抜がかなり高いことを示していた。
密林の向こうに火山の噴火なのだろうか。時々、夜空を赤く染める光が走っていた。
夜の密林は、耳鳴りのように聞こえる虫の音や、夜行動物の咆哮で騒がしかった。

それが、ある意味では、夜営する小隊にとって警報装置の役目を果たしていた。
虫の音が止んだとき、それは、この丘に何者かが迫っていることを意味しているのだ。
そして今、目を閉じていた真吾、レミー、そしてブンドルの瞳が、何かに気付いて見開かれた。
虫の音が止んだ――。
小隊には二人の見張りが交代で立っていた。だが二人とも、まだ虫の音が止んだことに気付いてはいない。
ブンドルは、そっとカットナルを揺すって起こすと、傍の刀に手をやった。
真吾とレミーもそれぞれの武器を構えている。

ケケケ……人間の笑い声のような音が聞こえた。
見張りが身構えた。
次の瞬間、闇の中を何かが走った。
「ギャ――ッ!」
二人の見張りの悲鳴が聞こえた。
ブンドルが叫んだ。
「カットナル、照明弾だ!」
「オゥ!」

一瞬、明るくなった丘の上で、狼のような獣が数頭、二人の見張りの首筋に食らい付いていた。

獣の一頭が、顎から血を滴らせながらレミーを見すえた。

ハゲかかった頭、ピンと伸びた耳、どんよりと曇って血走った目、黒と灰色の斑らになった体毛。

「なんだ、あれは？　狼の一種か？」

「ノン、狼より始末が悪いわ、狼は滅多に人を襲わない……あれはハイエナの一種よ。獰猛で狡猾で、口に入る物なら、死肉だろうが、生きた動物だろうが、かまわず襲いかかるの。

しかも、あれは、五万年先のハイエナ、知能も発達しているし、だいいち、あいつの牙は細菌の巣だと言っていいわ」

小隊の兵士達も弾かれたように起き上がると、のたうち回っている見張りから後退った。

闇の中から、次から次へとハイエナの群れが現れ、見張りの体を引き裂いた。

まるで、獲物に殺到する陸のピラニアだ。

「何頭いるか分からんぞ」

兵士の一人が照明弾を、見張りに食らいつくハイエナの群れの真ん中に投げ込んで、手榴弾を放り込んだ。

ハイエナは飛び去った。

レミーの悲鳴に近い声が聞こえた……。

「やめて！　こいつらは攻撃を受けて怯むような連中じゃないわ」

だが、遅かった。

ハイエナの数頭が手榴弾に吹き飛ばされ、仲間を失ったハイエナ達は、怒りを兵士達に向けた。

ハイエナの群れは、ジリジリと兵士達に接近して行く。

小隊長が喚いた。
「火を焚け！　叢に火を付けるんだ」
「馬鹿な真似はやめて！　動物が火を恐がるなんて迷信に過ぎないわ。かえって興奮させるだけよ」
　そうなのだ。
　動物が火を恐がるように見えるのは、火の側にいる人間と、なによりも人間の持つ武器が恐いから近づかないだけなのだ。
　血に飢えたハイエナの集団には、全く無意味だといえた。
　しかし、聞く耳を持つ兵士達ではない。
　叢に焼夷弾が爆発し、あっという間にあたり一面が火の海になった。
　怒りを煽られたハイエナ達は、体が燃えるのも構わず、兵士達に飛びかかった。
　マシンガンが、手榴弾が、あたり構わず炸裂した。
　誰もが自分を守るだけで精一杯だった。
　ブンドルの刀は闇を舞いつづけた。
　もう何頭のハイエナを両断したことだろう。
　だが、さしもの刀も、血のりがこびりついて斬れなくなってきた。
　もう斬るというより、ぶっ叩いているという表現の方が適当だった。
　真吾の銃の弾丸もつきかけていた。
　いつの間にか、絶え間なく聞こえていたレミーのバズーカの音が聞こえなくなっていた。

やがて朝陽が昇り、陽の光に追われる吸血鬼さながらに、ハイエナの群れが去ったとき、焼け野が原になった丘の上には、ハイエナとも食いちぎられた人間ともつかぬ死体が黒こげになって無数に散らばっていた。

生き残った兵士は十人も残っていなかった。レミーの姿もカットナルの姿もなかった。

レミーのバズーカ付きのボーガンは、血塗れで、焼け爛れた草の上に放り出されてあった。

カットナルは遺留物すら残っていなかった。

この丘に横たわる死体のどれがレミーで、どれがカットナルなのか、遺体のあまりのいたみようで確かめようがなかった。

「俺達は何のために来たんだ。ここには、殺し合いと血に飢えたハイエナと、それしかないのか……」

小隊長に呻くように呟く真吾に、小隊長は何も答えず、トランシーバーで事実だけを司令部に報告した。

「地球人の女と片目の男、そして味方二十四人が野獣に襲われ、死亡しました。作戦続行は不可能と思われます」

だが、トランシーバーの答えは冷たかった。

「所期の目標完遂まで、作戦は続行せよ」

小隊長は顔色も変えずに、

「分かりました。作戦を続けます」

真吾が小隊長につめ寄った。

「たったこれだけの兵隊で何が出来るというんだ。俺達に待っているのは全滅しかない」
「かもしれないね」
「あんたには、部下の命を守る気持ちはないのか」
「私は命令を守るだけだ」
ブンドルは冷ややかに小隊長を見つめ、真吾に言った。
「どうやら、それがこの連中の正体らしい。上の命令は何より絶対で、そのくせ生命が危うくなれば自分だけは助かりたいという、他人を顧みない自衛本能を見せる……。人間的といえば、これほど人間的な奴らはいない」

再び密林に入った一行は、野獣と反乱軍の襲撃に脅えながら前進を続けた。前進と言えば聞こえはいいが、反乱軍との遭遇を求めて、密林の中をさ迷っているに過ぎなかった。

やがて、密林で閉ざされた視界が開けると、そこは黄色く染まった水がゆるやかに流れる大河の辺の岩場だった。
ブンドルが真吾に言った。
「ジルの母艦で見た地図によると、この上流に反乱軍の要塞があるらしい」
あたり一面、卵の腐ったような臭いが鼻をついている。
「この臭いは硫黄か？」
「おそらくな。この河は、大規模な火山脈を源に発している。大量の硫黄が流れ込んでも不思議

はない」
「硫黄があれば、火薬が作れる。反乱軍は、弾薬には苦労しない訳だな」
そのときだった。
いきなり河の水面で爆弾が弾けた。
「伏せろ！」
密林の中から、マシンガンの銃弾が飛んで来て足元の岩場で弾けた。
「また、奴らか」
密林の中の敵の姿はまるで見えない。
小隊は、見晴らしの利く河の辺で釘づけになった。
「これでは射的の的だ」
ブンドルは、真吾のマシンガンを引ったくると、
「私が掩護する、みんな河に飛び込むんだ」
「すまん！」
真吾は後を頼むとでも言うように、ブンドルに軽く敬礼の素振りを見せた。
「私にまかせろ」
ブンドルは密林に向かってマシンガンを撃ち続けた。
真吾を先頭に、小隊の一同は我先に河に飛び込み、潜った。
水面に銃弾が水飛沫を上げた。
小隊の面々が、河の流れに流されるまま、銃の射程距離外まで来たとき、ブンドルのいたあたり

の岩場が大爆発を起こして弾け飛んだ。
それまでリズミカルに響いていたブンドルのマシンガンの音が、ピタリと止んだ。
河に迫り出した崖の下の河の淀みに辿り着いた小隊長は、立ち泳ぎをしながら隣にいる真吾に言った。
「どうやら、あの長い髪の地球人も死んだようだな」
真吾はうつろな目で小隊長を見つめてうめいた。
「ああ、そして俺もいかれちまったようだ」
真吾は、悶えるように仰向けになった。
黄色い水面に赤黒い血がパッと広がった。
真吾の体は仰向けのまま流されて行き、やがて水面下に沈んでいった。
切りたった崖をほうほうのていで攀じ登った小隊長と兵士達は、崖の上にたどりつくと安堵の溜め息を漏らしその場にへたり込んだ。
小隊長は、司令部にトランシーバーで連絡した。
「地球人の最後の二名、死亡。我々は今後も作戦を遂行する」
そこまで言って、小隊長はトランシーバーから手を離した。
崖の上を黒ずくめの一団が弓矢を持って取り囲んでいるのに気付いたのだ。
次の瞬間、無数の矢が兵士達の頭上に襲いかかった。
小隊長は転がるように、今、登って来た崖下に飛び降り、がむしゃらに泳いで向こう岸に向かった。

岸に泳ぎ着いた小隊長は、疲れきった体で、それでも、よろよろと立ち上がり密林に向かった。
だが、そこまでだった。
小隊長は声も出せずに死んだ。
岩場の陰からいきなり現れた三つ目の軟体動物の鋭い牙が、背後から小隊長の頭を食いちぎったのだ。
それは、宇宙船で、カプセルの中のレミーを襲った蝸牛（かたつむり）の特殊変異体ゲズルと同種の猛獣だった。
こうして、地球の六人を含む異星人四十人の小部隊はわずか一日余りの間に全滅した。

「思いのほか、脆（もろ）かったようですね。地球人も……」
異星人部隊の司令部から連絡を受け取ったジーは、ビジョンに写るジル星を見つめた。
後ろに控えた女が答えた。
「所詮（しょせん）、あの異星人には、反乱軍を抹殺する能力などなかったのですわ」
「でも、期待倒れにしろ、試してみる価値は十分ありました。
私達にとって、初めての新しいいい異星人でしたからね」
ジーは冷たい微笑を浮かべた。

＊

小隊長が命を落とした五百メートルほど下流の岸に、河にのまれたはずの真吾の体が、仰向けになったまま流れついた。

真吾は、照りつける陽の光に目をしばたたかせると、懐ろからビニール袋を取り出して捨てた。
それは、先刻まで血糊の入っていた袋だった。
そして立ち上がり、伸びをすると、密林の茂みの中へ入っていった。
「ようよう、みんな役者だね、ご苦労さん」
キリーが真吾に笑いかけた。
レミーがいた。
ブンドルも、ケルナグールも、カットナルも……、ご丁寧に、捨てたはずの荷物の袋もそこにあった。
「でも、アカデミー賞ものはキリーよね、泣かせるわよ。ひと思いに殺してくれなんて、トマトジュースの血まで吐いちゃって」
鍋をヘルメット代わりに被っているケルナグールが口をとんがらかして言った。
「わしとて楽じゃなかったぞい。カットナルの作った一時的に息を止める薬……、元に戻らなかったらどうしようかと、最後まで不安だったぞ」
「わしの薬品は、そこらの理由の分からん健康薬品とは違う、五千人もの人体実験を繰り返し、試行錯誤の末作り上げた安全度百パーセントの名品じゃ……。カットナル薬品は、薬のホームラン王じゃよ」
確かに、レミーとカットナルがハイエナの牙をかわして姿をくらませたのも、犬科の動物が嫌うスカンクの放屁風の臭気剤のお蔭だった。
「鼻が曲がっちゃったわ。本当に、臭いはもう取れているんでしょうね」

レミーが、服の袖の臭いを嗅ぎながら言った。
「わしの脱臭剤を信じなさい。今は、甘いバラの香りがしているはずじゃ」
一同は、何気なくレミーの香りを嗅ごうとしたが、河の硫黄の臭いが強すぎてさっぱり嗅ぎ分けられなかった。
「ま、ともかく、皆さん無事に死ねておめでとうさん」
キリーの言うように、六人の死は、異星人部隊から脱走するための芝居だった。
河岸でブンドルと真吾を狙った銃弾は、反乱軍の物ではなく、キリーが撃ったのだった。
「それにしても」
真吾がキリーに言った。
「お前、少し俺達の近くを狙い過ぎだぞ、本当に当たったらどうする気だ」
「演技はリアルにやらにゃあね。仮に弾の一つや二つ当たっても、迫力があって、よろしいんじゃありませんかね」
「こいつ……」
「迫力があるといえば、俺を撃ったレミーちゃんも恐かったぜ。ほんと、殺されるかと思ったぜ」
「撃ったのが真吾じゃなくて、私だってとこがミソよね。撃ちっぱなしだった真吾の銃には実弾、それまで一度も撃たなかった私の銃には空砲……ね」
レミーは腰の銃を取り、六連発の薬莢を出した。
「あら？」
レミーの顔がスーッと青ざめた。

「どうした？」
一同は怪訝そうにレミーを見た。
「やだぁ、実弾が混じってた」
「……あはっ……、そういうこと……」
そこまで言って、キリーは卒倒した。
「嘘よ」
レミーはペロッと舌を出した。

第6章

炎と豪雨の追跡

燃えてぬれて流されて

「密林の北が反乱軍の要塞のある火山地帯、そして南が異星人部隊の町だ」
ブンドルは地図を広げて一同に見せた。
「我々に必要な水、食料を手に入れ、そして連中の戦いに巻き込まれるのを避けるためにも、この硫黄の河からできるだけ東へ離れて進んだほうがよい」
六人は、異星人部隊の町から出撃する前に、この星で生きることを決めていた。
この星には緑があり、海があり、レミーがジルの母艦で調べた限り、植物も動物も、食用として支障のある毒性のものは少なかった。
小型機が壊れた今、手に入れられる当てもない瞬間移動装置を夢みて、反乱軍と意味のない戦いをするより、この星で、人知れず、自給自足で生きていくほうがましだった。
遠い地球に未練がないといえば嘘になるが、もとはといえば、帰れるあてもなく旅立った宇宙の旅だ。
——地球がなんだ。俺達はどんな世界でだって生き抜いてやる——
そして、生き抜くには、反乱軍と異星人部隊の戦いがあることを除けば、この星はパラダイス(天国)に近い環境だった。
……そりゃ、ハイエナもいれば、蚊の大群もいれば、毒虫だって、おまけにゲズルのような猛獣もいる。
でも、それは、どこの未開地でも同じことだ。ここには、その分、交通事故もなければ、人間という名の、最も恐ろしい猛獣も多くはいないのだ。
初めは地球に帰りたがっていたケルナグールも、それをレミーに言われると、なるほどと納得せ

ざるを得なかった。

ともかく、ジルの人間から見れば、我々はもう死んだことになっているはずだ。

――誰からも何もされず、誰に対しても何もせず生きていこう。この星を第二の故郷として――

六人は今、この星に骨を埋める気になっていた。

「さ、行くか。この密林の中で俺達が一番暮らしやすい土地を捜そう」

一同は頷くと、それぞれの荷物を肩に背負って歩き始めた。

＊

三日が経った。

反乱軍と異星人部隊の新手との戦いは、その後も続いているらしく、密林に銃声と爆音の聞こえぬ日はなかった。

密林を進む六人は、絶えず周囲への警戒を怠らなかった。

必ず、真吾とキリーが斥候に立ち、危険がないという確信が持ててから少しずつ前進した。

その距離は遅々として捗らなかったが、あえて目的地があるわけでもない安住の場を捜すためだけの旅だ。

時間はあり余るほどあった。

ただ問題があるとすれば食料だった。

ブンドルの調理セットは、いまだに本来の目的で使用されてはいなかった。

密林の中に獣や鳥の影が掠めるときもあったが、音で反乱軍や異星人部隊に感づかれる恐れのあ

る銃を発砲する訳にはいかなかった。
仮に、レミーのボーガンの弓が獲物を捕えたとしても、同じ意味で調理するための火を焚(た)く訳にもいかなかった。
六人が今、使える炎は、蚊取り線香用のわずかな火でしかなかった。
野生の動物の肉を生で食べるのは大変に危険だった。その体内にどんな細菌や虫を持っているか分からないからだ。
安心して口に入れられるのは、木々に実る果実だけだった。
「当分、わしゃ、菜食主義か」
ケルナグールは切なそうに呟(つぶや)いて、頭に被(かぶ)った鍋を叩(たた)いた。
ブンドルの調理セットは当分、本来の目的で使えそうになかった。
もともと菜食主義者(ベジタリアン)のカットナルを除いた一同の気持ちは、ケルナグールと同じだった。
だが、果実に親しんだ舌は、携帯用の化学食品の味を二度と受け付けようとはしなかった。

*

四日目——。
「なんだ？　あの火の玉は」
密林の木の上で、無花果(いちじく)のようなジューシーな汁を啜(すす)りながら偵察をしていた真吾が、眉をひそませて、傍のキリーに言った。
前方の森から数個の火の玉が、空へヒラヒラと駆け登り、やがて落下していく。

火の玉が落下したあたりの茂みが燃え広がっていく。
双眼鏡を覗いたキリーは、呻くように答えた。
「あれは、火の玉じゃない。火を付けられた鳥だ！」
「なにっ？」
真吾は、キリーから双眼鏡を受け取り、覗いた。
一本の巨木が炎上していて、その中から、火達磨になったカラスが、次々に死にものぐるいで空に飛び出しては、力尽きて落ちていく。
おそらく、反乱軍か異星人部隊が、人間に襲いかかる恐れのあるカラスの巣を見つけて火を放ったのだろう。
「馬鹿なことをする奴らだ。これじゃ、飛び火して、山火事になっちまうぞ。ハイエナのときといい、今といい、全く奴らは火の使い方を知らん」
真吾がいうまでもなく、たとえ火を付けられたにしろ、一・五メートルの羽根を持つカラスだ。
その断末魔の飛翔力はかなりのものがある。
まさに空を飛ぶ火だ。
密林の火災はどんどん広がっていった。
「風向きがやばいぜ。このままじゃ、俺達まで炎に巻かれちまわ。といって火に追われるままじゃ、硫黄の河に逆戻りだ」
「分かっている。火の中を突破して風上にでるしかないな」
キリーは、親指を立てて了解した。

二人の知らせを受けて、一同は密林の中を走り続けた。
火勢はいよいよ強くなり、炎は空を真っ赤に染めあげている。
火の粉が振りかかり、目を開けていられないほどだ。
この炎の中のどこかに、カラスの巣に火を放った連中もいるはずだが、今はそれどころではなかった。
足元を、体の脇を、火に追われる動物達が駆け抜けて行く。
「ウアー!」
転がるように走っていたカットナルが、腐った木の枝に足をとられて倒れた。
慌てて起き上がって再び走り出そうとしたカットナルは、目の前の水溜りを見て、立ち止まった。
そこに、薬け爛れて息の絶えたカラスと、片方の羽根が焦げた小振りの若いカラスがいた。
若いカラスは、片方の羽根を引き摺りながらも、無傷のほうの羽根で死んだカラスを叩いていた。
まるでその姿は、早く起きろと促しているようだった。
カットナルには、この二羽のカラスが親子であることがすぐ分かった。
「もう、そのカラスは生きてはいないよ。さ、お前も早くお逃げ」
カットナルは、カラスに近づきながら話しかけた。
「さ、おいで」
カットナルは、カラスに顔を背け、手の平を内側に向けて左腕を出した。
脅えたカラスは、カットナルの腕に嘴を突き通した。
カットナルの腕に激痛が走った。

だが、カットナルは腕をビクとも動かさなかった。
目を突っつかれないように顔を背けたのも、静脈や動脈などを突っつかれて致命傷にならないように手の平を内側にして腕を突き出したのも、カラスの行動を見通してのことだった。
たとえカラスの嘴に細菌がついていても、カットナルの自慢の薬品なら消毒できる自信もあった。
腕から嘴が抜けず、慌ててバタつくカラスの背を右手で優しく撫ぜながら、いきなりカラスの目を手の平で覆って閉じさせた。
カラスは動かなくなった。
「よーし、よし」
カットナルは、カラスの目を覆ったまま、嘴を腕から抜き、小脇に抱えた。
「カットナル、大丈夫か!?」
先を走っていた真吾が、心配して戻って来たのだ。
「すまんが、わしの薬袋を持ってくれんか？　きょう、わしは愛鳥週間なんじゃ」
と、カラスを見せた。
真吾は呆れ果てて、かぶりを振りながら、それでもカットナルの薬袋を拾った。
頭上に燃えあがる大木が、今にも倒れて来そうだ。
「いくぞ！」
真吾とカットナルは走り始めた。
カットナルはカラスを撫でながら呟いた。
「お前を焼き鳥には、絶対せんからな」

*

炎の密林をくぐり抜け、やっとの思いで木々の茂みから飛び出した六人は、呆然と立ち竦んだ。
目の前に川が広がっていた。
その川は硫黄の河と違って清流だったが、滝のように泡だって流れる激流だった。
誰の目にも、人間が泳いで渡れる川とは思えない。
背後には、炎の壁のような火災がぐんぐん迫ってくる。
熱気で、レミーとブンドルの髪はパーマをされたように縮み始めた。
火ぶくれか、溺れて水ぶくれ、どっちもありがたくなかった。
そのとき、高さ五十メートルは超えると思われるような大木が、根元から焼けて川の中へ倒れた。
水と炎のすさまじいせめぎあいの水蒸気が立ち登り、それがおさまると、大木の枝の先が川の中ほどにある岩にひっかかって、こちら岸とを結ぶ橋のようになっていた。
キリーがパチンと指を鳴らした。
「こういうご都合主義、オイラ大好き」
六人は、足場を確かめながら進むブンドルを先頭に、大木の上を渡り始めた。
だが、ご都合主義もそこまでだった。
六人と荷物の重みで、大木のバランスが崩れ、せっかくひっかかっていた岩場から枝が外れたのだ。
大木は、六人と荷物と一羽のカラスを乗せ、激流を駆け降りていった。

六人も、羽根を焼かれて飛べないカラスも、一蓮托生、みんなで流れりゃ恐くない。
ともかく、大木にしがみつくのがやっとだ。
ジェットコースターやスペース・マウンテン、この手の乗り物の大好きなレミーだったが、今回だけは遠慮したかった。
なぜなら、なぜかレミーだけ、成り行きで、大木の進行方向と逆向きにしがみついていたのだ。
「ヤダ、私、バックは弱いんじゃ――っ」
めったやたらと悲鳴をあげたが、激流の音で誰の耳にも入らない。
だが、そのお蔭で、レミーはすさまじい光景を目撃できた。
次第に遠ざかっていく燃える密林の上空に、青白い光がオーロラのように浮かび上がったのだ。
次の瞬間、稲光を伴った黒雲が、高速度撮影のように広がり、炎の密林に雨が降りだした。
それは、雨が降るというより、レミーに言わせればバケツの水をぶちまけたような……、いや、水族館の水槽のガラスが破けたような、いや、さらに高層ビルの最上階の巨大な水タンクが爆発したような、いや、さらにさらにアメリカのフーバーダムが決壊すればさもありなんというような、いやいやいや早い話が、空が海だとしたら、その底に割れ目ができて海の水がドーンと流れ落ちて来るような、飲み過ぎて口からゲップが出るではすまされない量だった。
一瞬のうちに密林の炎は消え、その雨水は、そのまま川を流れて、レミー達の乗る大木の後を追い駆けて来る。
またまたレミーに言わせれば、
――勘弁してよ。津波と呼ぶには、津波が恥ずかしがって、洗面所に駆け込んで、鍵閉めて、泣

き出しちゃって、三日くらい外に出て来ないくらい——

ともかく凄い高さの波だった。

ブンドルは、後ろの様子を見る余裕はなかった。

彼は、大木の一番先端にしがみついていたのだ。

だが、勘弁してもらいたい気持ちはレミーと一緒だった。

なぜなら、今、前方には空しかなかったのだ。滝だ！

それもかなり高い滝！

翼もパラシュートもない六人が助かるはずがない。

こういう時のエンドマークは、ENDか、FINか、FINEか、それとも終か完か、少なくともSEE　YOU　AGAINではないな……。

——私ともあろう者が、この期に及んでなんとつまらぬことを考えていることか……。美しくない——

ブンドルが自分を戒めた瞬間、大木は宙に投げ出された。

だが、それを感じたのは、大木の前にしがみついているブンドルとキリーとカットナルとカラスだけだった。

四番目と五番目に乗っている真吾とケルナグールは、大木が波にもちあげられたような気がした。

大木に一瞬、遅れて滝を流れ落ちた大津波を凌ぐ雨水の波は、その背に大木を乗せたのだ。

後ろ向きのレミーには、そこに滝があったのかどうかすら気付いていなかった。

……それはまるで、六人乗りのビッグ・ウェイブ（巨大波）のサーフィンだった。

どれほど時間が経っただろう。
流れはしだいに緩やかになり、密林を洗った雨水も、泥水のようになった川も、次第に澄んできた。
まるで、ノンストップのロデオとサーフィンとコークスクリューさながらの激流との戦いを終えた六人は、ぼんやりと大木の行く末を流れに任せていた。
やがて、大木は蛇行した川の浅瀬に乗り上げて動かなくなった。
「終点みたいだな」
真吾の言葉に誰も答える気力がないほど、疲れきっていた。
ただ、カラスだけが、身を震わせて羽根づくろいをしてから、カァッ……と答えた。
そして、ぐったりと大木に頭をさすりつけて、意識もうろうとなっているカットナルの顔を、しっかりしろよ、とでも言うように、羽根でパシャパシャと叩いた。
カラスは、カットナルと共通の危機をくぐり抜けるうちに、急激に慣れ親しんだのかもしれなかった。
キリーが一同に、気だるそうに言った。
「さ、ここにいても仕方ない。上陸しようぜ。いよいよ原始生活、自給自足の始まりだ。ま、俺の荷物だけは助かった。みんな、なんとかやっていけるさ」
キリーは枝にしっかりくくり付けた荷物を水の中から引き上げ、中を見せた。
「万能ナイフに、自転車……。自転車はあんまり役に立たんか」

「お言葉だがな、キリー君……。私も荷物をなくしてはいない」
ブンドルは水の中に浸っている足にくくり付けた荷物を見せた。
「私もだったりして」
レミーは、ウエストに荷物の袋のひもをくくり付けていた。
「俺もさ、キリー」
真吾は、それまで水に漬けていた手を上げた。
「水には浮力があるからな……。重い物は水の中に限る」
「わしの薬も防水加工じゃ」
カットナルも、水の中から枝にくくり付けていた袋を取り出した。
「お宝をなくしてたまるか」
ケルナグールは、ヘルメット代わりの鍋の中から宝石の袋を取り出した。
それぞれ、自分の荷物だけは手放していなかったのだ。
「ハァ、皆さん、しっかりしている訳よね」
キリーは肩を竦めた。

＊

川岸に荷物を引き上げた後、真吾とキリーは、残りの四人を残して、周辺を偵察に出かけた。
そこは今まで体験したこの星の密林とは趣きを異にしていた。
密林というほど木々は密生しておらず、陽の光を適度に浴びた木々が青々と茂り、果実も豊富だ。

木々の間を爽やかな風が駆け抜け、地表のじめつきをすっきりと乾かしている。
空気は澄み、何より火薬のキナ臭い臭いがなかった。
小鳥のさえずりと虫の音のほかは何も聞こえず、戦場の焼け跡も、木々の幹に食い込んだ銃弾の跡も見当たらなかった。
どうやら、異星人部隊も反乱軍も足を踏み入れたことのない土地のようだった。
「ここなら、長居出来そうだぜ」
「だといいが……。もう少し調べてみよう」
二人はさらに奥へ進んだ。
森は次第に傾斜して、谷になっているのが分かった。
谷を降りて行くと、せせらぎの音が聞こえた。
やがて二人の前に、泉の湧き出る池が現れた。
池の底が手に取るように見える澄みきった水だ。
真吾とキリーは、泉の水を貪るように飲んだ。
旨かった。
地球でも、これほど旨い水は滅多に見つからないだろう。
「水割りにしてえな……」
キリーの言葉に禁酒中の真吾すら頷きたくなる水だった。
そのとき、池の水が流れ出ている岩場の向こうで人の声がした。
二人は銃を抜き身構えると、岩場へ近づいていった。

どこの言葉かは分からないが、確かにそれは女の歌声のようだった。
顔を見合わせた真吾とキリーが、そっと覗くと、池から流れ出るせせらぎの中で若い娘が一人で水遊びをしていた。
一糸まとわぬその体は、健康そうに陽に焼けていた。
「83・56・88、年齢十八ってとこ……」
キリーが呟いた。
「ん?……」と真吾が聞いた。
キリーは真吾に答えず呟いた。
「水着の跡もない。してみると、ここはヌーディストクラブか」
「お前なあ……」
「シーッ! せっかくですからね、天然の美を鑑賞しましょ」
キリーは頬杖をついてニンマリと笑った。
真吾も、覗いている自分が気になりながらも、しっかり目を反らさなかった。
「天然の美かあ、確かにな」
「お前も好きだね」
キリーが、肘で真吾を突ついた。
だが、鼻の下を長くした二人の顔が、次の瞬間、真顔になった。

第7章

やすらぎの村
望郷編

地球を遠く離れて

裸身の娘が水浴しているせせらぎの傍の茂みが、ガサガサと動いた。
気配に気付いた娘は息を飲んだ。
茂みからのっそりと、人間の二倍はある大トカゲがでてきた。
娘は大トカゲにいすくめられ、一歩も動けない様子だ。
大トカゲは、ヌッと二本足で立ち、石のように動かなくなった。
獲物をじっと見て動かぬとき、それは攻撃の寸前を意味していた。
キリーは声を出さず、いきなり大トカゲの背に岩場から飛び移った。
仮に銃を撃ち、それが急所に命中して即死したとしても、トカゲのような血の巡りの悪い原始的な動物は、最初の意志だけは残って、娘の体に牙を突き立ててから死ぬだろう。
それを避けるには、いきなり驚かすに限るのだ。
案の上、背中にキリーを乗せた大トカゲはビクンと飛び上がり、二本の足で走り出した。
キリーが叫んだ。
「真吾！　その娘を頼む」
大トカゲはもの凄い速度で水面を駆け、娘へ向かっていく。
まるで踏み出した右足が水面下に沈む前に左足を前に出し、左足が沈む寸前に右足を出しているという感じだ。
真吾は恐怖で動けない娘に飛びつくと、身を伏せさせた。
大トカゲの足が頭上を通り過ぎていく。
キリーは大トカゲの首筋にしがみつきながら、その頭にベルトに挾んだナイフを突き立てた。

一回、二回、三回、四回目でやっと大トカゲは直立歩行を止め、水面に倒れた。
「やったぜ……」
キリーは、裸の娘を抱いた真吾に親指を立てて合図した。
娘はキリーを、まるで神様に会ったかのように眩しそうに見つめた。
だが、次の瞬間、大トカゲの断末魔の力を振り絞った尾が、キリーの体を岩場に弾き飛ばした。
すかさず真吾が、大トカゲの頭に銃弾を叩き込んだ。
大トカゲは体をひくつかせて、やがて動かなくなった。
裸の娘は、真吾の手を振り払うと、岩場に叩きつけられたキリーに駆け寄り、抱き起こした。
キリーの足の骨は折れ、額から血が滲んでいた。
娘はいきなり額の傷に口づけし、泥で汚れた頬を手の平で拭ってくれた。
足の痛みを堪えながらも、目を白黒させたキリーは呟いた。
「ここはほとんど天国か……」
裸の娘は立ち上がると、木の枝に掛けてあった、麻のような繊維で荒く編まれた一枚の布を手早く体に巻き付け、つたのベルトを締めて、再びキリーの傍に駆け寄った。
手振りで、肩に寄りかかれと仕草した。
キリーは娘の肩を借りてヨロヨロと立ち上がった。
手助けしようとする真吾を断り、
「こういうの、一人で十分結構……。真吾ちゃん、悪いね……」
キリーはニンマリ笑って、娘の肩を強く抱いた。

「勝手にするさ」
娘は、最初に助けようとしたのがキリーであることを、よく知っているようだった。
「チェッ、一足遅れたな……」
真吾は一言呟いてから、かぶりを振って苦笑した。
「いや、これでいいんだよ。俺は今まで、出会った女をふしあわせにし過ぎた。もう、あの繰り返しはやめよう」
そう考えて自分を慰めることにした。
娘は森の奥を指さして、何ごとか言った。
「真吾、このナオンちゃん、どこかへ案内してくれるらしいぜ」
「行ってみよう。敵じゃなさそうだし、俺達、これからここに住むなら、隣付き合いはよくしておかんとな」
——もっともキリーの奴は、この娘と隣付き合いだけで終わらせるつもりはなさそうだな——
言葉も通じないのに、和気藹々と喋り合って歩いていく二人の後ろ姿を見て真吾はそう感じた。
その頃、流れついた川岸で真吾とキリーを待っていた四人は、森から聞こえて来る単調なリズムの音に身構えていた。
それは、アフリカやニューギニア、アマゾンの奥地で未開人達が使う、木の実や木の幹をくり抜いて叩く打楽器の音に似ていた。
——これは音楽だ……、ということは……、このリズムを叩く人間達は、音楽のないジル星の人

間とも異星人達とも違う……

――反乱軍は、ジル星人の慣れの果て、大同小異だ。音楽なんてあるはずがない……。すると……――

レミーは、ジルの母艦で聞いたジーの言葉を思い出した。

――この星には人間猿という原始人が住みついている。そうか……、そうか……、これがその人間猿なんだ――

川岸を取り巻く森の茂みの至るところに、こちらをじっと窺う人の気配が感じられた。

だが、姿を現す気配も見えない。

「いい、絶対撃っちゃ駄目。恐らく相手は私達の何倍もいるわ。彼らを刺激したら、私達は終わりよ」

レミーが一同に囁いた。

「といって、ここにこのまま釘付けにされている訳にもいくまい……」

人の気配に興奮しているカラスの頭を撫でながら、カットナルが言った。

「ええ、試しに交信してみるわ」

「やってみたまえ。私もそれを考えていた」

ブンドルがレミーの荷物の中から、キイボードを持って来ていた。

「サンクス」

レミーは、キイボードを受け取ると、聞こえてくる打楽器と同じリズムを弾き始めた。

茂みの向こうでざわめきが聞こえた。

やがて、一人、また一人……。
木を削った槍や棍棒を持って、毛皮をまとった男達が茂みから出てきた。
その数は、百人を超えている。
思わず、ケルナグールが銃を構えた。
男達が後ずさる。
「捨てて、銃を！　彼らを怯えさせちゃ駄目！」
レミーは叫んで、腰の銃を放り捨てた。
しぶしぶ、一同もそれに従った。
で、その結果、結局四人はつたの縄で縛られ、数珠つなぎで森林の中を引き立てられていく羽目になった。
「これが交信の結果か……」
肩の上のカラスまで、ぐるぐる巻きに縛られたカットナルが、情けなさそうにレミーに聞いた。
「殺されることはないと思うわ」
「どうして？」
「人間は、自分の土地や家の中でよそ者の血が流れるのを嫌がるわ。とくに文明に侵されていない未開の人達はね。彼らは生き物の魂を尊んで、畏怖しがちなの」
「しがちという表現は絶対という意味ではないな」
ブンドルの呟きにレミーが肩を竦めて答えた。
「まあね……。どうしても殺しちゃうときもあるみたい。それでも相手の魂に対してエチケットは

忘れないわ」
「エチケット？」
「食べちゃうのよ。感謝しながらおいしく食べて、相手の魂を慰めるの」
「ウッ！　わしの肉は筋が固くてまずいぞーい」
図体が大きくて危険に見えたのか、膝から上、顔までをミイラのようにぐるぐる巻きに縛られたケルナグールが、悲鳴に近い声で叫んだ。
毛皮を身に付けた一団に引き立てられた四人が森林を抜けると、広い草むらが広がっていた。ところどころに、肩の高さほどの木が密集している。
「これは、逸品が期待出来るな」
「えっ？」
ブンドルは目を細め、嬉しそうに呟いた。
「ブドウの木だよ」
なるほど、よく見ると、房になった黒っぽいブドウの実がたわわになっている。
「しかし、見るからに酸っぱそうだな」
カットナルが顔をしかめて言った。
「食べるには向かぬ。だが、一度ワインになれば……見るところフランスのボルドーのシャトーマルゴーにも似た出来映えが予想できる。……四、五年後が楽しみだな、一九七五年物風が出来るかもしれぬ」
「明日まで生きていられるかどうかも分からないのに……、さすがというか、ま、いつものことだ

けど……」

レミーはこの期に及んでですら酒と食事への美学追求を怠らぬブンドルに舌を巻いた。そして、その舌で、確かに美味しいワインを味わいたい気もした。

やがて一行は、シロバナムショケギクの咲き乱れる丘の上に来た。

緑の中の小さな白い菊の花が点描画のように美しい。

そして、シロバナムショケギクの花畑に囲まれるようにして、藁葺きの粗末な小屋が点在する村があった。

かすかに蚊取り線香の燃えるような香りが漂ってくる。

「この人達も蚊に弱いようね、私達のように……」

レミーは微笑んだ。

だが、それ以上に微笑ませてくれたのは、一同を出迎えて、子供達が小屋の中から飛び出してきたことだった。

——ここには子供がいるんだわ。この星に来て、今までみたことがなかった子供が……。音楽、子供……そして虫除けの蚊取り線香……。もしかしたら、この星で一番、地球人に近いのは、この人達かもしれない——

レミーはなんとなく嬉しかった。

だが、村の中央の広場に引き出された四人は、薪に囲まれて立っている四本の杭を見て顔色を変えた。

白い髭を生やした長老風の老人が出て来て、何やら呪文らしきものを唱え始めた。

太鼓に似た打楽器の音が高鳴った。
四人は否応もなく、杭に縛り付けられた。
長老が松明を持って近づいてくる。
松明の火が薪に点火された。
レミーは煙にむせながら、迫り来る死に対して、感懐も湧かなかった。
危険、危険の連続で感覚がマヒしたのかもしれない。
「私のロースト・レミー、何人分になるのかしら……。それにしても古典的な殺され方ね……」
そのときだった。
一人の娘が広場に飛び出してきて、長老に何ごとか訴えた。
盛んに火炙りにされているレミー達を指さしている。
娘の隣にキリーと真吾の姿が見えた。
長老が手をあげた。
広場の四方から村人達が飛び出して、手に持った半透明の大きなビニール袋のようなものを次から次へと四人にぶつけた。
――な、なに？　これは！――
ぬるりとした肌触りの袋は、すぐに弾けた。
袋には、水がたっぷりと入っていた。
だが、水にしてはやけに生臭い。

十数個の袋の水を頭から被り、びしょ濡れになった四人は、足元の火が消えたとき、はじめて火炙りが中止されたことを知った。
縛られていたつたを解かれたブンドルは、鼻を摘みながら、破れた袋を撮み上げた。
それは、地球でいうソーセージの皮……、草食動物の小腸や大腸の皮で作られた袋だった。
村人達はその袋に水を入れ、消火器代わりに使っているらしかった。
——うむ、使えるな。香料を利かせば美味な腸詰めが作れる。ワインにサラミのつまみも悪くない——
ブンドルは、完成したサラミ・ソーセージを思い浮かべる自分に少しだけ失望した。
——最近私が考えるのは、食の美学だけではないか……、衣食足りぬと他の美学は忘れるのか……私も修行が足りぬな——
ブンドルは自分自身に苦笑を禁じえなかった。
キリーと真吾が村の娘を大トカゲから救ったことを知った村人達は、先刻とは打って変わった歓迎の意を表した。
若い女達が一人ずつ真吾達の前に立ち、シロバナムショヨケギクの花輪を首にかけてくれた。
そして、手の平に額に頬に唇に熱烈な口づけをした。
足を折って横たわるキリーの相手は、もちろん先刻の娘だ。
男には女、女には男が歓迎するのがしきたりらしく、レミーはあんまり有難くはなかったが、わざわざ長老がむんずと抱き締め、髭だらけの顔でべたべたと口づけしてくれた。
「友好よね、友好……」

レミーは我慢したが、憮然たる表情はブンドルだった。
長い髪のブンドルを女と間違えたらしく、筋肉隆々たる男がガッシリ体を抱きしめ、口づけを連発したのだ。
ブンドルは生まれて今日まで、これほど自分の美形を呪ったことはなかった。
ここで断ってトラブルの元を作ってはいけないことは重々承知している。
「友好とはいえ……、なんとおぞましい……」

その夜、村の広場では、地球の六人を迎えて宴が開かれた。
カットナルの薬で足の痛みの和らいだキリーも、助けた娘に体を支えられながら出席した。
六人の前に、魚やリスなどの小動物や虫をそのままの姿で煮たり焼いたりした料理が並べられた。
食欲をそそられる料理とは言えなかったが、ブドウから作られたワイン擬の酒だけは旨かった。
――これだけの酒を作れる連中だ。この私が料理を教えれば、パリの一流フランス料理店のコックに就職できるくらいの腕前にはなるだろう――
ブンドルがそう思えるだけの味とコクのある酒だった。
それに、村の人達もどうやらブンドルを男だと認めてくれたらしく、筋骨隆々の男の代わりに、今は若い女が酒の酌をしてくれている。
――まあ、今のところは、これでよしとせねばな――
とブンドルは思った。
語学堪能のレミーと真吾は、村人達の会話に注意を払った。

そして、すぐにマスター出来る単純な語法で語られていることを知り、
――これなら、四、五日で話せるようになる――
と、互いに頷きあった。
事実、恋愛は語学の先生という言葉があるように、キリーと村の娘は片言の言葉で気持ちを通じ合わせているようだった。
しかし、キリーと娘の場合はともかく、言葉が通じただけでは異人種が本当に気持ちを通わせたことにはならない。
これから先、村の人達と不信感なしで付き合うことが出来るだろうか？……何か方法があるはずだ。
レミーは、宴の初めから流れ続けている単調なリズムの打楽器の音に耳を傾けた。
――そうだ、音楽がある。音楽でなら気持ちを通じ合わせることが出来るかもしれない――
レミーはキイボードを持つと、最初は村人達の単調なリズムを弾いて注意を向けさせ、……それから旋律の柔らかいシャンソンの「枯葉」を弾いてみた。
六人は次々に得意な曲を弾いてみたり歌ってみた。
だが、村人達は怪訝そうな表情を見せただけで、興味を示した様子はなかった。
カットナルは、カントリーウエスタン。
ケルナグールは、小学校唱歌。
キリーは、ブルースで、娘を見つめながら「マイファニーバレンタイン」。
三人とも、少し音程が狂うのがご愛嬌だった。

まるで、どこかの国のカラオケバーだ。
口直しに、ブンドルが伝説的ピアニスト、ルービンシュタインも真っ青のテクニックでショパンの作曲「幻想即興曲」を弾いた。
しかし、どの曲にも、村人達は首を捻(ひね)るばかりだった。
とうとう真吾の番がやってきた。
真吾は途方にくれた。
音楽を聞いたり、踊ったりするのは好きだったが、人の鑑賞に耐えられるほど自分に音楽の実力があるとは思えなかった。
音楽はあくまで趣味であり、歌詞を覚えてまで熱中することはない。
もっと実質的なものを覚える努力をするべきだ。
ドイツの国連軍の養育所で育った真吾は、そんな考え方を教え込まれていた。
だから、まともに歌詞を覚えているのは校歌と各国の国歌くらいで、ましてキイボードなど弾いたこともなかった。
それでも、あえて歌えるといえば、両親の母国、日本の浪花節(なにわぶし)だったが、ガイジンさんにも当の日本人にも、歌って受けた試しのない代物だった。
――えーい、こうなったら、居直って格調高く日本の民族舞踊音楽といくか――
やけっぱちで、真吾は父親から教わった日本の民族舞踊音楽を手拍手を取りながら歌い出した。
歌いながら真吾は呆然(ぼうぜん)となった。
どうしたことか、村人達もリズムに合わせ、体もゆすって手を叩き、足を踏み鳴らし始めたのだ。

地球の一同も、目を見張った。

「やったね！　今、この人達は私達と音楽で心を通わせてる！」

胸が熱くなった。レミーは真吾に聞いた。

「私にも教えて、それ。なんていう曲？」

「フォークダンス・オブ・トウキョウ。さすが、地方出身者の寄せ集めの街、東京の民族音楽だ。人の心をつなぎ止める魅力があるのかもしれないな」

真吾が真面目な顔で能書きを言った。

——この単調な曲のどこがよいのか理解しかねるが、ま、これも友好のためか——

ブンドルは、直ちに真吾の歌ったメロディとリズムでキイボードを弾いた。

広場は、手拍子、足拍子で大変な盛り上がりを見せた。

ジル星の夜空に、日本の民族音楽「東京音頭」が流れ続けた。

その日から、ジル星の人猿と呼ばれた原住民と六人の地球人はよき仲間になった。

*

それから数週間が経った。

戦いに明け暮れてきた真吾達、ファイターにとって語るべきことは何もなかった。

地球の六人の間で起こった出来事をあえていうなら、キリーの足が治ったのと同じ頃、翼のヤケドが治ったカットナルのカラスが空に放たれ、しばらくしてメスのカラスを連れて戻ってきたことと……カラスと同じように、キリーも村の娘と暮らし始めたことくらいだった。

六人は村人との単純な会話を七日間ほどでマスターした。

六人はそれぞれ、村のはずれに小屋を与えられ、手厚いもてなしを受けていた。だから、言葉を覚えることくらいしか、やることがなかったのだ。

もっともブンドルは、料理セットを駆使し、森や川でとれる獲物をどう料理するかに没頭していた。

だが、完璧主義のブンドルは、人に供する自信のある料理を作り出すまで、誰にも自分の料理を食べさせなかった。

カットナルは毎日、朝早くから近くの丘にカラスを連れて行き、夜遅くまで調教に熱中していた。

真吾は、小屋の裏手で畑を耕し始めた。

ケルナグールは、食っては寝、飲んでは寝の毎日だった。

レミーは——本当にやることがなかった。

年頃のレミーだ。

色恋沙汰の一つも起こってもよさそうなものだし、その対象になりそうな真吾やブンドルもいるのだが、これほど事件のない毎日が続くと、そのきっかけもなく、また何を今さらと、照れくさくもかったるくもなるのだった。

「このままじゃ、頭が〝海胆〟になっちゃうわ」

レミーは時折そう思うが、海胆になっても構わぬほど、村の平穏さがここちよかった。

*

一カ月が経った。
ブンドルが地球の五人と長老や数人の村の人々を小屋に招いて宴を開いた。
一同は、目の前に並べられる料理の数々に目を見張った。
一流フランス料理店もそこのけの見栄えだった。
「ご覧のように、地球を旅立ってから初めての欧風料理だ。今さら、料理の種類や能書きを言う気はない。問題は味だ。何も言わずに食べて、感想を聞かしてくれ」
一同は食べ始めた。
信じられない旨さだった。
目を閉じれば、セーヌ川の流れが、シャンゼリゼの人通りが浮かんできそうだった。
長老や村の人達も目を丸くし、手摑みで、先を争うように貪り食べた。
「みんなも気にいったようね」
「地球人の舌にも、この人達の舌にも合うようにした。繊細さの中に野性も……だ」
真吾がドイツのニュールンベルク風の荒びきソーセージを頬張りながら聞いた。
「一体、材料は何なんだい？」
一同は料理を口に運ぶ手を止めた。
——そういえば……、この星には牛もブタもニワトリも見かけなかった……。とすると——
なんとなく寒気が走った。
しかし、ブンドルは微笑して言った。
「聞かぬほうがいい。ここは地球ではないのだからな」

——それもそうだ。地球でさえ、トリとカエルとヘビとトカゲは似たような味で、地方によっては、それぞれ、大変なご馳走ということになっている。

食は広州にありと言われる、美食家と食いしん坊の地方、中国の広州には、

「この土地で食べないのは、空を飛ぶものでは飛行機、水の中のものでは潜水艦だけだ」

という言葉もある。

そう、旨ければそれでよいのだ——

気を取り直した一同は、再び夢中になって料理を食べ出した。

(それでも、彼らがブンドルの調理場で材料を見たら卒倒したかもしれない。しかし、ブンドルの心遣いを重んじて、材料の発表はさしひかえることにする)

やがて、長老がおずおずとブンドルに言った。

「村のみんなに作り方を教えて下され」

「望むところだ。食は文化だ。文化を広めるのは悪いことではない」

村人達は躍り上がって喜んだ。

「我々も、知り得る限りの知識を彼らに教えたらどうかな」

カットナルが提案した。

「賛成だ。ここで一生、生きていくのかもしれないんだ。彼らの役に立つんなら隠すことなど何もないさ」

真吾の言葉に一同は同意した。

カットナルは薬と医学の知識を、真吾は農耕の知識を教えることにした。

「畑、わしら、昔、作っておった」
長老がぼそりと呟いて話し始めた。
「わしら、森焼いて、種蒔いて、秋になって大きくなった草から実を貰って生きてた。
これ、森の神様の恵み……。
でも、ある日、空から火を吐く棒を持って悪魔達、大勢来た。
若い女、連れて行き、男、殺された。
それから、また新しい悪魔来て、村作って、悪魔同士、殺し合い始めた」
言うまでもなく、反乱軍と異星人部隊のことだった。
「わしら、両方の悪魔から殺された。
わしら、村、たくさん、たくさん、皆殺しされた。
わしら、森の中、逃げ続けた。
畑、作れず、木の実と狩りだけ、食べてきた。五十回季節変わっても、わしら、逃げるのは変わらない。わしら、最初、あなた達も悪魔と思った。恐かった。
煙にのせて、空に返そうとして、あなた達を焼こうとした」
「なぜ、戦わねえんだよ、奴らと……」
キリーが言った。
「森の神様のお告げ……狩り以外の戦いしちゃいけない。食べるためのほか、動物殺しちゃいけない……。これ、昔から、わしら、守ってる」
「それじゃ、これから先、何十年も何百年も逃げ続けるというのか？

「冗談じゃない。戦うんだよ。俺達の生活を守るんだよ」
キリーは一同を見回した。
「いいか、宇宙のジル星人がこの母星に降りて来るまで、後五千年ある……。その間、この星を支配するのは、反乱軍か、ジル星人の手先の異星人部隊か、それともこの星に一万五千年間住みついて来た未開人の彼らか……。俺達、地球の六人の持つ文明知識を植え付けてさ、これから五千年間育てれば、この未開の人達も、宇宙のジル星人に対抗出来る文明を持てるかもしれない。そのためにも、今、反乱軍や異星人部隊に負けちゃいられねえんだ」
キリーは、いつになく熱っぽく他の五人に語った。
「キリー、なんて言うか、壮大な計画だけれどな。それを決めるのはお前じゃない。この人達なんだよ」
真吾がキリーを宥めるように言った。
――この星に住みつくといっても、所詮、俺達はよそ者だ――
「真吾、俺はよそ者じゃない」
「えっ？」
一同はキリーを見つめた。
「俺は、この娘を嫁にする」
キリーは、大トカゲから助けた娘の肩を抱いて、真剣な顔で言った。
月のない夜、空は星の光の砂浜だ。

宴が終わり、村の広場を見降ろす丘の上でキリーと真吾とレミーは星空を見上げていた。
真吾がキリーに言った。
「会って一カ月……、言葉もろくに通じなかった女と結婚する……。ブロンクスの狼、キリーにしちゃ、軽すぎないか？」
「かもしれねえ……。でもな、言葉が分からないから、あの娘とはうまくいったのかもしれねえよ。地球の連中は、なまじ言葉が分かるから、相手のしがらみが見えちまう。惚れたはれたが辛くなる。だが、あの娘とは違う。お互い、言葉も知らなきゃ、素性もしれないところから始まった。あの娘と俺とは、なんにもねえゼロからはじまったんだ。そして一緒になりたいと思った。こいつは本物だと思うんだ。俺ァ、ブロンクスの税務所の窓口にゃ税金払ったことはねえが、この星のあの娘にゃ、年貢の納め時ってことさ」
真吾は、キリーの気持ちが分かるような気がした。
「せっかく納めるんだ、年貢の払いはうまくやれよ」
「これで三人共結婚経験有りって訳ね。私と真吾のはメチャメチャだったけど、三度目の正直、今度こそはね、きっとね」
せっかくの星空だった――。
――星に願いを……か。
自分の願いなんて、随分、昔に忘れちゃったから――
レミーは、星に向かって心からキリーの結婚と幸福を願った。
そのときだった。

遠くの密林が青白く光った。
地鳴りと空気の揺れを伴って、密林に青白い光が、イルミネーションのように広がった。森林の木々が、生き物のようにざわめいた。
「これは!!」
広場に村人達が飛び出して来て、地面に這いつくばると、森に向かって祈りだした。
村人達は口々に〝森の神、森の神〟と唱えている。
「森の神か……。私、あれを見たわ、密林の火事の上空に……。あれは、雨を降らして火事を、あっという間に消しちゃった」
「レミー、君はもっと前にあれを見たことがないのかな？」
いつの間にか、ブンドルがカットナルやケルナグールと共に、丘へ来ていた。
——こんな夜は星空を見つめたい——
ブンドル達の思いもレミーと同じだったのだ。
そして六人は、青白い光の広がりを目撃した。
レミーは青白い光を見つめて、呟いた。
「ええ、多分私、前にも見た……。地球で、似たような光を。真吾もキリーも多分ね……」
二人は頷いた。
「わしらもじゃ……」
カットナルとケルナグールも頷いた。
六人の思いは同じだった。

その光は、かつて地球の新しい人類、真田ケン太を宇宙に進出させた地球の生命エネルギー、ビムラーにあまりに似ていた。
ブンドルは、誰に言うでもなく呟いた。
「ビムラーは、完全に成長する途中は、下手に手を出し刺激すれば、太陽系をも破壊する恐怖のエネルギーだった。
だが、完全に成長すれば、新しい人類に宇宙を果てしなく飛べる力と、宇宙の意志ビッグソウルと交信出来る能力を与えてくれる。それは、無害で希望に満ちたエネルギーに変わる。それが、この星にもあるとしたら……」
キリーが吐き捨てるように言った。
「いやだね。あ～やだ。俺達は、どこに行っても、こうなのか？　ビムラーだの、ビッグソウルだの、ゴーショーグンだの、宇宙にはばたく新人類だの。おなじみのおとぎ話から逃げられねえってのかよ」
だが、あの青白い光を目の当たりにすると、あの地球で実際に起こったおとぎ話が、この星でも実現しそうな気がするのだった。
だが、そうだとしたら、地球の場合のケン太のように、この星のソウル（魂）を率いて宇宙に翔んでいくのは誰なのか？
反乱軍なのか、ジル星人なのか？
それとも村の未開人なのか。
この星の未来を継ぐのは誰なのか。

それは、まだ誰にも分からなかった。
地球の六人の見つめる前で、やがて青い光は静かに密林の地の底へ消えていった。
それは、まるで、地球で真田ケン太という新人類を生みだしたビムラーと関わり合いを持った六人に顔見せに来たような感じだった。
――ビッグソウル（宇宙の意志）とビムラーさんよ……冗談じゃない。俺達は、あんたと付き合うのはもうご免だ。俺達は俺達で生きていくんだからな――
真吾は、星空を見上げて呟いた。
六人の誰もが同じ気持ちだった。

翌日の夜、キリーと村の娘の結婚の儀式が広場で開かれた。
夜空には星、地上には、村中の小屋の軒下に吊るされた蚊取り線香の光が、宝石をちりばめたように輝いていた。
「蚊取り線香と呼ぶな。せめて菊の花の灯と呼べ」
そう呟いてからブンドルは、キイボードでメンデルスゾーンの「真夏の夜の夢」から、「結婚行進曲」を弾き出した。
ブンドルの演奏は、村人達の叩く打楽器の音に妙に調和した。
村の子供達に囲まれたキリーと娘は、広場の中央にやって来た。
白い一枚布に頭を通す穴を一つだけ開けた貫頭衣を着て、菊の花の冠を被った花嫁は美しかった。
レミーは、その姿にふと自分を重ねて見て、溜め息をついた。

考えてみれば、外人部隊から、EIC（ヨーロッパ情報部）、そしてグッドサンダーのファイターと、戦いずくめだったレミーは、人の結婚式に出席したこともなかった。
前の星のクーアノアで洗脳されて意に沿わぬ相手とした自分の結婚だって、住民局に登録しただけの簡素なものだった。
結婚はともかく、結婚式はしてみたかったりして……そんなことを考えていると、真吾が横で思わず呟いた声が聞こえた。
「所変われば花変わる。菊って、日本じゃ葬式の花だぜ……。結婚は人生の墓場か……。そうかもな」
別にふざけた訳でもなくしみじみと言う真吾の鳩尾に、レミーのひじ鉄がきまった。
「ひがまないの」
キリーと娘の前に長老が進み出た。
「森の神の名において、二人は結ばれる。
女は男に従い、男のために働き、何ごとにも逆らわず、男の危険には、死をもってしても立ち向かい、男に恥をかけたときは死をもって償うべし……。男は、そうすれば、汝を妻と認めるであろう。
男は子作りに励め……。それで男の務めは果たされる。
神の恵みあらんことを……」
レミーはポカンと口を開けた。
「なんじゃこれは……。男に都合のいいことばっか……」
どうやら、この村は徹底した男性上位が仕来りらしい。

――やっただろ？――
とでもいいたげに、キリーはレミーにニヤリと笑いかけた。
「羨ましい」
四人の男達が、同時に呟いた。
「あたしゃ、この条件じゃ、一生、結婚出来ないわね」
レミーは肩を落とした。
一方、男達は相手さえいれば明日にでも結婚する感じだった。
「結婚か……」
――あのブンドルさえもが呟くのだから――不機嫌になったレミーは、思いきり、隣にいたブンドルの足を踏んづけて、さりげなく謝った。
「ごめんなさいね」
ブンドルは痛がる様子もなく、レミーの気持ちを見透かしたように言った。
「レミー、私は結婚はしない。独身主義だ、安心しなさい」
――ん？――
――安心しなさい？　どういう意味よ。なによ、しょっちゃってさ――
レミーはもう一度、さりげなく隣の足を踏んづけた。
「ギャッ！」
「えっ？　やばッ……」
さりげなくブンドルは後ろに下がり、代わりにカットナルが前に出ていて、レミーが踏んだのは

カットナルの足だった。

――友達になにをするんだ！――

という感じで、カットナルのカラスがコツンとレミーの頭を突っついた。

「すいません」

レミーは舌を出して、カットナルでなく、カラスに謝った。

＊

半年が経った。

村の生活は何ごともなく平穏に続いていた。

キリーは村を守るために、村人達にナイフや、槍、棍棒などの武器の使い方や格闘のこつを教えていた。

真吾は、村のために川の水を引いて、野生の米を植え、水田を作る計画をたてて、工事を始めた。

働かざるもの食うべからず、寝ては食いの怠け者に甘んじていたケルナグールもしぶしぶ手伝い始めた。

毎日のように村中を回って村人の病気や怪我を治すカットナルは、村人達にとって神様扱いだった。

考えてみれば、政治家も医者も人を助けることに変わりはない。

ただ、金が絡むとおかしくなるのだ。

カットナルにとって、この村に心を迷わす金というものがないのが幸いした。

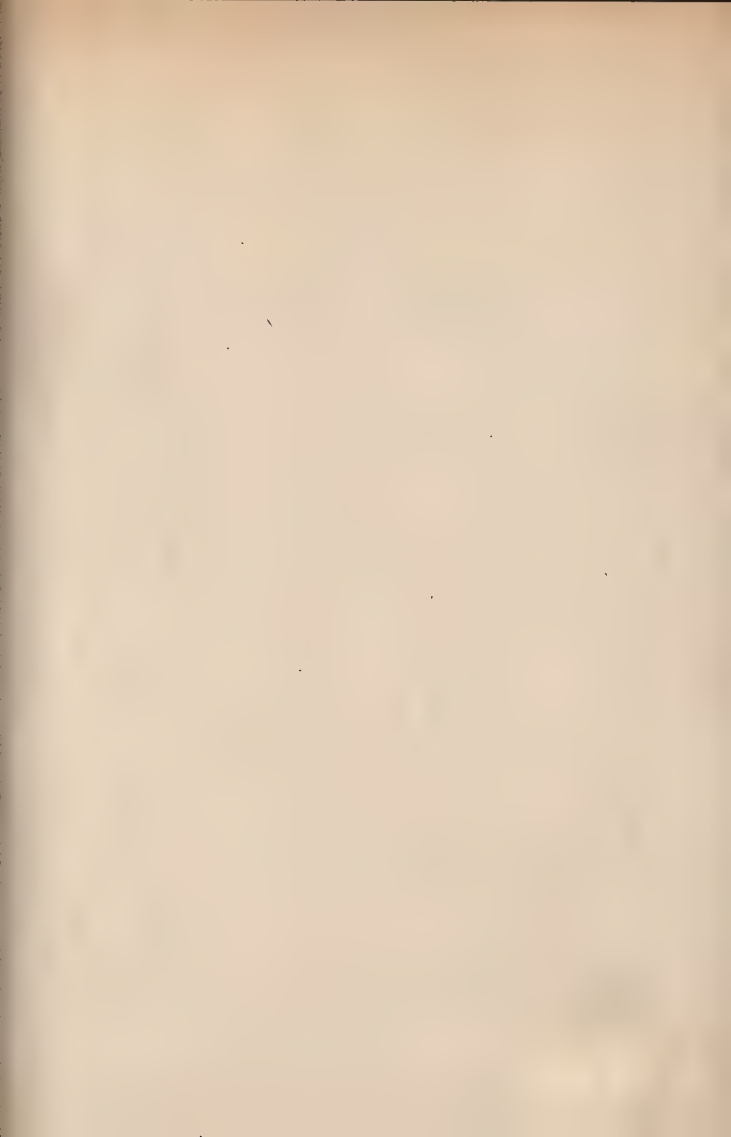
今、カットナルは、医は仁術の人そのものだった。
やがて手持ちの薬品が少なくなってきたカットナルは、野生の植物に詳しいレミーと一緒に薬草を探して密林を歩き回った。
レミーにとっても、カットナルの手伝いは楽しかった。
女性の心理をあまり知らないカットナルでは手の届かない女性の病気もあり、そんなときはレミーの独壇場だった。
——看護婦って、子供の頃、憧れたんだよね——
やる気十分のカットナルとレミーは、まさに腕のいい医者と看護婦のコンビといえた。
そしてもう一つ、カットナルが喜んだのは、カラスが仲間達の大群を密林から連れて来て、この村の近くに住まわせたことだった。
反乱軍や異星人軍に嫌われ追われるカラスにとっても、この村は安全な天国だった。
村人達にとっても、カラスが住みつくのは悪いことではなかった。
カットナルのカラスが指示しているのかどうかは分からなかったが、カラスの大群は村人を襲うこともなかったし、見知らぬ者が侵入して来てカラスが騒げば、それは警報装置の役目にもなるはずだった。
ブンドルは、もっぱら地球文化交流派遣員という感じだった。
毎日、集まって来る村の女達に、包丁捌きよろしく料理の作り方を教えた。
キリーのように格闘技や武術を教えようとも思ったが、ブンドルの武闘術はあまりに高度で芸術的過ぎて、基礎の出来ていない村人達には到底無理だった。

戦闘術を教えるのを諦めたブンドルは、地球人と村人達の共通の言語ともいえる音楽を教えることにした。
といって、バイエルやツェルニーやコールユーブンゲンが村人達に分かるはずもなかった。
――音楽の基礎は子供の頃から育てねばならぬ――
ブンドルは木の幹でギターを作り、村の子供達を連れて、シロバナムシヨケギクの咲く丘へ行って、ロジャースとハーマンシュタイン、ブロードウェイのミュージカルの名曲を歌って教えた。
子供達はすぐに憶えて、ブンドルと共に合唱した。
それは、「サウンド・オブ・ミュージック」の中の「ドレミの歌」だった。
ブンドルは子供達の澄んだ歌声を聞いて思った。
――この子達には素質がある。
数年経ったら、ウィーン少年合唱団を凌ぐかもしれぬな――
子供達はブンドルによく懐き、彼のことを「歌のおじさん」と呼んでいた。
――歌のおじさんか！――
――かつて闇に君臨していた美学も、陽にさらされると随分可愛らしくなるものだな――
ブンドルは柔らかな陽射しを見上げ、
――きっと、今は私の美学にとって試練の時期なのだ――
と思った。
だが、それを苦しいとも辛いとも思えなかった。
――見るがいい――

丘の下を、キリーが娘と二人乗りで自転車を漕いでいく。娘は、手桶とタオルを脇に抱えている。多分、森の外れにある池に水浴びに行くのだ。それが彼らの日課なのだが、たとえ天気が悪くて雨に濡れても、仲の良さは変わりそうになかった。……生温いまでの安らぎの日々……。

――ま、よし、世は全てこともなし――

ブンドルは微笑して、再び子供達と歌を歌い出した。

第8章

地獄の密林

疫病神はけじめをつける

その日は、唐突にやって来た。
その日の始まりは、いつもと変わりはなかった。
地球の六人は、いつもの日課通りのことを朝から始めていた。
真吾は水田用の運河の測量をするため、ケルナグールと河へ出掛けていた。
レミーもカットナルと一緒に、薬草探しで森の中を歩いていた。
ブンドルは、丘の上で子供達にいつも通り歌を教えていた。
子供達は、シューベルトの「冬の旅」の中の「菩提樹」を完璧に歌いこなせるまで成長していた。
キリーは、日課通りではなかったが、七日に一度の割で森に入り、食料調達の狩りをする、その日に当たっていた。
地球の六人は、奇しくも、全員、村から離れていた。
昼過ぎになって、六人はそれぞれの場所で、村のほうから聞こえる爆発音を聞いた。
カットナルのカラスが鋭い叫び声を上げ、はばたいた。
「村に何かが！」
レミーとカットナルは、半年以上も使わなかった銃を抜き、村へ走った。
真吾とケルナグールも同じだ。
真吾は走りながら、銃のチェックをした。
手入れは完璧だった。
キリーは娘の無事を祈りながら森林を走り続けた。
だが、キリーの位置は六人のうちで村から一番遠かった。

村に近かったのは、丘で子供達に歌を教えていたブンドルだった。
村に襲い掛かる黒ずくめの反乱軍と、次々に燃え上がっていく小屋の様子が見て取れた。危険を知らせて飛びまわるカラスの群れを狙って焼夷弾が打ち込まれている。
――助けに行きたいが、まず、子供の安全だ――
ブンドルは、子供達をブドウの木の影に一人ずつ隠して、
――ここから動くな――
と念を押してから、村へ忍び寄って行った。
だが、全ては終わっていた。
村には男達とカラス達の屍体が累々と横たわっていた。
黒ずくめの反乱軍が、数十人の女達を森の中へ引き立てていくのが見えた。
ブンドルは、すでに息の絶えた村の女の服を素早く剝ぎ取ると、身にまとい、髪に菊の花をつけ、反乱軍を追った。
そして、まるで道に迷ったように、反乱軍の前にふらふらと現れた。
反乱軍はためらいもせず、ブンドルを捕虜の女の一人加えた。
誰もブンドルの姿を見て、男だとは思わなかった。

キリーが駆けつけたとき、そこにはレミー、カットナル、真吾、ケルナグール、そして辛うじて逃げ果せた数人の村人と、ブンドルが避難させた子供達が呆然と立ち竦んでいた。
キリーは娘の姿を探して、村の中を歩きまわった。

長老の屍体が転がっていた。
そして、焼け落ちた小屋の壁の前に娘はいた。
数人の女達と抱き合うようにして、舌を噛んで死んでいた。
キリーは、娘の体を抱きしめた。
――どうして死んだんだ――
――どうして俺を待っていなかった――
生き残った村人の一人が言った。
「黒い悪魔に連れ去られて、夫に恥をかかせるなら死んだほうがいい……そこにいる女達は、みんな結婚の誓いを守ったのです」
キリーは村人の言葉に頷いた。
娘をそっと寝かせると立ち上がった。
武器を持った。
キリーは決断力の早い男だった。
「落としまえをつけてやる……」
「俺達も手伝うよ」
真吾がキリーの傍にきて言った。
レミーや他の二人も同じ気持ちだった。
「有難いが、今回は断るよ。俺は今回、ブロンクス流の無茶をする積もりだ。まともに戦うあんた達に俺の無茶は足手まといになるし、俺もあんた達と行動を共にする余裕はない。俺の今は、気違

いに刃物だ。付き合わないほうがいい。……じゃあな」
　キリーは自転車に乗ると、まっしぐらに森の中へ姿を消した。

「私達、どうしてみんなこうなっちゃうのかしら」
　村人達の埋葬を終えたレミーが呟いた。
　カットナルが作った小さな墓の前ではカラスが項垂れていた。
　キリーと同じように、カラスも連れ合いを焼き殺されたのだ。
「どうしてこうなるのか知らないが、キリーじゃないけど、一つ一つ落としまえをつけていくしかない」
「そうね。何だか私達、行く先々で、疫病神みたいで、せめて落としまえをつけなきゃ悪いもんね、皆さんに……」
「わしらを疫病神にしているのは、あいつかもしれん」
　カットナルは森を見詰めて呟いた。
　森は、いつの間にか青白く光りざわめいていた。
「ビムラーとビッグソウル（宇宙の意志）か……」
　ケルナグールが、うんざりした声で言った。
　真吾は森の光を指さし、にらんだ。
「もし、あんたがビムラーなら、言っておく。
　お前さん達が俺達に何をさせようとしているのか知らんが、俺達は俺達のやり方でけじめをつけ

る。

それがあんたにとってどんな結果になろうと、俺達は知らん。
俺達はあんたとはとっくに手を切っている。
それを忘れないでくれ」

森の光は何も答えず、輝き続けていた。

四人は、反乱軍の要塞攻撃の作戦を練った。
そして、準備に三日かけてから、真吾とレミーの組み合わせと、ケルナグールとカットナルの二組に別れた。

要塞攻撃は二十日後——。
——その日時だけはしっかり決めて置いた。
二組はそれぞれ別の方向に向かった。
真吾達は反乱軍の要塞、そしてカットナル達は異星人部隊の町を目指した。

レミーと真吾は、密林の中を磁石を頼りに北へ北へと進んで行った。
人目を避け、昼はなるだけじっとしていて、夜に前進する、夜行動物のような進み方だ。
次第にきな臭い火薬の臭いや、焦げ臭い焼け跡の臭いが立ち込め出し、反乱軍と異星人軍の戦闘地区に入ったことを二人に教えてくれた。
二人の歩みはさらに慎重になった。

何度か、反乱軍や異星人部隊のキャンプの傍を通り過ぎたが、気付かれなかった。
村を出てから六日目、二人は、硫黄の河に出た。
「ここから先は、反乱軍がうようよいる。いざとなったら、自分一人だけの命を守れ。お互いに情けは命とりになる」
「分かってるわ、真吾」
「音の出る銃も使えない」
「ええ、私にはこれがある」
レミーは、バズーカ付きのボーガンを見せた。
「俺はこれだ」
真吾は、くの字型の小型のブーメランを見せた。
「今までは、子供っぽくて、照れ臭くて使えなかったがね。背に腹はかえられない」
「ブーメランのように行って帰ってこれるといいけど」
「一流のスパイと一流の破壊工作員だ。どっちかが上手くやるさ」
「現役、とっくに引退の一流選手ね」
二人はなんとなく見詰め合った。
「こういうの、本当に引退したかったよ」
「私も」
真吾は唐突に言った。
「で、その、好きだったよ、君を……」

即座にレミーが答えた。
「私も」
「え?」
「うん」レミーはさりげなく頷いた。
「あ、そ……」
「うん……」
「で……」
「で?……」
小首を傾げるようにして真吾をレミーは見詰めた。
「で……、今はそういう時じゃないし、そういう場所でもないよな……、ここは……行こう」
真吾は歩き出した。
「うん」
レミーは足元の石をポンと蹴った。
……確かに、甘い言葉を交わしていられる場合でも場所でもなかった。けれど、こういう場所でしか、あーいう言葉を言えない男も悪いと思うのだ。
——たまには、星の見える公園のベンチとか、ダサクてもいいから、それらしいムードの、あーいう言葉の名所旧跡で言ってみろっていうのよ……。どうせ駄目よね……。照れちゃってさ、言えないんだから……。みんな同じよ……。真吾もキリーもブンドルも……、そう、カットナルにケルナグールだって、皆さん同じ……。この五人と一緒にいる限り、恐らく一生独身当選確実よね……。

私だって、年に一・五回くらい子供が欲しいって思うことあるのにね……、誰の子でもいいからね……。なんて？　これ、ちょっと過激か――

本来なら、ここでペロリと舌を出すはずのレミーだったが、意外と真顔で肩を竦めた。

そして呟いた。

「暗いなあ……」

その時だった。

ヒュー ッ！

おなじみの風の切る音がした。

弓矢の音だ。

飛び退った二人の前に矢が突き立った。

真吾が矢の飛んで来た方向にブーメランを投げた。

茂みの中の黒ずくめの反乱軍の一人が倒れた。

それを合図にしたかのように、十数人の反乱軍が飛び出して来た。

「レミー、グッドラック」

「真吾もね」

二人は、それぞれ別の方向に走り出した。

反乱軍は二手に別れてレミーと真吾を追い掛けた。

レミーは、時折振り返ると、ボーガンを撃ち、矢で正確に敵を倒していった。

これなら逃げ果せる。

そう思った瞬間、レミーは息を飲んだ。
茂みの向こうは崖だった。
しかも、崖っ淵に、蝸牛の変異体ゲズルが横たわっていたのだ。
ゲズルはレミーを見てヌッと立ち上がった。
後ろに反乱軍、前にゲズル——。
レミーは、バズーカ付きボーガンを肩に構えてゲズルに向かって走った。
「ごめん！　真吾、音がうるさいけど、バズーカを撃つわ」
レミーはゲズルの懐ろに飛び込んだ。
逃げるはずの獲物が飛び込んで来て、ゲズルは一瞬怯んだようだったが、軟体動物にろくな知能はない。
すぐにレミーの頭に牙を突き立てようとした。
レミーはバズーカを撃った。
ゲズルの体は崖から弾き飛ばされた。
だが、無数の触手はレミーの体を離さなかった。
レミーはゲズルに引き摺られるように下に転がり落ちていった。
レミーは落ちながら、必死でゲズルを引き離そうとした。
とっさに、腰に付けた蚊取り線香の火を触手に擦り付けた。
ピクッ！
触手がレミーから離れた。

〝やった〟
レミーは、体に付いた触手の一本一本に、片っ端から蚊取り線香の火をくっつけた。
レミーの体がゲズルから離れたと思った途端、それまでクッションの役を果たしていたゲズルがなくなった。レミーは、崖の岩盤にモロにぶつかりながら、崖下に落下していった。

レミーは気を失っていた。
それが、何時間か何分か何秒かは分からなかった。
だが、レミーの動物的本能は、危険な場において、それほど長く気を失わせはしないものだ。
レミーは目を覚ますと、身を起こし、後ろの岩に寄り掛かった。
下半身の感覚がまるでなかった。
そっと、腰と足に手を触れると、骨がぐしゃぐしゃなのが分かった。
レミーは、あっけんからんと思った。
――アイタ、駄目だ、こりゃ……女として、人間として、使い物にならない――
――もっとも、この傷じゃ、遅かれ早かれ死んじゃう。痛まないだけ助かったわ――
レミーは、いよいよ自分の終わりを悟った。
その時だった。
レミーは誰かの視線を感じた。
それは、茂みの向こうからジッとこちらを見つめている。
それは二つの緑の目だった。

その深く澄んだ目の緑に、レミーはふと吸い込まれそうな気がした。
やがて、茂みの中からそれは出て来た。
「綺麗……」
レミーは、思わずそう思った。
恐怖よりも、その感情のほうが早かった。
それは黒い豹だった。
黒豹はゆっくりとレミーに近づいてきた。
死を覚悟し、しかも下半身が麻痺して動けないレミーに、逃げる気はなかった。
——それにしても、なんて立派な黒豹なんだろ——
レミーは陶然として黒豹を見つめた。
黒豹は、レミーの知る普通の豹の大きさの二倍はあった。
普通、黒豹と言っても、よく見れば黒い毛の中に豹独特の斑点が見えるものだが、この黒豹はまさに漆黒だった。
豹の目は、並みの豹ですら鋭く高貴だ。でも、この黒豹の目には、それに加えて、レミーを落ち着かせる優しさがあった。
——こんな見事な黒豹なら、私をあげてもいいな——
レミーの顔には、微笑さえ見えた。
だが、黒豹の見事なプロポーションを見つめるうち、レミーは不思議なことに気付いた。
その黒豹には翼があったのだ。

空を飛ぶための翼が……。
――こんなことって……考えられない。動物の進化の上でありえないことだわ……。もしかしたら、私、もう死んでいて、天国にいるのかも――
そのとき、黒豹の目から、ふっと優しさが消え、レミーに向かって身構えた。
――いよいよか。よろしい、お食べなさい。ただし、あなたは猛獣の中でも指折りの狩りの名人のはずでしょ。お願いだから、仕損じないで一撃でやってね――
黒豹はレミーに向かってジャンプした。
レミーは目を閉じた。
しかし、レミーには何も起こらなかった。
黒豹はレミーを狙ったのではなかった。
レミーの頭上の岩場から、先刻のゲズルがレミー目掛け襲い掛かろうとしていた。
黒豹は、レミーの体の上を飛び越えると、ゲズルの三つの目に爪を突き立てた。
レミーの目の前に黒豹とゲズルが絡み合って落ちた。
レミーは、傍に落ちていたボーガンのバズーカ砲を構えた。
しかし、射程が定まらない。
――だめだ。このままじゃ、黒豹に当たっちゃう。どいて、そこを――
レミーは、自分がなぜ黒豹を手助けしたくなったのか分からなかった。
――どっちにしたって殺されちゃうのに……。でも、どうせ食べられるなら、蝸牛のお化けより、黒豹のほうが……。どいてそこを――

黒豹は、レミーの声が聞こえたのかのように飛び退った。
レミーは、バズーカを発射した。
だが、バズーカの二発や三発で倒れるゲズルではなかった。
弾の反動で、いったん後退って倒れたゲズルは、再び立ち上がってレミーへ近づいて来る。
と、黒豹は、レミーとゲズルの間に割って入った。
黒豹は、澄んだ緑の目でゲズルの三つの目をじっと見つめた。
ゲズルの動きが止まった。
黒豹は、翼を二度、三度、はばたいた。
すると、ゲズルはゆっくりと向きを変えた。
そして、そのまま、黒豹とレミーを残して、のろのろと、それこそ蝸牛のような速さで遠ざかっていった。
黒豹はレミーのほうに向き直ると、目にも止まらぬ早さで飛び、レミーの手からボーガンバズーカを弾き飛ばした。
優しい目で、低く唸って、かぶりを振った。
まるで、〝女の子があんな危いおもちゃを持ってはいけませんよ〟とでも言っているようだった。
だが、レミーは、黒豹の唸り声を聞いて、
――いよいよ食べられる番ね――
と思った。
しかし、黒豹はのっそりとレミーの横に来ると、横たわった。

そして、レミーの頬と鼻をペロリと舐めた。
その舐め方が、親愛の情であることを、元動物保護官だったレミーは気付いていた。
——この黒豹、人間に飼われていたことがあるのかな？——
でも、黒豹は、猫科の中の人間に懐かない猛獣としては、ライオンやトラの比どころではない。
ライオンやトラのサーカスはあっても、豹のサーカスは滅多にないのだ……。
黒豹は、正面からレミーの顔を見つめた。
レミーは、黒豹の舌に唾液を送り込むようにして口づけした。
これが、人間の動物に対する親愛の情だ。
黒豹は次に、レミーの動けない腰のあたりの匂いを嗅いだ。
それから、翼を下げて乗れとでもいうように首を振った。
訳が分からずキョトンとしているレミーを焦れったいとでもいうように、黒豹はレミーの衿首を噛むと、ポンと上空に放り上げた。
凄い力だった。
レミーの体は軽々と宙に飛んだ。
黒豹はフアッと空中に浮かび上がると、落ちてくるレミーの体を背に乗せて、そのまま翼をゆったりとはばたかせながら密林の上空を飛んだ。
下半身に感覚のないレミーは、黒豹の首に腕でしがみつくのがやっとだった。
黒豹はレミーを落とさないように気を遣いながら、火山地帯の見える岩山へ飛んでいった。
岩山の中腹に洞穴があり、黒豹はその中にゆっくりと降りた。

レミーは黒豹の背から崩れるように降り、横たわった。
下半身の痺れが、かなり上まで広がっているのが感じられた。
手の指の先も冷たくなっている。
──死ぬんだな……。顔はきっと青ざめて、目に隈なんか出来てて。よかった、鏡がなくて……。
そんな自分の顔、見たくないもん──
レミーは、洞穴の天井を見上げた。
キラキラと青白い光がきらめいている。
──これは何?……。ビムラーのきらめき？──
しかし、レミーの意識はそこで跡切れた。

ふと目をあけると、レミーは裸で寝かされている自分に気が付いた。
首だけを持ち上げて体を見ると、黒豹がレミーの体を舐めているのが見えた。
体が痺れていて動けないレミーは、黒豹のなすがままに任せるよりなかった。
やがてレミーは深い眠りに襲われた。

次に気付いたとき、レミーの体中に粘液質の木の葉が張り付いていた。
体中が温かかった。木の葉は薬草の一種らしかった。
深い眠りが再び襲い掛かった。

どれくらい、ここに横たわっていたのだろう。
気付くと、体に張り付いていた木の葉が、カサカサに乾いて体から落ちた。
葉の動く感触が足に感じられた。
——足に？……足が感じる？——
レミーは足を動かしてみた。
腰に触ってみた。治っている。
レミーは立ち上がった。
歩いてみる。
——ＯＫだ……。元の体に戻っている。
なぜ、どうして？　バラバラになったはずの下半身の骨がどうして元に戻るの？——
ふと横を見ると、レミーの服が落ちていた。
かなりボロボロになった服には、牙と爪の跡が付いていた。
——あの黒豹が服を脱がし、体を治してくれた？——
レミーは服を着ると洞穴の入口に歩いていった。
黒豹は、じっと洞穴の外を見つめていた。
レミーが傍に来ても、黒豹は素知らぬ振りで外を見つめ続けた。
青白い炎を吹き上げる活火山が見えた。
活火山の中腹に、石を積み上げた城がある。
——（あれが反乱軍の要塞なのね。そして燃え上がっているのはビムラー）……（そう）——

何かがいきなりレミーの思考の奥で囁いた。
レミーはさして驚かなかった。
レミーの心に交信しているのは、この黒豹に違いなかった。
(……私の体を治してくれて……サンクス……)
(……まだ完璧ではない……休養を取りたまえ……)
(……でも、私にはやらなければならないことが、あるの……)
(……それは、私がやる……時期はもうすぐ来る)
(……あなたはあなた……私達は私達……私達はやるわ)
黒豹はしばらく黙っていたが、
それだけ言って、黒豹は再び黙った。
(……時期が来れば送っていこう……)
レミーは、この黒豹が何であるか分かっていた。
この星で生まれ、この星で育った最も優れた生き物。
そして宇宙の意志、ビッグソウルから宇宙へ進出することが許される候補者は、人間ではなかった。
この黒豹こそ、地球でいうケン太達、新人類、いや、この星の新猫類だったのだ。
──でも、なぜ豹が──
レミーは、地球での豹に対する文献を思い出した。
──猫科の野生動物でもっとも優れているのは豹である。
大型のトラやライオンは人類文明の発達により、食用となる大型の獲物が少なくなり、やがて滅

び去る運命にある。
家猫は、人間に飼い慣らされ、人間がいなくなれば生存は不可能だ。
しかし、豹は違う。
狩りの能力に優れ、獲物は鳥や人間の飼う小さな家畜や人間に近い猿の類の中型・小型の食料で十分なのだ。
しかも人間に依存しない野生……。彼らは、これからも生き延び繁殖するだろう。
彼らの隠れ家、密林のある限り。
この星には、一万五千年にわたって豹の最大の敵、文明人がいなかった。
そして、広々とした密林がある。
豹は文明人との戦いに生き抜き、文明人がいなくなっても生き続け、進化した。
この星を代表して宇宙にはばたくのが豹であっても、何の不思議もないのかも知れなかった。
レミーは、そっと黒豹の頭を撫でた。
――宇宙へ翔びたい気持ちは分かる。
未知の世界を知りたい気持ちも分かる。
でも、それすら、宇宙の意志ビッグソウルにコントロールされているとすれば、果たして、ケン太は、黒豹は、幸福なのだろうか。
そう思うのは、翔べない人間である私達のひがみなのだろうか――
レミーは、急に黒豹が身近なものに思え、いとおしくなって、その首筋を抱きしめた。
黒豹は、火山口に輝くビムラーの光を、飽きることなく、じっと見つめていた。

真吾達と決めた攻撃予定の日まで、レミーは洞穴の中で黒豹と共にすごした。
黒豹は毎日、外に飛びたっては、レミーに果物と花の蜜を運んできてくれた。
レミーが時折、洞穴から見降ろす密林は、日に一度は青白く光り、ビムラーの活性化を示していた。
ビムラーが完全に成長する日は近かった。

攻撃予定の前日がやってきた。
その夜もとばりが降りて――。
異星人部隊の町は寝静まっていた。
町の外れには、地球人の六人が乗って来て不時着した小型機が、町の塀を破った形そのままで置かれてあった。
星空の一部分を塗り潰しながら、何かが静かに飛んで来た。
それは、夜に紛れるように黒く塗られた熱気球だった。よく見ると、動物の薄皮やボロ布をぬいあわせたつぎはぎだらけの気球だ。
町の上空に止まったそれは、やがて向きを変え、不時着した小型機の方向へ飛んで行く。
気球を上昇させるために空気を温めるバーナーの炎や音は聞こえなかった。
町の上空に来る随分前に、バーナーは切られていた。
風まかせのはずの熱気球がなぜ町の上空で向きを変えられたかというと……、無数のカラスが羽音を忍ばせながらゆっくりと気球を引っ張っていたのだ。

小型機の上空に来た熱気球から、二本の綱が降り、二人の男が降りて来た。
もちろん、ケルナグールとカットナルである。
二人は、小型機の燃料タンクの傍に忍び寄った。
カットナルが呟いた。
「やっぱり、異星人部隊の奴ら、半年以上経っても、この機体に指一本触れておらんぞ」
「臆病者めらが。ブンドルが火花一つで大爆発するって話を鵜呑みにしやがって……」
「ブンドルが言ったのは嘘ではない。気を付けてやれよ」
カットナルは燃料タンクのバルブを注意深く外した。
燃料が吹き出して来る。
ケルナグールが、長いゴムホースのような物に燃料を流し込んだ。
それは、あの村人達が消火器に使い、ブンドルがソーセージに使った草食動物の長い腸だった。
カットナルは、フランクフルトソーセージくらいの長さのところでくるくると腸を捻り、ひもで縛った。
ソーセージを作るのと同じ要領だ。
一本の腸が終われば次の一本、とうとう数十本の燃料入りのソーセージの束が出来上がった。
火をつければまさに爆弾ソーセージである。
「残りはどうする」
「なもん、土産に置いていけ」
二人は、爆弾ソーセージの束を熱気球から伸びた綱に括り付け、再び綱を伝わってよじ登ってい

った。
綱に括り付けたソーセージを引っ張り上げたとき、町の司令部から部隊長があくびをしながら現れた。
大きくのびをして上空を見上げた部隊長は怪訝そうに首をひねった。
満天の星だというのに、視界の真ん中だけ星がない。
部隊長は懐中電灯を上空に向けた。
懐中電灯のスポットライトを浴びて、気球に乗って下を窺っていたケルナグールの顔が浮かび上がった。
部隊長は仰天した。
ケルナグールは、しかたなく照れ笑いをした。
ただでさえ、子供がひきつけを起こすような顔である。
それを闇の中で下からスポットライトを当てたらどうなるか……。部隊長は腰を抜かして、這うようにして司令部に飛び込んだ。
町にサイレンが鳴り響いた。
町中のライトがつき、熱気球の姿が浮かび上がった。
バラバラと兵士達が銃を持って飛び出して来た。
「おい、見つかっちまったぞい」
「よし、急速上昇じゃー!」
カットナルは、バーナーに火をつけた。

青白い炎が燃え上がった。
それは、カットナルが硫黄を原料に作った燃料だった。
熱気球は、ぐんぐん昇っていった。
「全速前進!」
カットナルのカラスがリーダーのカラスの群れが、羽根音もけたたましく、気球をひっぱり始めた。
気球のまわりで銃弾がはじける。
町の兵士達が、気球を狙い撃ちしはじめたのだ。
「まずい、非常にまずいぞ。ソーセージに一発でもあたれば大爆発じゃ」
「これを落とせ」
カットナルが爆弾ソーセージの一本をハサミで切ってケルナグールに渡した。
「これ、よく焼いて食ってくれィ」
ケルナグールはソーセージを投げた。
ソーセージはころころところがって、部隊長の足元でとまった。
「なんだ、こりゃ?」
部隊長が拾って上から下からながめまわして、ポイッとゴミ箱へ放りこもうとした。
だが、狙いが狂って、隣の灰皿立てに落ちた。
灰皿には当然、煙草のもえ残りが入っていて──。
大爆発──。
灰皿のフタが、燃えながら宙を飛び、気球の方向へ飛んでくる。

「オイ！　ケルナグール、なんとかせい！」
「なんとかせいと言ったって！」
ケルナグールは、今や彼のお守りとなったフライパンで、灰皿のフタをカキーンと叩いた。
「ナイスシュート！」
灰皿のフタは小型機へ落ちていき、次の瞬間、小型機に残されていた燃料に引火した。
轟音とともに小型機は粉々に吹き飛び、町の大半に飛び火した。そこには弾薬庫もあって、まるでドミノ倒しのように町の爆発はエスカレートしていった。
気球に、炎上する町の熱風が襲いかかり、気球は急上昇した。
「よーし、大成功！……目的地は反乱軍の要塞じゃ」
「レッツ・ゴー！」
夜空を真っ赤に染める炎を見降ろしながら、気球は意気揚々と要塞に向かった。
二人は気付かなかったが、この日、たった一本の爆弾ソーセージがまきおこした大爆発で、異星人部隊の町はほとんど壊滅してしまったのだった。

異星人部隊の被害は、すぐに宇宙空間の母艦ジルガに報告された。
「地球人が生きていた……」
指導者、ジーは軽いめまいを感じた。
ジーはビジョンを見た。
密林が、そして火山帯が青白く光っている。

……完成段階をむかえるあの星の不思議なエネルギーがもう少しで我々のものになるというのに……。確かに半年前は、反乱軍が邪魔だった。抹殺したいと思った。だが、今はそれどころではない。完成段階寸前のエネルギーは、いまでもあの星全てを破壊できるパワーを持っている。その発火点にある要塞を、下手に爆破でもされたら、エネルギーの爆発を誘発するかもしれぬ……

ジーは、傍の女官に言った。

「反乱軍の女王、ゼドを呼びだしなさい。地球人のことを知らせるのです。我々は、要塞と、あの星のエネルギーを守らねばなりません」

ジーは、再びビジョンを見つめた。

「あのエネルギーを手に入れるのは、私達でなければいけないのです」

そして、地球人という名の異星人を、当時、反乱軍抹殺という目的はあったにせよ、あの星に送り込んだ自分を今は後悔していた。

第9章

肉林の要塞

捨てたら二度と戻らない

真吾達の要塞攻撃予定の日がやってきた。
密林と火山帯のビムラー（生命エネルギー）は、完成段階を間近にして、活性は激しさをまし、青白い光を絶えず明滅させていた。
（……どうしても行くのか……）
黒豹はレミーに語りかけた。
（……ええ、もうすぐビムラーは完成して、あなたは宇宙にはばたけるようになる。だから、ビムラーとビッグソウルにとって、私達のこれからやることは、意味のないことかもしれないわ。もしかしたら、私達の攻撃でビムラーが爆発でもしたら、この星全てがふっとんじゃうかもしれない。そういう意味では、あなた達には邪魔な存在かもしれない……。でも、私達は、ビッグソウルやあなたのために戦うんじゃないの。私達に楽しい暮らしをさせてくれた村の人達のため、そして自分がやったことのケリをつけるためにやるの……。
私を邪魔だと思うんだったら、今、ここで殺したらいいわ。あなたに拾ってもらった命だけど、わたしはあなた達のために使おうとは思わないから……）
黒豹は、レミーを見つめて語った。
（……殺すくらいなら、あのとき助けはしない。さあ送ろう……）

黒豹はレミーを乗せて宙を駆けた。
要塞に近づくと地表すれすれに飛んだ。
要塞をかこむ堀が見える。そこにうじのように蠢く動物の群れがいた。

ゲズルの群れだ。
（……人間の間違いで、むりやり変化させられた悲しい生き物だ。人間には新しい生き物を生みだす力などないのに……。生き物をおかしな形に変えることだけはやりたがる……）
黒豹は、要塞の壁すれすれに飛び上がり、壁の上の物陰にすっと降りたった。
（……サンクス、タクシー代は払えないけど……）
レミーは、黒豹の頭に軽く口づけした。
（……わたしの宇宙への旅立ちにまき込んですまなかった……）
黒豹の言葉にレミーはかぶりを振った。
（……わたし達は勝手にこの星に来たの。あなたとは関係ないわ……）
黒豹は、しばらく澄みきった緑の目でレミーを見つめてから、翼を広げ、飛び去っていった。
レミーはあたりをうかがうと、すばやく要塞の通路にとび込んだ。
そのとたん、後ろの天井が轟音をたてて閉じた。
目の前に、真っ赤な塗料をまだらに体に塗った半裸の女達が弓を持って飛び出してきた。
真吾は要塞の高い壁を見上げていた。
途中、はぐれたレミーの行方が心配だったが、もしもの場合、真吾一人でも攻撃するつもりだった。
まわりの岩場のすきまの至るところから、火山の蒸気がふきあげ、視界は極めて悪い。
煙にまぎれていけば、潜入は可能かもしれない。しかし、問題は壁のまわりを取り囲む堀の中の

ゲズルの群れだった。
一つの手段としては、壁の上の突起物にブーメランで綱をかけ、それを伝わって登る方法もある。しかし、煙の中とはいえ、登っている途中で発見されれば、めくら撃ちでも当たるだろうし、堀に落ちてしまえば、たちまちゲズルのえじきだ。
——あのかたつむりの化け物をなんとかしなければならない——
そのときだった。火山の蒸気の中から、黒ずくめの三人の反乱軍が現れて、真吾の横に腰かけた。視界の悪い蒸気の中だ。三人は、真吾の影を仲間と勘違いしたらしい。
反乱軍の一人が真吾に話しかけた。
「異常はない？」
女の声だった。
——とぼけだ——
「ありません」
反乱軍の三人はビクンと立ち上がった。
「男！」
そうわめくと真吾に飛びかかってきた。
「えっ？」
真吾はすばやく身をかわすと、黒ずくめの反乱軍の仮面にブーメランの先を叩きつけた。
仮面の下から、女の顔が現れた。
残りの二人は、弓をつがえて真吾を狙った。だが、仮面のとれた女ともつれあって格闘している

真吾になかなか狙いが定まらない。
二人の背後に背の高い黒ずくめの反乱軍が現れた。
仲間だと思って気を許した二人のみぞおちに、背の高い反乱軍のパンチが食い込んだ。
二人の反乱軍は弓を落として、声もなくその場にくずれ落ちた。
女を倒した真吾は、背の高い反乱軍に身がまえた。
「俺だよ。真吾。やっぱり来たのか？」
背の高い反乱軍の兵士は仮面をとった。
キリーだった。
黒い服を脱ぎ捨てたキリーの姿は、服はボロボロ、体中傷だらけだった。
「そうとう派手にやったらしいな」
「やるだけやった。奴らの服を盗んで、要塞の中にも忍び込んだ。だが、反乱軍の指令を出す上の奴らと兵隊達は、完全に別々に分かれている。黒ずくめのユニフォームの兵隊達は、要塞の主要部分には立ち入り禁止って訳だ。おまけに反乱軍は、どうやらみんな女だ」
「女？」
「よく考えてあるぜ、野郎が女子寮に忍び込むってのは、一番難しい。俺なんか、仮面をとっちまったらすぐばれる」
「声を出しても、男と分かってしまうってことか。それで先刻、俺のことがこいつらに分かったんだな……」
「ともかく、要塞の見取り図だけ描いて、出直すことにした」

キリーは、子供の絵のような下手な見取り図を真吾に見せた。

「壁の上のここが、指令を出している連中のいるところだ。直接、なぐり込むよりないな」

「問題は、あのかたつむりだが……」

「俺にまかせろ」

「あいつらが全部溶けるまでにゃ専売公社が破産しちまうよ。あいつらはな、音に反応する。音の出るものを狙って動く。違うか？」

「まさか、なめくじに似ているからって、塩をぶっかけて溶かそうっていうんじゃないだろうな」

確かに宇宙船の中でレミーを襲ったとき、ゲズルはある種の音をめあてに動いていた。

「音をだそうにもレミーのキイボードはここにはないぜ」

「まかせなさい。とりあえず、夜を待とう」

空は夕焼けで赤く燃えていた。

密林と火山口で光るビムラーの青白い輝きが、上空の雲に奇妙な迷彩色を描きだしていた。

その雲間を一羽のカラスがすり抜けて、密林の中へ降りていった。

そこには、カットナルとケルナグールの熱気球が待機していた。

彼らもまた、夜を待っていた。

レミーは要塞の通路を、赤い半裸の女達にひきたてられて行った。

岩をくりぬいたような通路は、まるで観光地の秘宝館を思わせた。どぎつい原色の塗料が意味もなく塗りたくられ、ところどころに槍で串ざしにされた男のミイラが飾られてある。しばらく行く

と、円筒のガラスの中に、皮をはがれた女の屍体が液体漬けされて並んでいる。からみあう男女の裸の像が、けばけばしい色で塗装されている。観光地の秘宝館と違うのは、それが全て本物の人間でできていることだった。

やがてレミーは、中央に丸い竪穴のある大広間にひきたてられた。

竪穴の底には、青白く光るビムラーが液体化して胎動していた。

竪穴の上には、一目で核爆弾を搭載していると見える小型のミサイルが、先端を地下のビムラーに向けて吊るされてあった。

広間の正面に祭壇があり、その上に大きなベッドとバスタブ（風呂）がおかれてあった。

誰かが入浴しているらしく、白衣の女官たちがバスタオルを持って並んでいた。

祭壇のまわりには、薄衣をまとった女や、ボディペインティングした裸の女達が無数にむらがり、互いに抱きあって蠢いている。

さらに奥には、血の色をした水のプールがあり、女達が泳いでいた。

これで、おどろおどろしい呪文でも流れていれば、まさに魔女の宮殿だが、ときおり聞こえる女のうめき声、あえぎ声以外は、何も聞こえなかった。

レミーは祭壇の階段をのぼっていった。

バスタブに入っていた女が立ち上がった。

体中をぬるぬるとした赤いものがしたたり落ちた。

女官達がバスタオルで女の体をぬぐい、装身具を身につけさせた。

女は、レミーを見すえた。

レミーは思わず舌打ちした。
——負けた——
レミーは、ジル星の母艦ジルガの指導者ジーを見たときと同じ思いにかられた。
だが、こちらはジーの持つ美しさとは違っていた。
一言にいって妖艶(ようえん)なのだ。男にこびる色気ではない。女が見て、背すじが泡だつような色気なのだ。逆らおうとしても逆らいきれず、ワナに落ちてしまうような、女がのめりこんでいくような美しさなのだ。
——この星の女ってもう、イヤになっちゃう……。いいえ！　メゲるなレミー！　あたいだって女の子だぞ……。でも、最近わたし、この方面、自信をなくしてるみたい——
女はジル星の言葉で言った。
「私はこの星の女王。お前が異星人の女か……。色が黒いの」
——よけいなお世話だ——
レミーは黙っていた。
「どうした？」
「アタ～シ、この星の言葉分かりませ～ん。通訳して下さ～い」
わざと片言のジル星の言葉で言った。
語学万能のレミーだ、ジル星の言葉はとっくに理解していたが——。
——分かっていても分からないフリをするの……。ああいう失礼なことを言う女には——
レミーの頭に通訳用のヘッドフォンがつけられた。

「どうかな、あの湯を浴びては……。肌が白くなるぞ」
「その前に赤くなりそう……」
「未開人どもの処女の生き血だ。化粧品のように肌が負ける心配もない」
「気持ちが負けるわ」
　女王は、レミーのあごに手をやってまじまじとレミーの顔を見て、
「ほう、しわ一つない。十何歳じゃ？」
「サンクス。でも、二十歳はとっくに……。冷凍冬眠で年をとらない時間も入れたら三十も越してる」
「正直だね」
「年、サバよむの嫌いなの」
　パシン！
　いきなり女王はレミーの顔を叩いた。
　──気にさわること言っちゃったらしいな……。フーン、この人、そーとう年なんだ──
　レミーは、ちょっとだけ、精神的に優位になった気がした。
　女王は表情一つ変えずに言った。
「男は？」
「それなりに……」
「わたしの風呂には向かぬわけだな」
「おあいにく」

女王は、ベッドの上に置いてあったムチを取り、ピシリと床に叩きつけた。
「それでは、死ぬ前にわたしに抱かれる気はないか？」
「ここにいる方達のように？」
「異星人というのは初めてじゃ、叩けばいたがるのか？　剣をみせればこわがるのかな」
女王は、腰の剣を抜き、レミーの頬をきっ先で撫でた。
「女と女か……、悪くないな。けど、ムチと剣っていうのは……」
「ん？　どうした？」
レミーは、通訳ヘッドフォンのスイッチを切って地球の言葉で吐き捨てた。
「変態、通俗、エログロ、ナンセンス！」
「なんと言ったのじゃ」
「地球の言葉で、いいご趣味って言ったの」
女王は、微笑を浮かべた。
「では、こちらへ来るがいい」
「あの、その前に、わたし、異星人でしょ。なにかほかに難しいこと聞かなくていいの？」
「別に……。問題は男か女か、みにくいか美しいかのどちらかだ。異星人であろうとなかろうと、男ならとっくに殺していた。さ、わたしに抱かれるがよい。男と違って、減るものでもあるまい」
「……減るわ。こういうのって、相手が男でも女でも……」
レミーは真面目な表情で呟いた。
「わたし、時々思うもん。十六、七の、なにも減ってない頃に戻りたいなって……。違う？」

「十六？　十七？　つまらぬ」
「一番いい時期だと思うけどな」
「忘れた……」
「そうかな……、そんなもんかな」
「当然だよ、レミー」
大広間の柱の陰から男の声がした。
「その女にとっては、五十年以上昔のことだからね」
大広間の女達にざわめきが起きた。
「男！」
「男の声だ！」
「どこにいるの？」
柱の陰から、一枚布を着て頭にしおれた菊の花をつけた女が、つかつかっと男の足どりで壇上にあがってきた。
そして、一枚布をはぎとった。
ブンドルだった。
レミーはさほど驚きもしなかった。いつもこうなのだ。大向こうを狙ったように登場する。べつに本人は意識していないのだろうが、こういう場所に出てくる星にめぐまれているのだろう。
「さがれ！」
女王のムチがうなった。

ブンドルは手でムチを受けると、先を握って、すばやく振った。
ムチがしなり、女王の手からムチのつけねがパチンと離れた。
女王はヒステリックに叫んだ。
「みなの者、かかれッ！」
槍を持った女達が壇上に駆け上がった。
「女の無知(ムチ)はさみしい。ムチはこう使うものだ」
ムチがするどくしなり、蛇(へび)のように女達の槍を叩き落としていった。
次の瞬間、ムチは女王の体にまきつくと、いつの間にか、女王はブンドルの腕の中で自分の持っていた剣を奪われ、のど元につきつけられていた。
「流石(さすが)！　ブンちゃん」
ブンドルは溜め息をついて、
「それはよしとしても、あの名前は言うなよ」
「え？　あ、インディアナジョーンズ？」
「言うなというのに……」
女王が、ブンドルの腕の中でもがいた。
「動くな。さもないと、五十年以上保ってきたその肌、また手術が必要になるぞ」
「五十年以上？　ちょっと、それ、どういうこと？」
「この女、反乱軍のリーダーになってから五十年間、この姿を守ってきた。未開人達の女の肌を移植してな」

レミーは、反乱軍が女だけを連れていったという村の長老の言葉を思い出した。
「この女だけではない。ここにいる全ての反乱軍の女達が、そうして若さを保ってきた」
「みなさん、みんなおばちゃまなわけ？」
「さよう。連れ去った未開人の女達をもてあそんだあと、肌をはぎ、血は風呂に使った。拒絶反応をおこすような肌の持ち主は、洗脳して黒ずくめの兵士にして、同じ未開人を襲わせたり、異星人部隊と戦わせた」
「どうしてそんなにまで若さにこだわるの？」
女王は答えなかった。
ブンドルは、沈んだ声で言った。
「この人達は、子供を生めないからだ。そればかりか、他人の子供を育てることもできない。将来に何の展望もない。老いと死を待つばかりだ。だから若さにこだわるのだ。この人達は、ジル星の人間に作られた人間だった。違うかな、指導者ジー、あなたはこの話を聞いているはずだ」
女王のベッドにとりつけられていた鏡がビジョンに変わり、ジーの姿が写った。
「地球人をその星に送り込んだのは失敗でした。ここまでやり手だとは思わなかった。いつ、そこへ忍び込んだのです？」
「つかまった未開人の女達にまぎれ込んだのだ。以来、いろいろ調べさせてもらった。レミーが連れこまれねば、もう少しのんびりさせてもらうつもりだったがね」
「急がせてごめんなさい」
「潮どきだよ、レミー。今日、明日中にでもビムラーは完全な姿に成長する。もうすぐ、この星の

馬鹿げた人間達の結着がつく」
「どういうこと？」
「一万五千年前、ジル星の文明人はこの星を離れた。だが、それは、この星に緑を復活させるために去ったのではなく、汚染されきったこの星を捨て、新たな星を目指したのだ。だが、ジル星人の住めるような星は見つからなかった。食料難や権力争いで、仲間割れを繰り返しながら、一万五千年、宇宙をさまよったあげく、たった一艦になった母艦ジルガだけが、昔、住んでいたジル星に帰って来た。
彼らは、そこに緑の復活した星をみつけた。
だが、もはや彼らは緑の星には戻れなかった。一万五千年の宇宙の暮らしで体質が変わってしまったのだ。
宇宙船の中の無菌状態で育った体は、自然の中のさまざまな菌やビールスに耐えられなかった。だから我々に会ったとき、あれほど消毒に神経質になった」
レミーがブンドルの後を続けた。
「それだけではなく、宇宙船の中で生きることにきゅうきゅうとしていたジルの人達は、音楽も、料理も、子供の作り方も忘れてしまったのね。多分、子供は決められた数だけが試験管で作られ、せまくるしい養育器の中だけで育てられている。だから子供の姿が見えない」
「その通りだ。だが、今はもう何の用もないはずの緑の星に、ジル星人は新しいエネルギーの生まれていることに気がついた。それがビムラー……。瞬間移動の能力があるエネルギーだ。それさえ手に入れれば、宇宙のどこにでも飛んでいき、ジル星人に適した星に移住できる。先住者がいれば

占領すればいい」
ジーがブンドルに言った。
「ですが、私達はとっくに瞬間移動の技術を持っています」
「ハッタリだ！」
ブンドルの声がリンと響いた。
「私は、我々が乗ってきた宇宙船から、あなたの母艦に移るとき、ゴミ袋を宇宙空間に出した。私はゴミ袋をじっと見つめていた。ゴミ袋は、我々の宇宙船をとりかこんでいた船団の灯をつきぬけて急に見えなくなってしまった。おそらくあの大袈裟な宇宙船団は、我々の宇宙船のまわりだけをとりかこんでいた立体映像だ。違うかな」
ジーは、うめくように言った。
「そのためにゴミの袋を……」
「さよう、我々に見せつけた瞬間移動も、それればかりか、あなたの母艦ジルガの威容も、立体映像のハッタリSFX（特殊撮影）にすぎない。
我々が立体映像で見せつけられた科学力は、あなた達にはない。
瞬間移動の可能なビムラーを欲しかったあなた達は、試験管で菌やビールスに強い人間を生みだし、この星に送り込んだ。だが、菌やビールスに強いためには失うものがあった」
女王が、うめくように言った。
「そう、私達は子供が生めない。未来がないのじゃ」
女王は、ブンドルの腕の中から夢遊病のように抜けだした。

「我々は、こんな私達を生みだした母艦の奴らをうらんだ。我々は作られたロボットではない。母艦の奴らと同じ卵子と精子から生まれた人間だ。それがなぜ、我々だけに未来がないのだ……。やがてこの星のエネルギー（ビムラー）に巨大な力があることが分かった。未成長の時期に刺激をあたえれば、この星もろとも母艦まで破壊できる爆発力があるのだ。我々は母艦に反乱をおこし、地下に眠るエネルギー（ビムラー）に最も近いこの火山に要塞を築いた。そして核兵器を仕掛けた。
もし我らに手だしをすれば、この星もろとも、エネルギー（ビムラー）を破壊すると言ってな。やがて我々は、このエネルギー（ビムラー）に別の働きがあることを知った。このエネルギー（ビムラー）は、星をよみがえらせた。この星の生命をいきいきとよみがえらせた。ならば、我々にも生命の神秘をあたえてくれるかもしれない」
女王はベッドに腰を落として続けた。
「母艦の奴らは、この星にバリアを張った。エネルギー（ビムラー）に刺激をあたえる武器や機械の使用を不能にするためだ。そして、我々と同じ体の異星人部隊を送り込んだ」
「それであの町にも子供が……。でも、なぜ、異星人部隊なんてことにした訳？」
レミーにブンドルが答えた。
「反乱軍と異星人部隊は元々同じ体質だ。手を組むことを恐れ、別の種類ということにしたのだ。しかも、反乱軍のときの失敗を考えて、未来など考えぬ即物的で身勝手で、しかも強者に弱い性格、命令に服従するように洗脳した。だが、そんな部隊が勝てるはずもない。そしてもう一つ恐れていることがあった。違うかね、ジー」
「なんのことです」

「あなた達は本物の異星人が来ることを恐れた。もともと自分達が他の星を手に入れようとしてこの星を離れたのだから、当然と言えば当然ですな。異星人が現れて、せっかくのエネルギーを横取りされてはたまらない。そこで、まぎれ込んで来た異星人を収容する意味でも異星人部隊が必要だった。仮にその異星人の本隊が来ても、〝私の星のために戦って立派に死んでくれました。感謝します〟ですむからね。下手に異星人の船を攻撃して戦いになるよりはましだ。

そんなとき、我々が飛び込んできた。

かねて用意のお出迎え用ハッタリ映像でおどして、我々を調査した。我々の背後に本隊らしいものがないことが分かった。ならば、反乱軍抹殺に利用してみようということになった」

「ひどい話ね……ビムラー騒ぎで一体何人が死んだと思っているの？」

レミーの言葉に女王が頷いた。

「そう、ひどい話だ。母艦の人間無視の行為で、我々は男すら失ってしまった」

「あん？」

「我々の男達は最初の十年で死に絶えてしまった。男と女では環境への耐久力が違う。どうしても女が生き残ってしまう。そして今、我々を待つのは死だけだ」

「それで、この乱痴気さわぎって訳……。男なら昔からこの星に住んでいる人達がいるじゃない」

「馬鹿な、誰が人猿のオスなどと……。我々は変態ではない。人間だ」

「アホか、あんたら……」

レミーは本当に吐き捨てるように言った。

「どっちが人間らしいと思ってんの？」

「もはや話にならぬな。我々はケリをつけねばならぬ」
ブンドルが呟いた。
「どうするつもりかな？」
女王が聞いた。
「あなた達が殺しまくった人猿のお礼に来たの。あの人達が人猿なら私も人猿だわ」
「君達はこの星から出ていったほうがいい。君達は一度この星を捨てた。捨てたものは二度と返らない。たとえそれがビムラーでもな」
女王が高らかに笑った。そしてビジョンのジーに言った。
「ジー、聞きましたか、この星から出ていけだと……。たった二人の異星人が……私達を、私達の星から出ていけですと……」
「ここは、あなた達の星ではない。この星はあなた達が捨てた後も、この星で生き、育ってきたもの達のものだ」
女王はベッドの上に立ち上がった。
「いうな！　者ども、殺しておしまい！」
ベッドがはねあがり、女王の姿はその裏側に消えた。
大広間に弓を持った女兵士の一団がおどりこんできた。
「なぜ、さっきの女、つかまえておかなかったのよ」
「女性を束縛するのは気に染まぬ」
ブンドルは懐ろから銃を出し、レミーに渡した。

「わたしの銃を使え」
「あなたは？」
「これで十分！」
ブンドルは腰のあたりをレミーに見せた。ゴムのようなものがぐるぐる巻きにしてある。
ブンドルはそれをほどくと、天井のハリに向かって投げて巻きつかせ、レミーをわきにかかえてジャンプした。
ブンドルとレミーは、祭壇の上から、竪穴の上に吊るしてあるミサイルの上に飛び移った。
「なんなの？　このゴムみたいなもの？」
「ソーセージの皮だ。生は強い」
言うまでもなく、カットナル達も使った動物の腸だった。
ブンドルは大広間に響く声で言った。
「諸君、我々を撃てば、私はこれをビムラーの中に落とす」
レミーがブンドルをつっついた。
「でも、近代兵器にはバリアがきいて動かないんでしょ？」
「ミサイルはエンジンを使わずに落ちるだけだ。それにこの核兵器は、見るところ幼稚なウランがあれば子供でも作れる原始的な原子爆弾だ」
「しゃれ？　それ」
「しゃれを言っている場合ではない」
そのとき、女王が高らかに笑いながら出てきた。

「落とすがよい。そのミサイルに本当に核兵器が入っていると思っているのか？　我々、女に核兵器があやつれると思っていたのか？」
「あんなこと言っちゃって、自慢になることじゃないと思うけどね……。これハッタリだったみたい」
「女という動物は……。まともに科学の勉強をしてもらいたいものだな」
女兵士達が弓をかまえた。
その頃、要塞の外ではけたたましい音が流れていた。
それは、汽笛の音に似ていた。

ますます活性化するビムラーの青白い光が、火山と密林全体を夜空に浮かび上がらせている。
要塞を見上げる岩場の蒸気を吹きあげる穴の上に、木の幹で作られた筒が置かれてあった。
汽笛のような音は、その中から出ている。
堀の中からゲズルがぞろぞろと、その筒の方向へ向かって這っていく。さらにその先の岩場には、もう一つの筒があり、けたたましい音をたてている。
それは、キリーが考えた蒸気圧で鳴る笛だった。
ゲズル達は笛の音に誘導されて、次第に要塞の入口に近づいていく。
気付いた黒ずくめの反乱軍が、サイレンを鳴らした。
その音に勢いづいたゲズル達は、壁をよじのぼって、どんどん要塞の中へ入っていった。
要塞内は、たちまち大混乱だ。

真吾は要塞の壁の上の突起物に、ブーメランで綱をかけた。
綱をピンと張り、こちら側の端を岩場にしっかりと固定させた。
ビムラーの光でただでさえ青白く明るくなった闇に、警戒のサーチライトが、絶えず壁を照らしている。
綱を伝わって登っていたのではすぐに発見されてしまう。
だが、今、綱の上の奇妙なものが走りだした。
二人乗り自転車だ。タイヤをはずし、ホイールだけになったキリーの自転車が、真吾を乗せて猛烈なスピードで駆け登っていく。
要塞の機銃が、二人を追いかけるが、間に合わない。
二人乗り自転車は、要塞の壁の上に乗りあげた。素早く降りた二人は、肩にかけたタイヤをホイールにはめ込んだ。
壁の警備の女兵士達が、銃弾や弓を浴びせかける。
キリーと真吾は壁の突起物の陰にころがり込んで身動きできない。
次の瞬間、女兵士達の背後で爆発が起こり、女兵士達は壁の外に吹き飛ばされた。
上空にカラスの羽音が嵐のように聞こえ、熱気球が降りてきた。
カットナルが叫んだ。
「オーイ、爆弾ソーセージじゃ」
ソーセージの束を三つ気球の中から真吾に投げ渡した。

真吾は仰天した。
「トトト！」
真吾は、落としそうになるのをスライディングして、両手と片足で受けとめた。
ケルナグールが叫ぶ。
「火気厳禁じゃぞ！」
「衝撃だって厳禁なんだよ」
真吾が冷や汗いっぱいで呟く。
「どしたの？　あいつら？」とキリー。
「計算外のプレゼントだ。まさか成功するとは思わなかった……」
真吾とキリーは、ソーセージの束を肩にかけると、自転車に飛び乗って要塞の通路に飛び込んでいった。
迎え撃つ女兵士達を、キリーが自転車をこぎ、真吾が荷台に立ってマシンガンで連射する。
あっという間に大広間に飛び込んできた。
ソーセージの一かけらを投げ、銃を撃つ。
爆発――。
ブンドルとレミーに弓を射かけていた女兵士達が吹っ飛ぶ。
ブンドルとレミーは、すかさずミサイルから飛び降り、真吾が投げたマシンガンを受けとり乱射する。
キリーと真吾は、さらに奥へ自転車を走らせる。

火薬庫がある。
真吾はソーセージの束を持って飛び降りる。
キリーはそう言って、ソーセージの束を一つひったくると、自転車をさらに走らせる。
「オレはやぼ用」
階段をジャンプして降り、黒ずくめの兵士達と反乱軍の上層部とをへだてる扉にソーセージの一片を投げつける。
銃を撃つ。爆発！　扉が壊れる。その向こうはゲズル達に襲われ、大混乱の中庭だ。
キリーはゲズルの群れにソーセージの一片をぶっつけ、銃を撃つ。ゲズルは粉みじんになった。
中庭の隅にある牢獄の前にきて、中の村の女達に下がれと合図する。そしてまた、ソーセージ。
牢獄の扉が開き、女達が飛びだして来る。
キリーは残りのソーセージを壁の前に置き、銃で撃つ。大爆発が起き、壁に穴が開く。
女達は穴から次々に逃げ出していく。
キリーは、それを確かめると、再び自転車に乗り、今来た方向へ走り出す。
その頃、真吾は火薬庫にソーセージの束を置き、手持ちの時限時計を思いつく場所の全てに仕掛けた。
キリーは火薬庫から出てきた真吾を拾いあげると、再び走りに走り、大広間に飛び込む。
二人が通路に突入してから、この間、所要時間、五分三十秒だった。
が、そこで立ち往生した。
大広間には、天井の梁から、祭壇、入口、出口、ありとあらゆるところに、反乱軍の女兵士達と、

いままで広間でたわむれあっていた半裸の女達までが、銃や槍や剣を持って待ちうけていたのだ。
広間の竪穴の傍に、レミー、ブンドル、ケルナグール、そしてカットナルと肩の上のカラスが追いつめられて立っている。
「なぜ、カットナル、お前達までここに」
真吾が言った。
「いや、ま、手伝わにゃいかんと思っての」
カットナルの答えにキリーがうめいた。
「乗りすぎだよな。あんたらだけでも助かりゃいいのに」
「ま、友達は、相身互いじゃけ」
ケルナグールが情けなさそうに言った。
女王が手をあげて叫んだ。
「やれ！　ズタズタに切り裂いておしまい」
「待て！」
真吾が叫んだ。
「あと五分で、この要塞の火薬庫が爆発する。こんなことをしているより、あんた達、逃げたほうがいいんじゃないか？」
「あと五分、面白い、待ってみようではないか……」
真吾とキリーは、怪訝そうに顔を見合った。
四分、三分、二分、じりじりするような時間が経っていく。

「逃げないと本当にあの世行きだぞ！」
真吾が、もう一度叫んだ。
だが、女王はほくそえむだけだ。
一分……10、9、8、7、6、5、……
「本気なんだがな」
真吾は、どうしようもないといった感じで肩をすくめた。
4、3、2、1、0……
何も起こらなかった。
「な、馬鹿な！」
呆然と立ちすくむ真吾に、女王の高笑いがふりかかった。
「爆発など起こるはずがない。お前達が攻撃に来るかもしれぬと聞いたときから、この要塞には強い磁気バリアを流してある。時計などただちに止まってしまうわ」
「ぜんまい仕掛けの時計でもか？」
キリーが、真吾にささやいた。
「金属のぜんまいだ。なおさら磁気に弱い」
お手上げだとでもいうように真吾が言った。
「結果が出たようだな。我が神聖なる大広間を汚した男ども、消えるがよい」
そのときだった。
ズシン！

つきあげられるような振動が大広間を襲った。
「なに!?」
火薬庫が爆発したのだ。
続いて連鎖反応の、小きざみな揺れが大広間をふるわせる。
壁に無数に亀裂が広がり、さらに二度目のつきあげが大広間を襲う。
火薬庫付近では、すでに天井を火柱がつきぬけ、地下の岩盤は粉々になり、炎は火山のマグマまで届いていた。
火炎放射のような火が、通路を駆け抜け、武器庫を、弾薬庫を、そして火口付近から流れでる硫黄の河に火をつけた。
硫黄の燃える青い炎、リンの燃える白い炎、そのほか、黄色、赤、紫、炎の全ての色がそこにあった。
大広間の亀裂は天井に広がり、天井の岩盤が、みるみる崩れ落ちて来る。
ミサイルを支えていた鉄骨が落ち、今、ミサイルは竪穴に落ちていく。
女王は悲鳴をあげた。
「核が、核が落ちていく!」
「なに!?」
ブンドルが女王の肩をゆすって言った。
「今、なんと言った」
「核が落ちてく!」

「あれは、ニセモノだと言ったではないか」
「おどしにニセモノが通じる時代ではない」
「さっきのはハッタリか！」
「もう終わりじゃ」女王がわめいた。
レミーは、恐怖を感じるどころか呆れかえっていた。
「狼と少年、イソップきらい」
誰もが、数秒後の核兵器の爆発を信じた。そしてビムラーを誘発して、この星は消滅する。
だが、そのとき、黒い何かが広間に躍り込んで竪穴を駆け降りていった。
翼のある黒い豹だった。
核の爆発する瞬間、黒豹とミサイルを青白い光が包んだ。
ビムラーがすさまじい早さでふくれあがっていった。
火薬庫の爆発は火山の噴火を誘発し、さらにビムラーを空高く吹き上げた。
密林の青白い光が、吸収されるように火口に降りそそぎ、もうそのときは、すでに要塞は跡かたもなく消えていた。
吹き上げられた青い光は、ぐんぐん空をかけあがっていった。
その青い光の中心に、はばたく黒豹のシルエットが確かに見えた。
青い光は、ジル星上空の母艦の中をつき抜けた。
次の瞬間、母艦のジルガの位置に、反乱軍の要塞が姿を現した。
青い光が、地上の要塞を宇宙空間に移動させたのだ。

二つの物質が同次元にからまりあい、母艦ジルガと要塞は同時に爆発した。
その後には、何ごともなかったように、緑の星が静かに宇宙空間に浮かんでいた。

六人とカラスは、確かに要塞の大広間にいた。
だが、今は宇宙船の中にいる。
それも、彼らがこの星系にやってきたときの宇宙船だった。
この宇宙船は、確か、ジル星の母艦に収納されていたはずだ。
なぜ?
六人の脳裏に同時に浮かんだのは瞬間移動だった。
誰かがこの船の中に六人を瞬間移動させたのだ。
レミーは、それがあの黒豹だということを知っていた。
黒豹は、竪穴に飛び込んだ瞬間、完成段階を迎えたビムラーを吸収し、新しい存在になったのだ。
地球の真田ケン太と同じように……。

だが、この宇宙船は今、どこにいるのだろう。
意識ははっきりしているが、時の感覚がつかめない。
六人の意識に黒豹の声が聞こえた。
「今、私達は、ジル星のソウル達と新しい星をめざしている……。一緒に来ますか?」
六人は同時に答えた。

「冗談じゃない、移動をやめろ。俺達ゃ、降りる」
青白い光が船内を包み、気が付くと、宇宙船は宇宙空間に静かに浮かんでいた。
「おい、おい、降ろしてくれたのはいいけど、駅じゃないのかよ」
キリーが口をとんがらかした。
「それほど不親切じゃなさそうだ。見ろよ」
真吾が窓の外を指さした。
遠くに星が見えた。
地球でないことは確かだったが、青く光り、どうやら海があり、大気も地球型のようだった。

エピローグ

宇宙船はゆっくりと青い星へ向かっていく。
レミーは一同に黒豹の話をした。
真吾が聞いた。
「すると、あの星で一番進化していたのは、その黒豹だったっていうのか？」
「多分ね。ジル星人は、あの星を捨ててしまったし、村の人達は宇宙に翔んでいくには幼すぎたのかもしれないわ」
「そんなにすごい豹だったのかね」
キリーが聞いた。
「さあね、豹は豹よ。私には分かんない」
「分かんないようなのが、宇宙へはばたいた訳か……」真吾が呟いた。
「人間に理解できるようなすごさだったら、それはすごいとは言えないんじゃないかな。彼は豹だもん。豹として、きっと素晴らしいところがあったんじゃないかな、きっとね」
レミーはあの豹のことを、彼と表現している自分に気付かなかった。
「宇宙に飛びたったのが、ワシのカラスだったらよかったのに……」
カットナルがカラスを見つめて言った。
カラスはすまなそうに「カァ」と答えた。

ケルナグールは、今は、とっても悔やんでいた。

せっかく大切に持ち歩いていた宝石の袋を、熱気球の中に置き忘れてきたのだ。

今、手ににぎりしめているのはフライパンだった。

「ま、わしの命を何度も救ってくれたけに、宝石よりは役に立ったわい」

そう思って自分をなぐさめることにした。

ブンドルは青い星を見つめていた。

「我々は、ビッグソウル（宇宙の意志）の手の中でもてあそばれているのかもしれぬ。善悪はどうでもよい。私をあやつろうとするなら、それは私の敵だ。たとえそれが宇宙の意志であろうと、私は許さぬ。戦いは敵が壮大であればあるほど美しい……」

ブンドルは微笑した。

「でもさ、真吾」

レミーが聞いた。

「どうして、火薬庫は爆発した訳？　時限装置は効かなかったんでしょ」

「いや、効いたよ。ぜんまい仕掛けの装置のほかに、とっておきの時限装置を仕掛けたのさ」

「とっておきの時限装置？」

真吾はしばらく黙っていて、それからぼそりと言った。

「蚊取り線香——」

六人とカラスを一羽乗せて、宇宙船は青い星へゆったりと進んでいった。

（完）

あとがき

首藤　剛志

「ゴーショーグン」のＰＡＲＴ４ができあがりました。
某「何とか戦艦」もまっ青です。
元々、ＰＡＲＴ２で終るつもりの「ゴーショーグン」が、どうしてこんなことになったのか、アニメージュ編集部の陰謀としか言いようがありません。
本来、「ゴーショーグン」のＰＡＲＴ１で登場人物の何人かは、死ぬ予定になっていました。死ねば格好よく人気もあがるだろうという暗い制作サイドの陰謀だった訳ですが、ものの見事に、登場人物達が死ぬのを拒否しました。「死んでも生きてやる！」と言いだしたのです。
気弱な原作者は、登場人物におどされて、せっかく用意した凶器をひっこめざるをえなくなってしまいました。
かくして当分ロボット「ゴーショーグン」の出演しない「ゴーショーグン」が続きそうです。
六人組がこれから何をするのか？
彼らのような自由な流れ者を支配するのは、運命という名の人間にはどうしようもない力だと思います。
たぶん、彼らは、それとの戦いを始めることになるでしょう。
この宇宙を作りだしたビッグソウルとの戦い。これが、当分、彼らのテーマになる筈です。

そして、ビッグソウルとの戦いに決着がついたとき、彼らは、運命などに左右されない新しい人間の星を作ることになるでしょう。
それが本当の新人類のような気がします。
これから先、何冊、「ゴーショーグン」が続くか、編集部の陰謀次第ですが、原作者は、こうなったら、テッテー的に続けるつもりです。
「ゴーショーグン」PART1のラストシーンにSee you again なんて書くんじゃなかったとも思いますが、完結編とも、さらばとも、完璧編とも書いた訳ではないし……続けてもいいですか？
みなさんの返事を期待しています。
とりあえず、今回も——
See you again!

アニメージュ文庫

4度戦国魔神（たびせんごくまじん）ゴーショーグン

覚醒（かくせい）する密林（みつりん）

N-007

1984年8月31日 初版

著者 首藤剛志（しゅどうたけし）

発行者 尾形英夫（おがたひでお）

東京都港区新橋四—一〇—一〒一〇五

発行所 株式会社徳間書店

電話〇三(四三三)六二三一(大代)

振替 東京四—四四三九二番

印刷
製本 大日本印刷株式会社

〈編集担当 高橋 望〉

ISBN4-19-669529-9C0193（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

首藤剛志作品

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
またまた戦国魔神ゴーショーグン 狂気の檻
いつかきっとPEACH BOOK
(「ミンキーモモ」より)
近刊
絵本「魔法のプリンセス
ミンキーモモ」(仮題)
(絵/わたなべひろし&桂子)

カバーイラスト=天野喜孝
カバーデザイン=真野薫
カバー印刷=真生印刷(株)

徳間書店
アニメージュ文庫
ISBN4-19-669529-9 C0193 ¥380E 定価380円